恋姫†無双　周回人生
独立ルート

空念

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

蜀の将、楊燕は散った。御使い・一刀に妻を盗られた末に、反乱を失敗するという最悪に不名誉な結末で。これで地獄行きかと思われたが、気が付けば前世の意識を持ったまま生まれ変わっていた。しかも、同じ時代の同じ幼少期に。楊燕は誓う。今度は同じ轍を踏むものか、と。

※別サイトで連載していたものを、あらすじから何まで大幅に変更・訂正した上での投稿（元のは削除済）

目次

第一章　益州の覇者

第零話 …… 1
第一話 …… 5
第二話 …… 8
第三話 …… 14
第四話 …… 17
第五話 …… 22
第六話 …… 26
第七話 …… 31
第八話 …… 35
第九話 …… 39
第十話 …… 43
第十一話 …… 48
第十二話 …… 52
第十三話 …… 57
第十四話 …… 61
第十五話 …… 66

第二章　涼洲と洛陽

第十六話 …… 71
第十七話 …… 75
第十八話 …… 80
第十九話 …… 84
第二十話 …… 89
第二十一話 …… 94
第二十二話 …… 99

第二十三話 103
第二十四話 107
第二十五話 113
第二十六話 118
第二十七話 123
第二十八話 127
第二十九話 134
第三十話 139
第三十一話 143
第三章　集う諸将
第三十二話 147
第三十三話 152
第三十四話 156
第三十五話 161
第三十六話 166
第三十七話 172
第三十八話 178
第三十九話 185
第四十話 190
第四十一話 193
第四十二話 198

第一章　益州の覇者

第零話

彼は今、追い詰められていた。付き従う部下は既に全滅し、彼自身も城壁の隅へと追いやられていた。

「楊燕、お願いだ。諦めて投降してくれ」

彼を包囲していた集団の中から、男の声が発せられる。だが、それに対し、彼――楊燕と呼ばれた男は血だらけの剣を構えたまま、徹底抗戦の様子を崩さなかった。

「御託はいいから殺せ。だが……」

楊燕は既に死を覚悟していた。主を裏切って反乱軍を興し、ここまで騒ぎを大きくしたのだ。しかも、その反乱は上手くいかず、脆くも敗れ、絶体絶命の淵まで追い詰められたのだ。彼には無様に命乞いをして生き恥を晒すという選択肢は無かった。

全身を斬られ、血みどろの身体。これ以上、戦闘に耐えられる身体では無くなっていた。付き従っていた部下たちも敗死していった。それでも、楊燕は構えを崩さない。その瞳はなおも力強さを失わず、投降を促した男を睨み据えていた。

「……北郷一刀、お前は許さねえ」

事の発端は、北郷一刀の種馬ぶりであった。次々と女武将を誑しこんでいくその姿に、楊燕がキレてしまったのだ。

決して、嫉妬とかそのようなくだらないものではない。ハーレムを作りたければ、勝手に作ればいい。しかし、楊燕の愛する妻までもが、一刀に奪われてしまった事が、逆鱗に触れたのだ。

妻と共に、劉備の傘下として蜀の平定に少なからず貢献し、三国鼎立に尽力。そして、その後に迫って来た五胡との戦闘でも最前線で戦い抜き、蜀への侵入を何とか防いだ楊燕。しかし、その五胡との戦闘が問題であった。その戦闘の期間は五年。強敵との戦いに万一を考えて妻を成都に残したのだが、五年という歳月は、人の心を変えさせるには充分な時間だった。

五年も妻をほったらかしにしていた楊燕にも責任があるのだが、まさか人妻に、それも部下の妻にまで一刀が手を出すとは思わなかったのだ。やっとの思いで五胡を撃退して成都に戻り、その事実を知った時の絶望感は、言葉に表せない。楊燕が反乱を決意したのも、ある意味では仕方ない部分があった。

しかし、その結末は惨憺たるものであった。配下の兵たちは楊燕に従ったものの、裏切り者が出たために計画が露呈した。バレたのなら先手を打つとばかりに破れかぶれ

で反乱を起こすも、当然ながら無計画に近い行動が成功する筈も無く、一刀配下の女武将たちに攻め込まれ、追い詰められていた。

「……北郷一刀、お前は許さねえ」

そう言って、剣を振りかぶって男に迫る楊燕。彼とて歴戦の勇士であり、この時代に珍しく、男ながら武将にまで上り詰めた者である。血だらけで意識も朦朧と仕掛けていたが、足取りはしっかりしていた。

「させぬっ！」

槍を持つ女武将たちが一刀の前に立ちふさがり、楊燕を止めに入る。だが、それくらいでは止まらない。剣の一振りで邪魔者を跳ね飛ばし、いよいよその剣が一刀に迫ろうかという時、飛んできた矢が楊燕の胸を貫いた。

「楊燕っ!?」

楊燕に刺さった矢を見て、叫び声をあげる一刀の、その目は既に涙目であった。彼自身、まさかこのような結果になろうとは予想していなかったであろう。ただ、自身の女誑しの才能が、このような結末を迎えようとは。

矢が飛んできた方向を見て、目を見開く楊燕。その瞳に映るのは、憤怒か、悲しみか、絶望か。

「紫苑……」

様々な感情が入り交じった表情で、楊燕は妻の名を呟いた。しかし、それっきり言葉を発することなく、やがて彼の意識は奥深くへと閉ざされ、消えていった。

第一話

目が覚めたら、そこはかつて見知った天井だった。

「……ん？　ここは――」

生家、楊家荘。楊燕が幼少時代に過ごした家の一室だった。その懐かしい景色に、楊燕はしばらくの間、感慨にふけると同時に、頭の中に疑問が沸き起こる。

「ここは、地獄じゃないのか？」

御使い・北郷一刀への反乱が失敗し、矢を射られて間違いなく敗死した筈。それなのに、周囲の景色が想像していたものよりも大分違っていた。戦場の習いとはいえ、これまで多くの人を斬ってきたのだから、地獄行きを覚悟していたのだが……。

あまりに地獄らしさの欠片もない景色に、楊燕は戸惑う。それどころか、やけに現実的なものさえ感じていた。

「……痛っ」

一応、夢ではないかと自分の頬を強く抓ってみたものの、ただ痛いだけであった。この事から、自分は今も生きているのだとようやく覚る。

「蓮夜（れんや）、いつまで寝てるの。早く起きなさい」

しばし物思いに耽っていると、楊燕の真名を呼びながら一人の女性が乱入してくる。その風貌、間違いなく記憶に残っている母のものであった。

「……母、なのか？」

「やだ、まだ寝ぼけてるのかしら。頭がしゃきっとするくらい、今日はみっちりと鍛錬ね」

強引に布団をはぎ取られ、強制的に起こされる楊燕。そのような事を言われ、やけに子ども扱いするのだなと考えていたが、ふと自分の身体を見下ろす。

「……へ？」

素っ頓狂な声をあげる楊燕。それも無理からぬ話で、自身の身体が明らかに小さくなっていたのだから。

（これは、幼少時代に戻ったという訳、か？）

自身の置かれた状況をやっと理解し始めた楊燕。その様子を見て、母は内心でため息をつく。

「全く……今日の蓮夜はどうかしてるわ」

幼少時代の過去に遡るという、とんでもない状態になった楊燕。しかし、状況が分かると彼は内心で喜んだ。

「つまり、人生をもう一回やり直せるという訳だな」

矢を撃ち込まれた時、最後に考えたのが、人生をもう一回やり直せるなら、というものだった。主に妻を寝取られ、反乱に失敗して敗死した末、後世に汚名を残す。武人にとってこれほど不名誉な事は無い。願わくば、このような糞みたいな人生を無かった事にしたい。その願いが叶ったのだろうか。

過去に遡ったのなら、やるべきことは唯一つ。

「――北郷一刀を、潰す」

その為には、まず自分が力を付けないといけない。一度目の人生のように、ただ漠然と日々を過ごしていたのでは、悲惨な人生を再体験するばかりである。

迫りくる戦乱に備え、まず自分が力を付ける。そして、北郷に付け入る隙を与えない。欲を言えば、前世のように彗星のごとく現れる北郷を早いうちに始末できれば最良である。しかし、思い返せば北郷が現れたのは幽州であり、しかも正確にどこに現れるか分からない。その上、今自分が居るのは羌族と境を接する益州の辺境の地。北郷の出現を待ち受けるのは物理的に不可能。ならば、先に自分が益州を制覇し、北郷の勢力を潰すのが現実的な方針であろう。

もう、あんな悲惨な最期を迎えたくない。その一心で、楊燕は来る日も来る日も剣を振り続け、夜は実家の軍学書を読み漁った。

第二話

楊燕が新たな人生を始めてから、数年後。

毎日の鍛錬が功を奏したのか、彼は驚くほどの偉丈夫に成長していた。剣技や体力だけなら、前世を遥かに凌ぐであろう。同年代の者に比べたら、頭二つも三つも抜けている。

だが、彼自身も自覚しているように、足りないものが一つあった。それは、実戦経験である。

いくら剣技に優れようとも、実戦となると話はまた別である。戦場では、剣技に秀でた者が生き残るとは限らず、下手な者が戦場で巧者を斃してしまう事だって珍しくない。実際に、前世ではいくら剣の扱いが上手くとも、臆病な者は例外なく生き残れていない。

心構えだけで言うならば、楊燕自身は問題無いつもりでいる。しかし、毎日の鍛錬は欠かしていないものの、実戦から長らく遠ざかっているのだ。この状態で戦場に出れば、不覚を取ることだってあるだろう。しかし、その実戦経験をどのように積むかという部分に関しては、楊燕は心配していなかった。

ここ数年の間に漢王朝の腐敗が表面化し、賄賂などの汚職が横行。当然ながら統治もおろそかになっていた。役人は自身の利益だけを求めて貪り、民衆は重税に食えなくなって乞食と化す。当然、生活に困窮して各地で賊となる者が続出し、世の中が乱れ切っていた。だが、これらの賊を討伐しようにも、肝心の漢王朝が腐りきっており、益州など一地方の国境に官吏の手など回せる筈もない。それどころか、暴徒と化した民衆に役人が殺される事も珍しくなくなっていた。

事実、最近も益州の刺史であった郤倹が悪政を行った為、反乱が起きて殺されている。そのゴタゴタの中、新たな役人として劉焉が益州入りをしたものの、在地豪族の抵抗がすさまじく、毎年のように戦端が開かれていた。その隙を狙ってであろうか、北からも羌族がたびたび侵攻してきた為、益州は近年稀に見る地獄の様相を映し出していた。

しかし、これらの状況は、楊燕にとって絶好の機会であった。彼は前世の記憶によって、黄巾の乱によって漢王朝の権威が地に堕ち、やがて漢王朝が滅んで戦乱の世になることを知っている。彼は戦乱が勃発した段階で益州に覇を唱え、ゆくゆくは天下に名乗りをあげるつもりである。しかし、今はまだ劉焉治下の一地方の太守の息子でしかなく、劉焉の影響力が強いため、表立った行動は取りにくい。自身にまだ何の力も無い以上、今は地道に戦場で名をあげ、少しずつ力を付けるしか方法は無かった。

＊＊＊＊＊

「まだ若いのに、すごい働きぶりだな。頼もしいぞ」

戦勝報告の為、眼前に控える楊燕に声をかけるのは、益州の支配者・劉焉。近年、益州牧として赴任してきた女である。劉焉に声をかけられ、楊燕は少し緊張の色を見せる。

劉焉の事も、前世の記憶からどのような者かは知っている。楊燕と同じく、劉焉も王朝を内心では既に見限っており、密かに天下を狙っていた女傑である。彼女は益州入りの際、反抗的な在地豪族を次々と滅ぼし、漢中を攻めて洛陽との連絡路を絶った上で、益州に一大勢力を築き上げていた。そのような者から声をかけられたのだ。体に緊張が走ってしまうのも無理はない。楊燕は後に現れる北郷との争いに備え、益州に覇を唱える気でいるのだ。その思惑を今、劉焉に覚られる訳にはいかなかった。

しかし、劉焉の楊燕に対する態度は、信頼のおける部下に対するもののそれであった。なぜなら、楊一族は早くから劉焉の下に馳せ参じ、益州統一戦争に参加して転戦を重ねていたのだから。その中でも、楊燕は劉焉旗下の特攻隊長として何度も勝利に貢献し、今や一番の有望株として周囲に認識されていた。そして、今回も楊燕は異民族との戦闘で相手の将を討ち取るという成果をあげていた。

「お褒めに預かり光栄です」
劉焉に対し、丁重な言葉遣いで返す楊燕。主の機嫌を損ねないようにと気を遣っての事である。
「よい。そんなに畏まるな」
しかし、面倒そうに返す劉焉。礼やしきたりが嫌いな彼女らしい発言である。楊燕の慇懃な態度が、逆効果であった様子。しかし、彼女はそれ以上楊燕を咎めることはしなかった。
「今回も、一番の働きをしたそなたに褒美をやろう」
「ありがたく頂戴いたします」
劉焉の言葉に、淡々と答える楊燕。これで恩賞沙汰が終わるかと思われたが、次の劉焉の言葉が、楊燕を混乱の坩堝に突き落とした。
「そういえば、そなたはまだ独身であったな」
「はい。それが何か？」
何故、その問いが来たのかと戸惑う楊燕。
（この流れは、まさか――）
「妾の遠戚に良い娘がおるのじゃが、そなたに娶せようと思ってな」
「良い娘、ですか……」

劉焉の言葉に、嫌な予感しかしない楊燕。良い娘とは言うものの、前世の通りなら、その娘とは――。

「その娘、とは？」

「黄家の娘、黄忠じゃ」

（……最悪や。やっぱりかよ）

劉焉の言葉に、内心で苦い顔をする楊燕。劉焉のいう娘とは、やはり紫苑の事だった。前世の裏切られた記憶がどうしても払拭できず、全く気が進まないのだ。

「劉焉様。俺は……」

「黄忠は誰もが羨む美女であるし、向こうも縁談に乗り気なのじゃぞ。まさか、妾の仲人が不服とは言わぬであろうなぁ？」

嫌だという気持ちが顔に出ていたのであろう。楊燕は断ろうとするものの、劉焉に睨まれて思わず黙り込んでしまう。

本音を言えば、即座に断りたい話である。楊燕は、どうしても結婚に対して前向きになれないでいた。しかし、縁談を断る理由を正直に話したところで、前世で裏切られたなどという理由が通るとは思えない。そんなことを言えば、間違いなく狂人扱いである。

今は劉焉の機嫌を損ねる訳にもいかず、かと言って即座に良い知恵も浮かばず、楊燕

はどうしたらいいのか分からなくなっていた。
「もう年頃の癖に、聞けばそなたは縁談を片っ端から断っているそうではないか。妾の命令じゃ。いつまでもフラフラしておらず、そろそろ身を固めんか」
「……少し、考えさせてください」
結局、楊燕は劉焉の圧力に圧され、冷や汗だらだらになりながら上記の言葉を返すのに精一杯であった。

第三話

劉焉に縁談を持ち掛けられた楊燕は、悩みに悩んだ。劉焉が持ちかけた縁談の相手が紫苑だったのだから。前世の記憶を持つ彼は、どうしてもこの縁談を受け入れるというのが難しく感じていた。今まで片っ端から縁談を断って来たのも、どうしても前世の悪夢が払しょくできなかったから。結婚するにしても、もっと相手の女性を見極めてからだと思っていたのだが。

（劉焉の奴、何てことしてくれたんだ……）

今の楊燕にとって、劉焉の行いはまさに有難迷惑だった。まさか、劉焉から紫苑との縁談話を持ちかけられるとは思わなかった。前世ではそのような事は無く、明らかに前世の時と展開が違っている。

思えば、この現世は楊燕が生きていた前世とは違う点が多々あった。その最たるものが、紫苑と劉焉が遠戚だという事である。楊燕は最近になって気付いたが、どうやら全く同じ過去に遡ったという訳ではなく、前世に似た違う世界に舞い降りたらしい。大まかな部分では展開は同じであるものの、細かい部分が違うのもそのような理由であろう。

楊燕が縁談を受けるかどうか迷っているのも、もしかしたら紫苑の性格が前世とは違う可能性があるからだ。前世の紫苑はとにかく奔放で酒好きな女であり、酔うと何を仕出かすか分からない女であった。よく、あのような女を嫁にしたものだ、と楊燕は思い返していた。しかし、現世での紫苑とはまだ会った事は無いが、性格が微妙に違う可能性がある。

紫苑との縁談話に苦い顔をしつつも、未だ紫苑への思いが消えていないのも楊燕自身が自覚している。未だに寝ても醒めても、紫苑の事が頭から離せない時があるのだ。愛憎は表裏一体とはよく言ったものであり、楊燕は自分が紫苑に対してどのように思っているのか、混乱して最早答えを見出せないでいた。

しかし、この縁談は悪い話ばかりではなかった。自身の目標と状況を考えれば、受けるべき類のものであった。

まず、この世界での紫苑は劉焉と遠戚であり、結婚すれば楊燕も劉焉の遠戚という事になる。楊燕は前世の記憶から、劉焉の死期が近い事を知っている。彼は劉焉が死に、子の劉璋が跡を継いだら、反旗を翻して益州を乗っ取るつもりでいた。しかし、家臣だった者が益州を制覇するとなると、大変な労力が必要である。それを考えると、外戚としてあらかじめ益州での影響力を高めた方が、まだやり易いだろう。

それに、良い点がもう一つあった。それは、黄権の存在である。これも前世の記憶に

なってしまうが、黄一族の一人である黄権は、楊燕が知る限り最も有能な武将であった。前世では黄権とは莫逆の友というべき仲であり、共に数々の戦闘に参加していた。その実力は楊燕が一番良く知っている。内政ならば諸葛亮や龐統の方が優れているかもしれない。しかし、戦となれば楊燕は黄権以上の者を知らない。

益州制覇にあたっては、その黄権の力抜きでは考えられない。その為、楊燕は黄権と知り合う機会を窺っていたのだ。紫苑との縁談を受ければ、それだけで黄一族とは姻戚関係となり、黄権に近づきやすくなるというもの。

これらの理由から、縁談を受けるべきである事は明白である。ただし、楊燕の感情を度外視した理論であるが。その為、楊燕は悩みに悩んだ。

そして、楊燕は遂に結論を出す。その表情は、今まで参加したどの戦闘を切り抜けた時よりも、酷く憔悴しきっていた。

第四話

劉焉の仲立ちによって成立した、楊燕と紫苑の結婚式。出席者は黄権をはじめとする両家の一族や、呉懿・呉蘭・雷銅などの劉焉配下の主だった将である。その華やかな宴の場を、幼い子ども達が駆け回っていた。

「こら、こんな所で走ってはいかん」

周囲の大人たちが子どもたちを止めようとするも、はしゃぎ騒ぐ子ども達には効き目が無い。

「楊懐、待てったら。そんな所に上るな！」

「ちょっと楊戯、それは新郎新婦用の席だ！」

普段、益州各地に散らばっており、同世代の親戚の子と遊ぶ機会が無い為、久々に会えたのが嬉しいのだろう。守役の大人達に連れられ、楊家の祝い事に集まって来た楊一族の子どもたちは、はしゃぎにはしゃいで暴れまわる。

「はっはっは、良いではないか。子どもはそれくらい元気でないとな」

「……劉焉様、この惨状を見てよく笑ってられますね」

余裕を見せる劉焉の様子に、側近が呆れたようにため息をつく。しかし、今日は何と

いってもめでたい日である。子どもを叱って追いかける大人たちも、どこか心が弾んでいるように見えた。

だが、そんな祝い事の当事者である楊燕は、それどころではない。彼は、そんな走り回る子ども達を見て、余計に心を曇らせるのであった。

楊懐。先の益州統一戦争で戦死した兄の子。現在は益州白水に住まい、守り役に育てられながら未来の武将として英才教育を受けている。今は教育が行き届いているのか心配になるくらい腕白だが、やがて楊一族の長である楊燕旗下の将として各地を転戦。最期は、親友の高沛と共に楊燕の反乱に従い戦死。

楊戲。病死した姉の子で、武陽にて学問を志す幼子。楊懐と違って運動は苦手だが、頭がよく回る子どもである。劉備傘下では裁判を司る役職に就いていた。楊燕の死亡後はよく分からないが、おそらく逆賊に連なる者として冷遇されたであろう事は想像がつく。

他にも、同じく武陽の楊洪や巴郡の楊宗など、親戚の子どもたちを見るたび、楊燕の気持ちは沈んでいく。前世では北郷への復讐の念に縛られ、これら一族の者たちを顧みる余裕は無かったが、皆はどのような人生を歩んだであろうか、と今更ながら心を痛めるのであった。

楊一族に厄災をもたらしたのは、後先を考えなかった楊燕の責任だが、そもそも、そ

の原因を作ったのは何なのか。楊燕は鋭い目つきで隣に控える新妻・紫苑を見やる。前世とは別世界である以上、この紫苑に非は無い事は分かっている。分かっているが、どうにもやりきれない気持ちが残るのもまた事実である。そのような心境であるから、周囲の大人たちとは違い、楊燕の心が晴れる事は無かった。

しかし、紫苑との縁談を受けたのは、楊燕自身の意思である。再び同じ過ちを繰り返さない為、やがて来るであろう北郷に備え、自分自身の未来を切り開く為、自分の心を犠牲にして縁談を受け入れたのだ。それならば、自分自身の感情を押し殺し、泣き言恨み言は口にしない。親や兄姉を失っている今、自分自身が楊家の長として、一族を引っ張っていくのだ。そのような強い決意で挑んでいた。

だが、心は内に秘めても、表情まで明るくする余裕は、楊燕には無かった。彼の表情は祝宴の間中、一切変わることなく、笑顔すら見せることは無かった。

＊＊＊＊＊

心をガリガリ削られるような宴も佳境を迎え、周囲の大人たちはやがて酒盛りの時間を迎えたかのような様子を見せる。楊燕の心とは裏腹に、酔いに任せて荒れ狂う大人達。

「皆だらしないであろう。誰か妾と飲み比べをする奴はおらんのか」
「劉焉様、飲みすぎですって」
もはや、祝いの場はただの酒宴となり、酒乱たちの阿鼻叫喚と化していた。そのような地獄絵図を後にし、楊燕と紫苑は館の用意された部屋へと向かうこととなる。いよいよ、新婚夫婦水入らずの時間がやってきたのだ。
（ついに、来てしまった……）
楊燕は、自身の心がいっそう沈んでいくのを感じていた。本来なら、新婚初夜を迎え、愛し合う夫婦で嬉し恥ずかしキャッキャウフフな時間なのだが、どうにも心は沈んだままである。
自身を押し殺すと覚悟を決めた以上、紫苑の事をこれから抱かなければいけない事は分かっている。分かっているが、どうにも出来る気がしなかった。
覚悟を決めた筈なのに、今更女々しいだろう。と自分に発破をかける楊燕だが、こればかりはどうしようもない。
片方に浮気された夫婦によくある話だが、心では再構築を決めていても、身体の方は裏切られた時のトラウマを覚えてしまっていて、なかなか元のように愛し合える訳ではない。いくら世界が違うとはいえ、楊燕の心境はいわば再構築に挑む者のそれであり、身体が思うように動かないのも仕方無かった。ましてや、楊燕は紫苑に矢を射こまれて

最期を迎えたのだ。前世での事とはいえ、身体が完全に覚えてしまっていた。こればかりは、楊燕を責めるのは酷というものだろう。

初夜の手順としては、お互いに真名を交換し、それから事に及ぶのが通常の流れである。しかし、何とか真名は交換できても、そこから先にはどうしても進めなかった。

「今日は疲れた。俺はもう寝る」

結局、楊燕は紫苑に一切手を出さないまま寝転んでしまう。今までの心労がどっと押し寄せて来たのだろう。すぐに彼は睡魔に襲われ、そのまま深い眠りに落ちてしまった。

第五話

『白い流星と共に天の御使いが舞い降り、やがて乱れた世を治めるであろう』

都で凄腕と評判の占い師・管路の予言である。数年前から、この予言が国中を駆け巡っていた。民衆はこの予言を本気にしていない者も多かったが、天の御使いの噂があっという間に広がったのも、救世主を求めるという感情が多いからであろう。

事実、近年は世の中が乱れ切っており、各地で賊の数が増えていく一方であった。そして、それは益州も例外ではない。

「やれやれ、どこもかしこも御使いの噂だらけだな」

楊燕の隣で、黄権が呆れたように呟く。彼らは領内に出没した賊の討伐遠征に出ており、今は劉焉の下に帰還する途中であった。

「しかし、蓮夜があんなに怒るとはな。たかが噂だろう?」

「たとえ噂でも、不届きであろう。俺は御使いを認める訳にはいかん」

実は楊燕、軍を駐屯させた村で、御使いの噂をしていた者たちを一喝していたのだ。それも、烈火のごとく怒った為、黄権も驚いた程である。

「まあ、確かに天の御使いを名乗るなんて、不敬も甚だしいからな」

この時代、天の御使いは皇帝と同義であり、それを名乗る事は皇帝にとって代わる事を意味している。当然、天の御使いを名乗るだけで殺されてもおかしくない。楊燕らの場合、主の劉焉が漢王朝との関係を遮断して半ば独立体制を築いている為、関係無い所で御使いを名乗られた所で、痛くもかゆくもない。ないのだが、楊燕は御使いという言葉に対して神経質になっている。少なくとも、黄権にはそのように映っていた。

「それにしても蓮夜、やけに御使いの事を気にするのな」

お前も天下を狙ってるのか、と黄権が茶化す。近年、御使いの噂が流れて以降、曹操や孫堅など、天下を狙う群雄が御使いの出現を待ち受けて、密かに各地に手の者を送り込んでいるという噂もある。そんな噂が流れても取り締まる力が無い地点で、漢王朝の終焉が近い事が窺える。

黄権の指摘する通り、楊燕も各地に部下を派遣して御使いの事を調べさせていた。だが、楊燕の目的はもちろん、御使いを取り込む事ではない。

前世とは微妙に違う部分があるので、御使いがどこに出現してどの勢力に入るのか、確認の意味で部下を派遣していた。もし、領内に御使いが現れたら、即座に始末するつもりである。そして、他領内に現れた場合、御使いを取り込んだ勢力を徹底的に潰す。

もちろん、楊燕は黄権に自身の考えを伝えていない。だからであろうか、黄権には楊燕の御使いに対する執着が少し異様に思えた。

「なぜ、御使いにそんなに拘る？」
「御使いが、俺らにとって不倶戴天の敵となるからだ」

＊＊＊＊＊

探らせていた御使いの情報が、ついに手に入る。場所は幽州、やはり劉備勢力であった。賊との戦いの中で、義勇軍を率いる劉備の隣に、変わった服を着た男を見た者がいたのだ。
しかし、大陸は広い。その情報を持ち帰った部下が楊燕の下に帰る頃には、劉備勢力は無視できないくらいに大きくなっていた。
「やはり、劉備の所か……」
楊燕は少し苦い顔をする。その表情はまさに、厄介なことになったと言わんばかりである。
事実、楊燕にとって、少し厄介な状況になりつつあった。あらかじめ目を付けていた、諸葛亮と龐統を自陣に引き込む事が出来なかったのだから。
益州統一戦争や羌族との闘い、そして賊との交戦など、毎日のように戦場に出ることが多かった為、当初は余裕が無くて人材集めが思うように進まなかったのだ。

もちろん、楊燕はあらかじめ水鏡塾に使いの者を送り、何とか将来の軍師候補を囲い込もうと動いていたものの、自身が荊州の水鏡塾にまで遠征する余裕は無く、しかも早い段階で上記二名は既に旅に出てしまっていた。前世の通りなら、今頃軍師二人は劉備・御使いの陣営に居るであろう。

だが、収穫が全く無かった訳ではない。二人は逃したが、水鏡先生に徐庶という塾生を紹介してもらう事に成功したのだ。正直に言えば、楊燕は徐庶の事はあまり知らなかったのだが、水鏡先生によれば徐庶も伸びしろが大きな子という事もあり、薦めに従って採用した。

このように、大きな魚は逃したものの、徐庶が陣営に加わった事で、ようやく軍の基礎が出来始めていた。

第六話

益州の北隣にある、涼州にて。

荒野のど真ん中を、小規模の軍勢が隊列を成して行軍していた。楊燕の部隊である。隊列の真ん中で馬を操る楊燕は、幼女を後ろから抱えるようにして二人乗りで馬に乗っていた。

「どうだ香蓮（こうれん）、少しは慣れたか？」

「ひ、ひゃぃっ!!」

楊燕の問いかけに、香蓮と呼ばれた幼女――徐庶はカミカミ口調で答える。彼女はどうやら、楊燕の問いに答える余裕もなさそうで、馬の鬣にしがみ付いたまま固まってしまっていた。

徐庶にとって、馬に乗る事は生まれて初めての経験である。当然、行軍の経験も皆無である。そもそも、朱里や雛里の妹弟子として水鏡塾で缶詰め状態で勉学に励む日々だったのだ。当然、いきなり馬に乗れる筈も無い。

しかし、軍師として楊燕の下に来た以上、部屋に籠りっきりではいられない。当然、従軍しなければならない時が来る訳で、馬くらいは乗れないといけない。だが、馬に触れ

た事すらなく、一人で乗る事など出来る筈も無く、こうして楊燕が補助をしているという状況である。

そんな楊燕の様子を、少し離れた所で見守る女性が一人。楊燕の妻、紫苑である。行軍中であるにも関わらず、彼女は楊燕に抱えられるようにして馬に乗る徐庶を羨ましそうに見ていた。

（私だって、あんな風に触れて貰った事無いのに……）

結婚して以降、未だ楊燕に触れて貰った事が無く、紫苑の不満が顔に出始めていた。もしかして、楊燕は幼女趣味なのかと少し疑うものの、彼の表情は至って真剣で、とても茶化せるような雰囲気ではなかった。彼の表情は氷のように研ぎ澄まされており、とても邪念が入る余地は無さそうである。紫苑は楊燕に不満をぶつける事すらできず、内心で悶々とした気持ちを抱えながら、彼を見守る事しか出来なかった。

そして楊燕は、爛と光る眼で前方を見つめていた。彼は劉焉の命令で軍馬の調達に出向いており、今はその帰り道である。調達した軍馬を率いながらも、彼は周囲の警戒を怠らない。今は世の中が荒れ果てており、いつ賊が出るか分からない状況である。特に、軍馬を調達した帰り道などは格好の的であり、その軍馬を奪おうと賊が手ぐすね引いて待っているなんて事は珍しくない。いや、近隣の豪族が賊と見せかけて襲ってくる

事もあり、気の休まる時が無い。もしかしたら、西涼の実力者である董卓が出向いてくるかもしれなかった。

しかし、実は楊燕はそれを狙っていた。劉焉の命令とは別に、彼の目的はもう一つあった。それは、涼州を治める董卓の勢力と鉢合わせる事である。

今回の軍馬調達にあたって、当然取るべき措置を、楊燕は敢えて取らなかった。羌族の集落へと向かう際に、どうしても董卓の領地を通らねばならないのだが、彼は董卓宛の文も出さず、無断で領内を通っていたのだ。当然、董卓側が黙っている訳も無く、どこかで立ち塞がるに決まっていた。

そして、狙い通り、前方に楊燕たちの行く手を塞ぐようにして、軍が展開されていた、旗印からは、董卓旗下の呂布と張遼だと分かった。

「ひゃわわっ！　蓮夜様、文を出してなかったんですかっ！」

目の前で展開される軍勢に、徐庶が慌てた様子を見せる。他の配下の兵たちも、同じ様子である。しかし、楊燕だけは内心でほくそ笑んでいる。

（……狙い通り）

楊燕の狙いは、まず董卓軍と接触し、彼女らにあたりを付ける事であった。これも前世の知識になるが、董卓軍は後に戦乱に敗れ、御使いに保護される運命を辿る。特に大陸一と言われた呂布が御使い側に下るのは、楊燕にとって相当拙い事である。前世と同

じく、現に御使いは劉備の所に舞い降り、頭角を現し始めていた。そこへ呂布が取り込まれてしまっては、万事休すである。そうなる前に、楊燕は董卓軍と接触し、身内に引き込む算段を立て始めていた。

しかし、今は楊燕も劉焉配下であり、さすがに表立って董卓と接触する訳にはいかない。人材集めならともかく、他勢力との外交は主の劉焉を差し置いて楊燕が勝手に決める事ができず、自ら接触する機会が無かった。そこで、楊燕は軍馬調達の機会を利用し、敢えて董卓軍を挑発して強引に引きずり出したのだ。

だが、董卓軍の面々の性格はある程度把握しているものの、前世とはまるで違う行動を取っている為、ここからは半ば行き当たりばったりである。

「ウチらの領内を勝手に通行するんは何事や。頭のもん出てこい」

「……」

董卓軍から、二人が馬に乗って進み出てくる。その姿に楊燕は見覚えがあった。

（張遼と、呂布か）

妙な訛りで叱責してきた方が張遼。そして、だんまりを決め込んだまま出てきた方が呂布。どちらも一級品の武将である。しかし、性格は若干違えど両方とも猪突猛進型の将。このままでは戦闘必至になるのは火を見るより明らかである。

猛将二人の登場に、楊燕軍は少し浮足立つ。これは相手を恐れたというよりは、董卓

軍とぶつかるのを想定していなかった故であった。しかし、楊燕の方は「ますます面白くなってきた」と、周囲の慌てぶりをよそに思わず笑みを浮かべていた。

第七話

「ウチらを舐め切った事、後悔させたる。覚悟っ！」

こちらが名乗りを上げる間も無く、張遼が一瞬で間を詰めて戟を振りかざして襲い掛かる。やたら喧嘩っ早い彼女らしい行動である。それに対し、楊燕は真っ向から受けて立つ。

ガキィィンッ、と物凄い金属音が辺りに鳴り響く。だが、楊燕の方はビクともしない。

「くそっ、これでどないや！」

矢継ぎ早に次々と戟を振り回して連続攻撃を仕掛ける張遼。だが、それらの攻撃を、今度は見切ったように楊燕は全て紙一重で躱している。

「なんやコイツ、ちょこまかと」

徐々に、張遼に焦りの色が浮かんでくる。たった数合で分かった、明らかな実力の違い。何度攻撃しても効果が無く、少しずつ戟を振るう腕が鈍っているのが、張遼自身にも感じられた。

（あかん、このままやと負ける――）

そして遂に、つけられる決着。張遼の手から戟が離れる。その瞬間、割って入るよう

に呂布が方天戟をかざして楊燕の攻撃を防いだ。
「……張遼、代わる」
「呂布ちん、悪い。頼むわ」
張遼の劣勢にすかさず割って入った呂布は、そのまま攻勢を仕掛けた。
（やはり、強い）
ある程度予想していたものの、やはり呂布は強かった。楊燕も負けじと反撃し、一進一退の攻防を繰り広げる。
突然始まった将同士の一騎打ちに、固唾を飲んで見守る両軍の兵たち。楊燕サイドは呂布が相手という事で、ハラハラした様子で見守り、董卓サイドは呂布とまともに打ち合える人物が居る事に驚いている。
だが、勝算とはいかないまでも、楊燕にはある程度は呂布と渡り合える自信があった。前世では乱世の終盤になると呂布に対抗できるものは居らず、無双状態を許してしまっていたが、今はまだ乱世が始まる前の段階である。戦場に慣れ切った時期ならともかく、今はまだ技術面で粗が目立っている。現時点では戦の経験は楊燕の方が上である。それに、前世での反省を踏まえ、幼い頃から鍛錬を欠かさなかったのだ。
以上の理由で、楊燕は呂布と互角に渡り合えるという自信があったのだ。乱世終盤では無理だが、今なら勝てる。その目論見通り、楊燕は少しずつ呂布を押し始めた。

「……強い」

予想外の展開に、呂布の眼がいっそう鋭くなる。彼女自身、どうやら楊燕の事を好敵手と認めたような様子であった。

「……でも、負けない」

劣勢を振り払うかのように、我武者羅に方天戟を振るう呂布。それに対し、楊燕も真っ向勝負で一気に決着をつける気でいた。

そんな二人の間に、一匹の犬が駆け寄ってくる。

（……だめ、セキト）

飛び込んできたのは、呂布の愛犬・セキト。あっ、と咄嗟に心の中で思うも、呂布は既に自身の戟を止められそうにない。彼女は家族同然の存在を傷付けてしまうのではないかと危惧した。

だが、すんでの所で楊燕が戟の方へと我が身を投げ出し、犬を庇ったのだ。そして、今までは何とか受け流して防いだものの、無理な態勢でまともに受けてしまったが為、楊燕の剣にヒビが入ってしまう。

「あっ――」

楊燕の剣が嫌な音を立てたのを聞いた周囲は、肝を冷やす。中には、楊燕の身体から血が噴き出る場面まで想像した者さえ居た。だが、紙一重の所で呂布も何とか武器を止

めた為、楊燕が傷つく事は無かった。
そんな戦闘の様子をよそに、人懐っこく楊燕に飛びつき戯れる犬。そんな無邪気な犬の様子に、あきれた様子を見せる楊燕。
「お前なあ、戦いの場に飛び出したら危ないだろ」
そう問いかけるも、言葉を理解しているのかいないのか、犬は屈託のない様子で尻尾を振り振り、なおも楊燕にじゃれついた。その様子を見て、呂布は戦闘を中止し、武器を納めた。
「……お前、いいやつ」
愛犬セキトが他人にじゃれつくのは稀であり、セキトの性格をよく知る呂布にとって、眼前の光景は驚きの一言である。セキトの危険を身を挺して守った末、セキトが滅茶苦茶懐いている。呂布からすれば、それだけで楊燕と戦う理由はもう無くなっていた。

第八話

ヒヤッとする場面はあったものの、何とか最悪の事態を免れた楊燕軍。一騎打ちが終わると、楊燕に飛びつく者が一人。楊燕の新妻・紫苑である。

「貴方ッ――」

そう叫びながら、紫苑は楊燕の胸元に飛び込み、そのまま縋り付いた。彼女にしてみれば、夫が殺されるのではないかと冷や冷やしていたのだ。

「もうっ、あんな無茶してっ！　何かあったらどうするのですっ！」

楊燕の胸に顔を埋め、そのまま縋り付いていたかと思えば、今度はポカポカと楊燕を叩き始める。

「わっ！　待て、いきなり何をするんだ！」

「何をするんだはこっちのセリフだわっ！　心配するこっちの身になってみなさいっ！」

そう言って、なおも楊燕を叩き続ける紫苑。まさかの紫苑の取り乱し様に、楊燕は狼狽する。

「悪かった、俺が悪かったから、落ち着け！」

「……バカ」

そう呟くと、楊燕の胸に顔を埋め、強く抱き着く紫苑。その様子に、楊燕は内心で驚いた。まさか、紫苑がここまで本気で心配して取り乱すとは思わなかったから。

前世では、紫苑がここまで取り乱したところを楊燕は見た事が無い。いつも澄まし顔で泰然としており、何事にも動じないという印象だった。それは出会った時からそうであり、どのような場面に出くわしても常に冷静沈着。その冷静な判断力に助かった事もあるが、同時に我が妻ながら少し怖いという印象があったのもまた事実。思い返せば、楊燕の方がずっと紫苑の顔色を窺って気を使っている事が多かったように思う。

そんな紫苑が、この現世では全く違う様子を見せている。前世とはあまりに違う紫苑の性格に、楊燕は（本当に違う世界なんだな……）などと考えていた。こうやって、感情を露にする紫苑が新鮮で可愛く思えて、楊燕は思わず紫苑の頭をそっと撫でる。すると、「んっ……」と心地良さそうに紫苑が声を漏らす。

結婚以降、初めて楊燕が紫苑を意識した瞬間であった。

「……オホンッ」

しばらく抱き合っていると、気まずそうな表情で張遼が咳払いをする。その声で、楊燕と紫苑は自分たちの置かれた状況を把握する。周囲では、両軍の兵たちが微笑ましいとでも言いたげな様子で二人を温かい目で見ていた。

「――ッ!!」

周囲の様子に、紫苑は恥ずかしさで一気に顔を火照らせ、素早く楊燕の腕の中から離れるのであった。

＊＊＊＊＊

紆余曲折はあったものの、楊燕は何とか董卓軍と接触することに成功した。セキトを庇い、懐かれた事から一気に呂布の信頼を得た。そして、あらかじめ土産の酒を用意していた事から、張遼とも親しくなったのだ。

「ウチの真名は霞や。あんたら悪い人間や無いさかい、真名預けるわ」

「……恋の真名は恋。この真名、預けた」

そして、真名を交換する事にも成功。楊燕が内心最も欲しいと思っていた将二名と交誼を結ぶ事となった。以降、楊燕は張遼たちを通して徐々に董卓軍と交誼を結ぶ事になるのである。

また、この時を境にして、紫苑との関係に変化が生まれる事となる。

今までは、前世の轍を踏まぬとばかりにやたらと女を遠ざけ、紫苑の方を見ようともしなかった。むしろ、紫苑が裏切るような行動を見せたら、即座に離縁する事さえ考え

ていた。このような状態では、好かれる筈がないと頭では分かっていても、どうしても自分を変えるのが難しかった。

思えば、自身の境遇にただ甘えていただけなのだろう。前世で裏切られたという事実を引きずり、全く関係のない現世の紫苑にぶつけていただけである。いや、ただの八つ当たりだという事は楊燕自身も既に理解はしていた。理解はしていたものの、変わるきっかけが無く、ずるずるとここまで来てしまったのだ。

しかし、こんな糞みたいな人間であるにも関わらず、紫苑の方から距離を詰めてきた。今まで冷たい態度で蔑ろにし、見向きもしなかったにも関わらず。あのように感情むき出しで本気で心配されるという経験が無く、その事が楊燕の心境に変化をもたらした。

（そろそろ、紫苑に向き合わないとな）

結婚して数か月、ようやく楊燕の心にこのような感情が芽生え始めていた。以降、楊燕は紫苑と向き合い始め、徐々に関係を構築し始めていくのであった。

そして、涼州での出来事からさらに半月後、楊燕は現世で初めて紫苑を抱いた。

第九話

初めて紫苑と結ばれて以降、楊燕の生活は様変わりした。以前に比べて、明らかに紫苑と一緒にいる時間が長くなったのだ。

そもそも、前世の時も含めて元々は紫苑を好きでいた楊燕である。本当の意味で結ばれて以降は、紫苑に溺れてしまうのも無理はなかった。

「うふふ、貴方。はい、あ～んっ♪」

益州最大の都市、成都。その成都城内の中庭にて、紫苑は自ら振る舞った手料理を、楊燕に『あ～ん』で食べさせていた。

「ちょっ、自分で食えるって！」

さすがに『あ～ん』で食べさせてもらうのが恥ずかしいのか、楊燕は拒否しようとする。だが、紫苑はそれを許さない。

「いいじゃない。夫婦なんですから、恥ずかしがる事無いわ」

よほど楊燕と一緒にいられるのが嬉しいらしく、紫苑はニコニコとした表情で答える。

「ちょっ、誰か助けてくれっ」

こういった事に不慣れな楊燕は、珍しくあたふたし、周囲の侍女に助けを求める。しかし、二人の様子を眺めていた侍女たちは、暖かい目で見守るばかりである。

「楊燕様、お幸せにっ」

周囲の侍女は皆、紫苑の味方ばかりであり、当然助けは無い。楊燕にとっては、まさに四面楚歌であった。

何とか逃げようとするも、紫苑が逃がしてくれる筈もなく、ガッチリと腕を組まれ、さらに逃走を防ぐかのように侍女たちが周囲を固めており、逃げ場はどこにも無かった。

結局、嫌だと恥ずかしがっていた楊燕も、紫苑の言いなりになって、強制的に『あ～ん』で食べさせられるのであった。

＊＊＊＊＊

これまでの状況が嘘であったかのように、楊燕と紫苑の関係が変わり始め、平穏なひとときが訪れたかのように見えた。そんな中、益州を揺るがす一大事が発生した。益州で勢力を築いていた劉焉が、ついに病に倒れたのである。

これまで、周囲に隠していたものの、抱えていた持病が悪化したのだ。これまでの無理が祟ったのか、医者もお手上げの状態にまで病が進行し、劉焉の命はもはや風前の灯

となっていた。

「もはや我の命も、これまでか……」

劉焉も、自身の死期を悟っていたようである。その彼女の脳裏に浮かんだのは、未熟な我が子、劉璋に関する事であった。もっと正確にいえば、楊燕の処置についてである。

周囲ではまだ気付かぬ者も多いが、劉焉自身は楊燕に対して不穏な部分を感じていた。当初は有能な部下として引き抜き、自陣に取り込むために遠縁の紫苑と結婚までさせた。しかし、その後の楊燕の行動を見ていると、次々と不安な部分が出始めていた。

各地に配下を派遣して人材集めに走っている点。そして、引き抜いた人材を劉焉に推挙する訳でもなく、自陣に取り込んでいる点。黄権などの有望な将と友好関係を築き、派閥を形成している点。極めつけは他州の勢力とも交流している点。どれをとっても、益州を乗っ取るための布石としか思えなくなっていた。

しかし、今の劉焉には楊燕を排除する事は出来なかった。羌との戦闘には、どうしても楊燕の力が必要であり、彼が居なければ戦力は半減する。しかも、死病を抱える彼女に対して、一方は延び盛りの若武者。戦闘になれば、どちらが勝つのかは明らかであった。

益州で着実に勢力を伸ばしていく楊燕に対して不安になるのは当然である。だが、劉璋に跡を継がせても、益州を治められるとは思えない。その事実が、さらに劉焉を悩ま

せていた。

我が子、劉璋。劉焉にとって唯一の娘になるのだが、性格は親とは真反対。とにかく優柔不断で気が弱く、荒事が大嫌いな性格である。そんな彼女では楊燕を排除したところで他の豪族を抑えるのは到底不可能。それどころか、他勢力に攻められればあっさりと降伏するであろう事は目に見えていた。

そんな不肖の娘でも、可愛い我が子であることに間違いは無かった。それに、これまで続いていた劉家を絶やす訳にもいかない。娘には、何とか今の地位を継がせたい。何か上手い方法は無いだろうか。

（……やはり、楊燕に嫁がせるしかないか）

もちろん、楊燕の意思など完全無視。考えに考えた劉焉の結論は、ある意味では合理的であり、ある意味ではとんでもないものであった。

第十話

我が子、劉璋を楊燕に嫁がせる判断を下した劉焉。その判断には、様々な思惑があった。

どう見ても劉璋には益州を収める器量は無く、重臣たちも将来を危惧していた程。一部の者などは、楊燕を遠戚の紫苑と娶せたのも、やがて楊燕を後継者として育てるために一族に取り込んだのではないか、と穿った見方をする者まで出る始末。これまでにそのような背景があり、重臣たちの劉璋への忠誠心を疑っていた所に、楊燕の疑わしき行動。劉焉が楊燕を危険視するようになるのも無理はなかった。

しかし、楊燕が有能な部下であった事もまた事実。楊燕が劉焉軍の中心であった事は間違い無く、現状ではもはや彼を頼るしか方法はなかった。

だが、全くお手上げという訳でもない。楊燕が元は心優しき男である事も、劉焉は見抜いていた。あれほど紫苑との縁談を拒否していたにも関わらず、今ではすっかり鴛鴦夫婦。最近の楊燕の様子を見ていれば、紫苑に対して完全に心を開いており、夫婦として互いを慈しんでいる事はすぐに分かった。その事から、彼が実は情に厚い人間だという事が窺えた。劉焉は、楊燕の心の部分に賭ける事にした。

「……そう来るか」

劉焉の遺言を伝え聞いた楊燕は、頭を抱えた。ようやく紫苑との関係性を良好なものにし、今までの出来事を埋め合わすべく、目いっぱい愛そうと誓ったその矢先だったから。事実、毎日のようにラブラブしていた結果、紫苑の妊娠が発覚していた。

『生まれてくる子どもには、璃々って名前をつける』

『もう、貴方ったら気が早いわ。男の子かもしれないのに』

『いや、女の子だよ。俺には分かる』

そのような、こっ恥ずかしい会話をしていたばかりなのだ。楊燕には紫苑しか見えておらず、当然、他の女を娶る気など無かった。

本来なら、前世のように劉璋では無理だと諸将が判断した所で、益州制覇に名乗りをあげる予定だったのだ。事実、主な者を自陣に引き入れて地盤を固め、来るべき時に名乗りをあげる準備を密かに進めていた。それが、劉焉の遺言で計画が大幅に狂った。

その一方で、考えようによっては、またとない好機でもあった。いくら準備を進めて名乗りをあげても、反対勢力は一定数出る事を考えれば、劉璋との縁談は無駄な争いを避けて楽に益州を取る為の最善策である。それが、劉焉の方から話があったのだ。冷静に考えれば、受けない手は無い。

しかし、理屈はともかく、楊燕は紫苑以外の女を抱く気は無い。楊燕自身、『自分は北郷とは違う。自分には複数の女を侍らせて楽しむ趣味は無い』という意識が強かったのだ。そのような事から、楊燕はこの縁談を突っぱねるつもりでいた。

＊＊＊＊＊

劉璋を頼むという遺言を残し、劉焉は逝った。それでも、楊燕には劉璋を娶ろうなどという気は全く無い。彼には紫苑一人が居れば充分であったし、彼女自身がどう思うかを考えると、いくら劉焉に懇願されようとも、劉璋を娶るという選択肢はありえない。

それに、劉璋という女は、楊燕の好みとはかけ離れていた。紫苑は楊燕の好みど真ん中だった。だが、劉璋の方は年齢はともかく、外見はどう見ても年端も行かぬ少女であり、胸もつるぺた。楊燕に少女趣味が無い以上、紫苑の時とは別の意味で抱ける気がしなかった。

（……前線に出ていて、本当に良かった）

楊燕はこの時ほど、多忙な状況に感謝した。彼は現在、羌との戦闘の為に戦場に張り付けになっており、劉焉の葬儀に間に合わなかったのだ。もし、葬儀に出ていたら、劉焉の遺言の通りにそのまま劉璋と結婚させられていたであろう。

しかし、現在はただ面倒を先延ばしにしただけであり、なんの解決にもなっていない。このままでは、いずれ成都に戻らなければならず、遺言だと称して強引に式を挙げさせられるだろう。何か、上手い方法は無いものか、と楊燕は頭を悩ませていた。

だが、この劉焉の遺言が、更なる混乱を招こうとは、楊燕は思いもよらなかった。

きっかけは、前線に出ていた楊燕の元に、成都周辺で待機していた黄権を始めとして、親族姻戚が逃げ込んできた事だった。

『大変です！　張松が兵を挙げて攻めてきます！』

「ん？　張松？　何故だ？」

訳が分からず、途方に暮れる楊燕。この面倒な時に、なぜ自分が攻められるのだろうか。楊燕はもちろん張松の恨みを買った事は無い。いや、将来的には張松と争うことになるであろう事は予想していたものの、今はまだ時期尚早である。

『聞いたところによれば、張松は楊燕様を劉家乗っ取りの画策をしたと断罪し、周囲と結託して劉璋様との縁談を進めていた重臣を討伐。そのまま兵を進めて向かってくるとの事です』

黄権のその言葉に、楊燕はげんなりとする。そもそも劉璋との縁談話も、劉焉が勝手に言い出した事であり、当人たちの意思を無視した遺言である。だが、楊燕が益州を手

中に収めようとしていた事は事実であり、いずれはぶつかる相手であった事は間違い無い。

色々と計画が大幅に狂ってしまっているが、いずれぶつかる相手との戦闘が早まっただけ。ならば、さっさと羌族と停戦し、とっとと張松を撃破するだけだ、と楊燕は思い直す事にした。

第十一話

張松との一戦に向かうべく、楊燕は準備を進めていた。楊燕自身は、張松の事をそれほど問題にしていなかった。聞くところによれば、張松は頭の回転は良いとの事だが、はっきり言えば小者。しかし、前世では劉備の入蜀に際し、劉璋を裏切って劉備に内通していたという事実がある。小者には違いないが、いずれ排除しなければならない者である。それが、向こうからその機会を与えてくれたのだから、好都合という他は無い。

だが、張松側にも、一人だけ警戒すべき男が居た。それは、張任である。文武に優れた手腕を発揮している彼に関しては、楊燕はのどから手が出るほど欲しいと思っていた。しかし、強情な男でもあり、劉家への忠誠心が強く、とうてい説得できる男では無い。どうあっても、打ち倒すしか無かった。

さて、決戦にあたっての戦略であるが、彼は羌との対峙にあたって綿竹城まで出てきており、そこを対張松の拠点とする事にした。とはいえ、綿竹城に籠城するのは論外であり、彼自身は城外に打って出て真っ向から張松軍を打ち破る気でいた。

しかし、楊燕は今回だけは紫苑を綿竹城に待機させる事にした。彼女が妊娠中であった事もあり、しかもつわりが結構重い様子だったので、戦場に連れていく訳にはいかな

いと判断したのだ。その彼女の護衛の意味も含めて、黄権などの黄一族に綿竹城の守護を任せる事にした。

城外に打って出る楊燕に従うのは、呉懿、呉蘭、雷銅。劉焉の部下として共に戦った連中である。彼らは楊燕とは比較的仲が良く（楊燕に下心あっての話だが）、劉焉の決定に理解を示していた。何よりこの三人、状況的に劉璋が跡を継ぐより楊燕が益州をまとめた方が上手くいくと判断していたのだ。三人はそれぞれ軍を率いて、楊燕より先に戦場に展開していく。

そして、楊燕の傍に控えるのは楊一族の若者・楊懐と、その友人の高沛。今回、張松との戦闘にあたって、将来有望な一族の若者に初陣を経験させるべく、あえて本陣に引き入れたのだ。他にも、楊宗も呼び寄せているし、楊戯、楊洪を軍師見習いとして徐庶の下に付かせている。今回の戦いは、色々な意味で楊家の未来を占う一戦となっていた。

楊燕の腹の中はともかく、今のところ行動そのものには何ら問題は無い。ただ、厄介なのが張松側が成都に居た劉璋を強引に引き入れ、これを擁している事である。その為、この一戦に負ければ楊家は逆賊として誅殺される事は目に見えていた。

逆賊になるのを恐れて諸将が動揺する前に張松を叩く事が肝心であり、長期戦になれば不利。だから、楊燕が取り得る戦術は、速攻作戦でしか無かった。そして、それは張

松側も分かっていた。

＊＊＊＊＊

「楊燕は俺が止める。その間に、間道を回り込んで綿竹城を制圧すればいい」

張松にそう進言するのは、張任である。しかし、張松は彼のその言葉を頼もしく思いながらも、一抹の不安を拭えない。

「しかし、あの軍団をたった一団で止めるのは、無理があるのではないか」

「楊燕は異常なほどの愛妻家だ。綿竹を占領して黄忠を人質にとるとなれば、必ず動揺する」

張任はそう断言する。彼自身、間者を放って楊燕側の情報は得ていたのだ。それによって、楊燕が紫苑と仲睦まじい事や、その紫苑が妊娠中である事も掴んでいた。そして、その情報から楊燕が紫苑を気遣って必ず綿竹城に残すであろう事も予想していた。

しかし、その言葉を聞いてもなお、躊躇する張松。そんな彼に、張任はしびれをきらしたようにさらに畳みかけた。

「ここまで来たら、もう引き返せねえだろ。俺も、お前も」

この口ぶりから、今回の挙兵を主導しているのは、どうやら張任であるらしかった。

その表情からも、彼の楊燕に対する強い敵愾心が窺えた。

一方の張松。彼自身は不安な表情を崩さない。彼自身は張任と違い、楊燕と真っ向からぶつかる事を恐れていた。しかし、彼にとってもまた、楊燕が益州の覇権を握るのは歓迎できない事であった。もし楊燕が益州を制覇すれば、もはや自分の出る幕は無いからである。実際、劉焉の下で勢力を伸ばしていた楊燕によって、張一族はどんどん追いやられていき、発言力を低下させているという事実があった。だから、張松自身も楊燕に勝って再び勢力を盛り返す必要があったのだ。

「今回の戦、楊燕は絶対に打って出てくる。だから、出てきたところを叩く」

よほど、楊燕の事が憎いのか、張任は鋭い目つきで綿竹の方向を睨んでいた。

第十二話

いよいよ始まった、張松軍との一戦。楊燕は先鋒として進み出てきた張任を潰すため、軍を三つに分けて押し包もうとしていた。その中軍を務めるのは呉懿。左右に呉蘭と雷銅が兵を伏せ、呉懿が敗走したふりをして相手を狭路に引き込み、左右から一気に挟撃するという作戦である。

その敗走の仕方も、あまりにわざとらし過ぎれば敵に感づかれてしまう。だから、楊燕は何度も口酸っぱく呉懿に対し、敗走の仕方に注意するよう念押しした。頭の良い呉懿ならば、上手くやってくれる。そう期待して先鋒の中軍を任せたのだが……。

「叔父上、何か本当に敗走してきてません？」

「……そのようだな」

戦況を見ていた楊懐の言葉に、楊燕は頭を抱える。どうやら、呉懿は敗走のふりではなく、本当に敗走しているという様子であった。この時の為に、呉蘭と雷銅には挟撃役だけでなく、もしもの時は呉懿を援護するよう言い含めていたのだが。

「呉蘭様、雷銅様、ともに敵の伏兵に遭い、足止めを食らっている模様」

兵の報告によって、戦況がどんどん悪化しているのを、楊燕は覚った。戦術において

は、楊燕よりも張任の方が一枚上手だったようである。楊燕とて馬鹿ではなく、呉蘭と雷銅を派遣するにあたって、伏兵を警戒して斥候を出していたのだが、上手く相手にやり過ごされたようである。

中軍の少なさから伏兵を見破られる事を避けるため、敢えて中軍の兵の割合を多くし、伏兵を必要最小限に留めたのが仇となったらしい。それで、相手の伏兵を上手く処理しきれないでいる様子であった。

「戦況を立て直す。お前らついて来い」

本陣に控えていた騎馬隊に命じ、自らも馬に飛び乗る楊燕。

「叔父上、私も行きます」

「駄目だ。お前はここに居て本陣を守れ」

楊燕は、ついて行くと言いだす楊懐らに本陣に残るよう厳命し、さらに自身の作戦ミスにおろおろしていた徐庶にも言葉を投げる。

「反省は後だ。戦況を見て、態勢を立て直すための処理を行え」

そう言い残し、颯爽と騎馬隊を率いて前線に乗り込んでいった。

「……なるほどな」

前線に出てきた楊燕は、味方の敗走の原因を見て、納得していた。相手の先鋒の兵が、

想像以上に強かったのだ。
特に、何か馬鹿でかい棍棒を振り回している一人が、妙に強すぎたのだ。その一人のせいで、呉懿軍が崩され、潰走させられていた。
それでも、総崩れとまでいかず、何とか危うい所で踏みとどまっているのも、呉懿だからこそである。本当に敗走させられながらも、何とか要所要所で踏みとどまり、敵に本軍にまで突っ込まれるのを防いでいた。とはいえ、足止めの為に兵を残しては討たれ、残しては討たれ、ついには呉懿自身が討ち死にも覚悟しなければならない有様となっていたが。
（あれは、呉懿では勝てないな）
前線で暴れていたのは、魏延という女。たしか、厳顔配下の兵である。普段から街のごろつきどもを相手に暴れまわっているという噂だが、確かに強い。個人の武に関しては軟弱な呉懿では、一騎打ちをしたところで到底相手にならないであろう。
「呉懿、俺と代われ。魏延とやら、俺が相手だ」
いよいよ馬鹿でかい棍棒が呉懿を押しつぶそうかという時、危うい所で楊燕が割って入り、剣で棍棒をはねのけた。驚いた魏延が飛びのいたところで、楊燕は馬からひらりと地面に降り立ち、呉懿を庇うようにして魏延の前に立ち塞がった。
『楊燕だ。楊燕が来たぞ』

『もう大将のおでましか』

楊燕の出現に、敵兵たちが浮足立つ。彼らは楊燕目掛けて殺到しようとするも、楊燕配下の騎馬兵たちの突撃を受け、蹴散らされていく。

「楊燕、覚悟！」

一騎打ちに持ち込まれた魏延が、楊燕を討ち取ろうと棍棒を振るう。だが、さすがに彼女も楊燕が相手では分が悪い様子であった。

確かに魏延は強い。並みの兵では歯が立たないであろう。しかし、彼女の攻勢はまだまだ甘い。武器の破壊力に頼った戦いでは、呂布と渡り合えるだけの腕を持つ楊燕には通用しない。楊燕にとっては全身が武器であり、剣を止められようとも拳が飛び、蹴りが飛ぶ。その変幻自在の攻勢に、魏延は明らかに押されていた。

「惜しい。力はあるのに基本がなっていないな」

「やかましい。このっ！」

楊燕の言葉に、ムキになって尚も攻勢に出る魏延。だが、それは悪あがきでしかなく、やがて棍棒をはね飛ばされ、勝敗が決してしまう。

「くっ――」

自身の終焉を覚悟した魏延が、あきらめたように目を閉じる。

「コイツを捕らえろ」

魏延の戦意を奪った楊燕が、配下にそう指示する。その瞬間、彼は急に身を翻す。その手には、一本の矢が握られていた。前世での死に方が死に方だけに、無意識に飛んでくる矢の気配に敏感になってしまった楊燕だからこそ、このような荒業ができたと言っても過言ではない。

『ば、化け物――』

飛んできた矢を咄嗟につかみ取った楊燕を見て、敵も味方も驚愕する。そんな中、楊燕は矢が飛んできた方向をキッと睨み据える。

「……今ので仕留めたと思ったのに。お主、本当に人間かのう」

ジジイのような話し方とともに現れたのは、弓を持った豊満な女性であった。

「厳顔、か……」

魏延を捕らえる寸前で登場たのは、巴郡の太守であり、魏延の師にあたる美女、厳顔であった。

第十三話

魏延の師である厳顔といえども、楊燕の敵ではなかったらしい。彼女は現在、楊燕によって喉元に剣を突きつけられ、身動きが取れないでいた。

そもそも、厳顔は弓を持たせれば紫苑に匹敵する程の達人なのだが、長物の扱いは不得手であり、接近戦になると戦闘力は落ちてしまう。ましてや、相手が楊燕とあっては、勝ち目など無かった。

『駄目だ。やっぱり勝てねえっ』

先鋒の厳顔と魏延が捕縛された事により、今度は相手の一般兵たちが潰走を始める。そして、それを追おうとする騎馬兵たち。

「追うな」

追撃を始めようとする兵を止める楊燕。このまま勢いに乗って攻めるよりは、いったん態勢を立て直す方が良いと判断したのだ。追撃を開始するには、被害が大きすぎた。このまま張任の陣に乗り込もうとしても、今度はこちらが壊滅するであろう。今は、厳顔と魏延を捕らえたことを良しとすべきであった。

「蓮夜様、助かりました」

楊燕の下に舞い戻ってくる呉懿。それに続いて、伏兵に翻弄されていた呉蘭と雷銅も合流してくる。先鋒が壊滅した段階で相手の伏兵たちが撤退し、ようやく余裕ができたのだ。

「今は深追いは禁物だ。態勢を立て直す」

捕らえた厳顔と魏延を引きたてつつ、楊燕らは本陣へと戻っていく。その途中、厳顔から熱っぽい視線を向けられている事に気付いた楊燕は、何か嫌な予感を感じるのであった。

「くそ、もう少しだというのに……」

兵からの報告を聞いた張任は、腹立ちまぎれに拳を叩きつけた。敵の潰走に調子に乗り、引き際を誤った厳顔たちが歯がゆかった。深追いするなという指示を出していたにも関わらず、猪二人は師弟揃って敵にとっ捕まったのだ。機嫌を悪くするのも無理はなかった。

いや、これも皆、自分の見立ての甘さが招いた事態であった。まさか、楊燕があれほど強いとは思っていなかったのだ。いくら精鋭とはいえ、百に満たない程度の騎兵を率いて、何千という一団に真正面から突っ込んで壊滅に追い込むなど、想像できるはずがなかった。

しかし、まだ局地戦に負けただけであり、これから挽回の余地はある。そう思い、態勢を立て直そうとした張任だが、さらに悪い知らせが舞い込んできた。

「張松様が、負けて帰ってきました」

「――はぁ?」

その知らせに、さらに張任の顔が怒りで険しくなる。楊家軍の主力の殆どが綿竹城を出ており、籠城できるだけの兵力は残っていなかった筈。そんな状態の城を攻めて、負けて帰ってくるとは何事か。

「あの野郎、ふざけんじゃねえぞ」

敗走してきた張松のもとへと乗り込もうとする張任だが、それより先に、張松が転がり込んできた。

「大変だ。氐の奴らが攻めてきたんだ」

聞けば、寡兵が守る綿竹城を落城寸前にまで追い詰めた時、どこからともなく異民族の騎馬軍団が現れ、一斉に襲い掛かって来たらしい。当然、楊燕以外の攻撃を予期していなかった張松軍は驚き、浮足立ったところで、場内から黄権が決死の覚悟で突撃をしてきた。その為、挟撃に遭った形となった張松軍は攻城を諦めて逃げ戻ってきたのだ。

「氐の奴らだと?」

全く予期していなかった事態に、張任は歯噛みする。

「くそっ、楊燕の奴に一杯食わされたっ！」

＊＊＊＊＊

全く予期していなかった異民族の襲来だが、実はこれこそが楊燕の切り札であった。今回、楊燕が援軍を仰いだ氐族は、羌族と並ぶ西方の異民族である。氐族を率いてきたのは、楊千万という女。名前でも分かる通り、楊燕の遠戚である。

そもそも、元をたどれば楊燕のご先祖様は氐族の出身であった。かつて楊燕の先祖は、秦王朝の時代に始皇帝に率いられて山から漢中に下った。そして楚漢戦争の際に漢中王、後の劉邦に従いそのまま漢化したのだった。

しかし、楊燕の家系が漢化したとはいえ、今でも氐族の楊家と交流を持っていた。益州の一豪族でしかない楊燕が瞬く間に力を付けてのしあがっていったのも、そのような下地があったからこそである。

その氐族に攻められ、敗走して追われるようにして逃げ帰った張松。これにより、戦況は一気に傾いた。厳顔と魏延を失った張任は、楊燕と楊千万の挟撃を支えることが出来ない。しかし、成都に逃げ帰ったところで再起は難しい。楊燕に加えて異民族にも攻められた張任は、成都まで追い詰められ、そして力尽きて投降するのであった。

第十四話

張松との戦闘が終わり、戦後処理となった。問題となるのは、張松ら降将に対してどのような処分を下すかであった。

これまでの経緯などから、張松を許す事はありえない。身分をはく奪して他領に追放か、最悪の場合処刑も考えた。だが、目の前でブルブル震える張松の姿を目の当たりにして、楊燕は処刑することを取りやめた。張松のあまりにみっともないほどの震えようを見て、殺す気も失せたのだ。

しかし、張任の場合はまるで正反対であった。彼は縛られて引き据えられながらも、絶えず楊燕を睨み続けていたのだから。その姿からは、とても戦闘に負けて降伏した者とは思えなかった。

「降伏した割には、態度がでかいな」

「いいから、早く殺せ」

このような調子だから、全く会話にならない。見ようによっては、早く死にたがっているかのような発言である。

実際、楊燕にはどうしても気になる事があった。様子を見ている限りでは、この戦闘

を主導したのは間違いなく張任である。であるならば、何故彼が無茶な挙兵を行ったのかが謎である。

劉焉の遺言によって劉璋との婚姻が決まり、楊燕が後継者になる事は大半の諸将も納得済みの案件である。そのような状況での無理な挙兵は、我が身を滅ぼす悪手でしかなく、それは張任も分かっていた筈。

「それにしても何故、無茶な挙兵をした。お前ほどの者が」

「……」

楊燕の問いかけにも、張任は無視。反抗的な態度で、早く殺せという態度を崩さない。しかし、どこか上の空で、何かを気にしているようにも見え、時おり視線が一方向に逸れる。その先を辿っていくと、劉璋がどこか不安げな表情で張任を見ているのが、楊燕の目に映った。

今回の戦闘、張家に担がれた劉璋も同じように捕らえられたのだが、神輿であることは明らかであり、さすがに先主劉焉の子を罰する訳にもいかず、すぐに釈放した。しかし、彼女はその場から離れようとせず、ずっと視線を張任に注いでいた。

その様子から、楊燕は覚った。しかし、確証がない。彼は張任にカマをかけてみる事にした。

「お前、それほど劉璋が好きか」

「……」

楊燕の問いに、張任は答えない。だが、微かに身体が反応したのを、楊燕は見逃さなかった。

（……あの時の俺と同じ、か）

楊燕は、前世で自身が行った反乱を思い返していた。ただ、あの時は盗られた妻を取り返すことで精一杯だった。それゆえに、計画性も何もない状態で挙兵し、敗れ去った。目の前の張任も、同じなのだ。劉焉の遺言の為に、密かに想う劉璋が楊燕に嫁ぐことになった。彼もまた、愛する者を取り返したいがゆえに、無茶な挙兵を行ったのだ。状況は違えど、かつての楊燕と同じだった。

だが、楊燕の時と違うのは、劉璋はまだ何も奪われてはいない事である。そもそも、楊燕には劉璋を娶ろうという考えは一切無かった。むしろ、劉璋と結婚する羽目になり、どうやってこの婚約を解消しようかと頭を悩ませていたのだ。だから、楊燕はこの状況を利用することにした。

剣を抜き、縛られて座らされている張任に近づく楊燕。誰もが、楊燕が張任を斬るのだと思い込み、固唾を飲む。

「待って。殺さないで」

いくら臆病で大人しい性質とはいえ、さすがに劉璋が叫ぶ。彼女も張任を密かに想っ

ており、助命を嘆願せずにはいられなかったのだ。
　そんな周囲の雰囲気をよそに、楊燕は張任に近づき、そして剣を振るった。彼を縛る縄だけを斬る形で。
「……何を」
「それほど劉璋が好きなら、くれてやる。俺には紫苑一人で充分だ」
　楊燕の言葉に、周囲は唖然とする。そして、それは張任と劉璋も例外では無かった。状況がぶっ飛びすぎて、何が何だか分からず理解が追い付いていないのだ。
「な、何を言うのです。亡き劉焉様の遺言はどうなるのです」
　周囲が慌てたように言う。しかし、楊燕の心は既に決まっていた。
「劉璋は張家に担がれて、戦の最中に戦死した」
「は？　何を……」
　尚も周囲が言いかけるも、楊燕にはもう周囲の雑音は聞こえていなかった。彼は張任の縄を斬り払い、そして無理やり立たせると、劉璋の方へと押しやった。フラフラと歩き始める張任に、劉璋が駆けつけ、縋り付く。
「その女を連れて、どこへでも行け」
　状況が呑み込めない張任であったが、ようやく楊燕の意図を覚った。彼らは、今までの反抗的な態度が嘘であるかのように、その場で楊燕に平伏する。

「あと、お前らには名前を捨ててもらう。張任も劉璋も、今日限りで死んだのだ」
「楊燕様、何てことを。このような処置、前代未聞ですぞ」
楊燕の処置を見ていた諸将が、反対の声をあげる。しかし、楊燕はその声を一蹴する。
「うるさい、張任も劉璋も戦で死んだのだ。もう何も言うな」
そう言い残し、楊燕はその場を後にした。

第十五話

戦後処理は、誰もが予想しなかった形で幕を閉じた。張任は劉璋と共に成都を去り、どこか静かな土地で表舞台に出ることなく余生を送るだろう。そして、張松は身分をはく奪され、他国へ追放となった。これにて、張家の乱は幕を閉じた。

しかし、これで全てが丸く収まった訳では無かった。劉璋の件は何とか片付いても、そこに新たな問題が発生したのだから。

今、楊燕は頭を抱えていたのは、桔梗（厳顔）の事であった。彼女は弟子の魏延ともども許され、楊燕の配下に組み込まれる事となった。だが、魏延はともかく、桔梗が厄介だった。戦後処理の段階から、彼は桔梗にアプローチをかけられていたのだから。

本人曰く、『儂はお館に惚れた。儂はもうお館の女だ』と。どうやら、先の戦でコテンパンに打ち負かしたのが悪かったらしい。彼女はかねてから嫁ぐなら自分より強い男だと決めていたらしく、楊燕に負けた事で火が付いたらしい。

（これじゃあ、劉璋を片付けた意味がねえ……）

何とか劉璋との縁談を回避したかと思えば、今度は桔梗。一体どのような因果で、このような女難が降りかかってくるのか、と楊燕は頭を抱えていた。俺は北郷とは違う。

俺には美女を複数侍らせて楽しむ趣味は無い。そのような考えから、楊燕は何とか桔梗を他の男に娶せられないかと考えていた。

桔梗は見るからに美女であり、彼女を欲しがる男も多いはず。自分が手を出して、桔梗を想う男たちから、わざわざ反感を買う必要も無い。そう思った楊燕は、桔梗を他の男に押し付ける事にした。

「別に、俺じゃなくても強い奴はいるだろう。例えば、黄権とか……」

まず、楊燕は黄権を生贄にしようとする。しかし、肝心の黄権は、ふっと視線を逸らしてしまう。

「なっ……なら、呉蘭とか、雷銅は」

苦し紛れに、楊燕は呉蘭たちの名前も出す。しかし、彼らは皆、顔を背けて自分に面倒が降りかからないようにするのである。

「お、お前ら……」

何故か皆、自分は関係ないとばかりに視線をそらしてしまう。これでは、桔梗を他の男とくっつける事が出来ないではないか。

「お、おい。誰か……」

楊燕は助けを求めるように、周囲を見回す。しかし、上記以外の諸将や隊長格の者、兵卒に至るまで、全員が視線をそらしてしまう。

「な、何故だ。何故誰も桔梗を欲さないのだ……」
　愕然とした様子で、楊燕はつぶやく。桔梗とて稀に見る美女なのだが、何故か皆、桔梗は勘弁とばかりの様子で顔をそむけてしまう。そんな楊燕に、枷を外された桔梗がしなだれかかる。
「お館、そんなつれない事を言わず、儂を娶ってくだされ」
「ちょ、俺には紫苑が……おい、誰かっ、誰かぁっ！」
　逃げようとする楊燕だが、しっかりと抱きしめられ、身動きが取れないでいる。そんな中、諸将たちが楊燕に声をかける。
「……楊燕様、諦めてくだされ。厳顔はもう、楊燕様しか目に入っておらぬ様子」
「ちょっ、待て……お前ら、薄情者ぉぉぉ！」
　楊燕の悲痛な叫びが、あたりに木霊した。

＊＊＊＊＊

「……なるほどな。道理で皆、桔梗を敬遠する訳だ」
　楊燕は一人、納得する。最近、配下に加わった桔梗の事である。一度、彼女の私生活を目の当たりにしたのだが、あまりにも女らしさからは、かけ離れていたのだ。

彼女の休日の過ごし方は、武器屋巡りに拉麺大食い。果ては競馬場で大騒ぎ。完全に趣味がおっさんである。そもそも、いつも昼間から酒浸りであり、公私問わず常に酒を片手にしている状態である。なるほど、これでは女として見られず、嫁の貰い手が無いのも無理はない。

しかし、これでも女らしい一面もあり、意外と料理が上手い。楊燕にだけ、その一面を見せてくるのだ。そして、夜になると毎晩のように寝所に夜這いをかけてくる。

ちなみに、紫苑が妊娠中の為、楊燕は最近では別室で寝ているのだ。下手に紫苑を抱きながら眠り、お腹に負担をかけてはいけないとの配慮である。しかし、その一人でいるところを、桔梗は狙ってくるのだ。まあ、桔梗は堂々と紫苑の前でも楊燕への想いを宣言しているのだが……。

誓って言うが、楊燕は現状、桔梗とは関係を結んでいない。だからこそ、彼は今でも頭を悩ませている。最も困るのが、楊燕にとって桔梗は、趣味はともかく外見は好みど真ん中の豊満な美女である事だった。この調子では、いつか間違いを犯しそうで怖いとさえ思っていた。

そのような訳で、楊燕はここのところ毎晩、紫苑の部屋に入り浸っていた。

「あらあら、うふふっ」

楊燕を迎えた紫苑は、嬉しそうに笑う。その笑顔を見て、楊燕は心から癒されるので

あった。彼のその様子には、以前のような刺々した雰囲気は全く無かった。
「紫苑、お腹の様子はどうだ」
「もう安定期に入ったの。順調に育ってるわ」
身を寄せてきた紫苑を優しく抱き止め、楊燕は彼女のお腹をそっと撫でる。
「本当だ。前より大きくなってる……あ、動いた」
「この子も、お父さんが来たって分かったんじゃないかしら」
身を寄せ合い、幸せそうな様子で話す二人。そしてそのまま、どちらからともなく、そっと口付けた。

第二章　涼洲と洛陽

第十六話

楊燕は現在、涼州の隴西の街に居た。左右にはそれぞれ、紫苑と桔梗が寄り添い、そして肩車している頭の上で、四歳になる娘の璃々がいた。

「おとーさん、たかいたかーい！」

初めて見る隴西の街が珍しいのか、璃々はずっとはしゃぎっぱなしである。

「おとーさん、あれたべたいー」

大通りに並ぶ屋台の美味しそうな匂いに惹かれたのか、璃々がお菓子をねだる。しかし、楊燕が応える前に、紫苑は娘のおねだりをそっとたしなめる。

「ダメよ。今おやつ食べたら、晩御飯が食べられなくなるわよ」

「まあまあ紫苑、今日くらいは良いのでは」

楊燕が紫苑をなだめるも、彼女は首を縦に振らない。

「むー、ききょーおかーさん、ダメ？」

紫苑がダメとなると、今度は桔梗におねだりをする璃々。

「まあ、少しくらいなら、良いと思うがの」

「やったー、ききょーおかーさん、だいすき」
桔梗の言葉に喜びの声をあげる璃々。その様子に、紫苑はため息をつく。
「もう、貴方も桔梗も甘いんだから」
「まあまあ、食べ過ぎないように、一串を四人で分ければいいじゃないか」
すねたように唇を尖らせる紫苑を、楊燕がなだめる。とはいえ、紫苑も怒っている訳では無く、どこか嬉しそうな様子も窺えた。紫苑も紫苑なりに、一家団欒のひと時を楽しんでいたのだ。そして、それは楊燕も同じである。

＊＊＊＊＊

以前から桔梗のアプローチを避け続けていた楊燕だが、結局この四年の間に桔梗と関係を結んだ。いや、結んだというよりは、強制的に結ばされたという方が正しい。
それは、約一年前のとある日の事。よほど疲れていたのだろうか、その日に調錬から戻って来た楊燕は、不覚にも自室で転寝をしてしまったのだ。
妙な感触に夢から覚めた楊燕は、自身が身動き取れなくなっている事に気が付いた。寝台の上で手足を縛られ、そして桔梗が楊燕の身体の上に覆いかぶさっていたのだ。
このような状況になったのは楊燕の不覚としか言いようがない。もし、侵入者が桔梗

では無く敵だったなら、今頃命は無いであろう、と楊燕は思う。しかし、楊燕が気が付かなかったのも無理はない。敵と違って、桔梗には全く殺気が無かったのだから。

「ちょっ、桔梗っ、何を……」

咄嗟に起き上がろうとする楊燕だが、当然起き上がれる筈も無い。そんな彼に、桔梗は落ち着かせるように囁いたのだ。

「お館、儂に全部任せて」

あの時は大変だったなあ、と楊燕は思い返す。しかし、側室として家族になって以降の桔梗は、以前からは考えられない程に女らしくなり、ガサツさが無くなっていった。そもそも、日中から酒浸りだったのも、やけ酒だったらしい。

後で知ったのだが、桔梗も紫苑と同じように、かなり以前から楊燕の事を想っていたらしい。かつて張家の乱の際に張松側に付いたのも、紫苑への敵対意識からだそう。

娘時代から紫苑と親しかった桔梗は、もし好きな男が紫苑と被った際、共有する約束だったそう。しかし、紫苑が抜け駆けする形で劉焉に頼み込み、強引に楊燕と結婚してしまった為、紫苑との間に溝ができたらしい。しかし、敵に回ったものの、結局は楊燕に打ち負かされ、想いを再認識した結果、こうやって押しかけ女房となったのである。

桔梗と結ばれた直後の楊燕は放心状態であったが、今では桔梗に対して情が沸いてい

るのも事実である。これまでに、紫苑との交流の中で女性に対する恐怖感がほとんど無くなっていた事も、桔梗を受け入れた要因なのだろうと思う。

そして、紫苑の方も抜け駆けしたことを反省し、桔梗と仲直りをしている。今では楊燕と三人で閨に入る事も珍しくなくなっていた。

第十七話

さて、楊燕たちが隴西の街にいたのは、そこが董卓の本拠地だったからである。現時点で大陸最強の軍を擁する董卓陣営と、結びつきを強めておこうと楊燕は判断していた。

これまで、楊燕は西涼の馬騰一族から軍馬を買い付けていたのだが、最近になって軍馬の買い付けを拒否されるようになったのだ。その理由は明白で、同じく西涼を本拠地とする韓遂が勢力を広げ、馬騰一族が韓遂側に吸収されたからである。

そもそも、楊燕にとって韓遂は不倶戴天の敵である。楊燕は早い段階で父親を亡くしているのだが、かつてその父親を戦死に追い込んだ相手が韓遂だったのだ。

一方の韓遂も、楊燕を目の敵にしていた。羌族の血を引く韓遂は、かねてから利を求めて益州奪取を目論んでおり、それを阻み続けたのが、かつての領主・劉焉であり、その後継者である楊燕だったから。

上記の理由で、韓遂に吸収されてしまった馬騰一族が、楊燕との関係をぶった切ったのはある意味当然である。しかし、楊燕としては軍馬が手に入らなくなるのは死活問題である。そこで、彼は董卓陣営から馬を買い付ける事にしたのだ。

そして、董卓側も楊燕たちを歓迎していた。その為、楊燕の隴西への逗留を許可した上、董卓配下の呂布や張遼がわざわざ楊燕を訪ねるという有様であった。もっとも、呂布はただご飯にありつこうという魂胆であろうし、張遼は楊燕と武術で手合わせをするという目的なのは見え見えだったが。

「あかん、全然勝てへんわっ」

喉元に槍の穂先を突き付けられ、張遼は悔しそうにウガーッと声をあげて後ろに倒れこむ。以前、武で楊燕に軽くあしらわれたのが悔しかったのか、彼女は性懲りもなく楊燕に一騎討ちを挑み、ことごとく跳ね返されていた。

「……こうなったら、闇討ちするしかない」

「いやいや、待て待て。お前らめちゃくちゃ強くなってるからな！」

呂布の言葉に、楊燕が慌てたように言う。口調こそふざけたような調子だが、内心では焦っていた。

四年前、初めて矛を交えた時に比べて、二人とも格段に腕を上げていた。張遼にはまだ負けていないものの、楊燕自身は時折ヒヤッとする場面があった。また、呂布には既に三度に一度は負けており、確実に実力差は縮まっていた。

それに比べて、楊燕の方は実力にそれほどの変化は無く、自身でも頭打ちになってる

のではないかと感じていた。この調子なら、二人に抜かれるのも時間の問題ではないかと思い、少し焦っていたのだ。

このままでは、将来劉備軍と当たった時、勝ち抜けるのかという不安が残る。今のままでは、また北郷に妻を奪われるのではないか。いや、この世界の紫苑なら、裏切らずにいてくれる筈。しかし……。

何か、壁を乗り越える為の何か切欠を掴めたら。そのような思いが頭の中を駆け回っていた。

※※※※※

「貴方、本当にやるの？」

「ああ、遠慮はいらない」

戸惑ったような口調で話す紫苑に対し、楊燕は言葉を返す。彼は現在、剣を握った状態で佇んでおり、それに対する形で紫苑が弓を構えていた。

「しかし、これは無茶ではないかのう」

紫苑だけでなく、桔梗も心配そうに声をかける。彼女も弓を構えており、紫苑と協力するように楊燕を挟み打ちにしていた。だが、楊燕は考えを変えるつもりは無い様子で

ある。

考えに考えた結果、自身の成長が止まった原因は、私生活にあると楊燕は結論づけていた。紫苑だけでなく、桔梗をも妻に迎えたことで、徐々に甘い生活に浸り初めていたのではないか、と。実際にこの四年の間、楊燕は紫苑に璃々を産ませただけでなく、桔梗をも孕ませてしまっているのだから。

しかし、それゆえに今さら桔梗と離縁する訳にもいかない。そもそも、楊燕もさすがに桔梗を孕ませておいてポイ捨てするような非道な男では無かった。

一応、それはそれで凄く幸せな事で良いのだが、その分だけ野生味が薄れているのではないかと楊燕は考えていた。今回、妻二人の協力を得て行おうとしている鍛練は、普通に考えたらとんでもない荒行であった。

「いいから、どんどん打ち込んでくれ」

何度も楊燕に頼まれ、結局断れずに紫苑と桔梗は矢をつがえ、一斉に放った。

「まだまだ、もっと来い」

そう言いながら剣を振り回し、矢継ぎ早に矢を射る紫苑と桔梗に対し、休みなく体を翻して次々に矢を切り落としていく楊燕。しかし、四年前のような超反応はいまだ健在で最初は調子が良くても、次々に飛んで来る矢にだんだん押されていく。そして、ついに楊燕は矢をかわしきれなくなり、大量に被弾し始めていた。

いくら鏃の先端を刺さらないよう削ったとはいえ、世に並ぶもの無い程の弓の名手二人が放つ矢である。当然、衝撃も大きかった。

「うぎゃーーーっ！」

次々に被弾してしまった楊燕は、あまりの痛さに叫び、悶絶してしまった。

第十八話

無茶とも言える楊燕の鍛練だが、狙いは二つあった。

まず、紫苑も桔梗も大陸一を争うほどの弓の名手であり、彼女たち以上に連続で速射できる人材は居ない。つまり、彼女たちが放つ矢の速度に慣れれば、他の者が放つ矢など止まって見えるという理論である。

そして、もう一つは、彼女たちの速射を全て叩き落とすには、武器を速く振るう必要があるという事である。今以上に力を付け、武器を速い速度で振るう事が出来るようになれば、さらに相手を圧倒する戦い方が可能になるという理論であった。

しかし、口で言うのは簡単だが、実際に出来るかとなると、非現実的な内容である。隴西から益州に帰還した後も訓練を継続していたが、楊燕は一度たりとも成功していなかった。

何度も矢を受けているうちに、飛んでくる矢の速度に目が慣れてきており、今では全てをきっちりと目で追えるようになっていた。だが、体がそれについていかなかったのだ。

そして何より、紫苑と桔梗が耐えられなくなっていた。自らの手で、夫を傷つけてい

るのだ。下手したら大怪我では済まない場合だって考えられた。彼女らが尻込みするのは当然である。

「お願い、もう止めて。貴方がこれ以上傷つくのは見たくないわ」

「儂も、自分の手で我が夫を死の淵に追いやるのは……」

飛んできた矢をまともに受け、倒れこむ楊燕。打ち所が悪かったのか、なかなか起き上がれないでいる彼に、妻二人が駆け寄ってすがり付く。

このような状況では、もうこれ以上の鍛練は不可能である。何より、大切な女たちを泣かせるのは楊燕の本意に反する。この鍛練方法は諦めるしかなかった。

しかし、それでも諦めきれない楊燕は、夜中に妻たちが寝静まった頃、密かに外へ抜け出していた。目的はもちろん、秘密特訓である。

脳裏に放たれた大量の矢を思い浮かべながら、それを全て切り払おうと剣を振るう。だが、イメージに体が付いていかない。すぐに息切れし、動きが鈍る。

「……俺は、ここまでなのか」

端から見れば充分化け物なのだが、楊燕は自身の伸び悩みに絶望しかけていた。呂布との差は縮まるばかりで、自身が思い描いていた圧倒的に勝つという事が出来なくなっていた。

このままでは、劉備軍に負ける。前世では、呂布ほどの将でさえも、最後は負けて劉

備に下った。そして、北郷と……。

「糞っ！」

地面に崩れ落ちたまま、拳を地面に叩きつける楊燕。そんな時、不意に声を掛けられる。

「楊燕、強くなりたいのか？」

その声を聞いた瞬間、楊燕は跳ね起きて剣を構える。すぐ近くに、外套で体を覆った者が立っていた。深くフードを被っているので表情は見えないが、おそらく男であろう。

その男を見た瞬間から、楊燕は自身の中で警戒レベルを最大まで引き上げた。いくら訓練による疲労で鈍っていたとはいえ、今まで全く男の存在に気付かなかったのだから。

「刺客か」

「私が刺客なら、お前は既に死んでいるであろう」

楊燕の問いに、男は答える。その口調には微かに笑みが含まれており、楊燕は若干ムッとする。しかし、冷静に考えれば男の言う通りで、楊燕は声を掛けられるまで存在に気付けなかったのだから。

「貴方は一体、何者なんです？　刺客でないなら、俺に何の用が？」

「私か？　私の名は……」
孤剣無敗、と男は答える。告げられたその名は明らかに偽名であり、またも楊燕は若干ムッとする。しかし、ふざけているようだが、この男が無敗なのは真実なのだろうと思う。何せ、楊燕自身がこの男を自分よりも強いと認識していたのだから。
「それより楊燕。強くなりたいのなら、私がさらなる高みまで引き上げてやろうか？」
その言葉に、楊燕は考え込む。普段の楊燕なら、受けなかったであろう。あまりに怪しすぎる。しかし、今は自身の伸び悩みを感じており、藁にもすがりたい気分であった。
「……見返りは、何だ？」
「ふっ、見返りなど要らん。元々、私がお前に興味があったというだけだ」
ますます怪しすぎる。しかし、この男が自分より強いのもまた事実。今までのように我流で訓練を続けても、いずれ才ある者に抜かれてしまうであろう。良師につくべきなのは間違いなかった。だが、この男、信用出来るのか？
楊燕はしばし悩むが、結局他に打開策は見つかりそうにない。一か八か、この男に掛けてみようと決意した。
決意した後の楊燕の行動は早かった。彼はその場で膝を付き、男に向かって弟子入りを誓った。
「……宜しくお願いします」

第十九話

楊燕が師事する事になった孤剣無敗という男であるが、やはり強かった。今の楊燕では、まるで歯が立たない状態である。これほどの腕を持っているなら、有名になっていてもおかしくないが、楊燕には心当たりがまるで無い。

その男自身は、俺に勝ったら正体を明かしてやると言っているものの、楊燕は一生勝てる気がしなかった。

「相手との実力差が分かるのも、実力の内だ。それが分かっているだけでも、まだ伸びしろがあるわい」

男はそう言うが、楊燕にはそれが果てしなく遠いもののように感じていた。今まで負けた事が無かった楊燕だが、上には上がいるという事実をまざまざと思い知らされていた。

「我流でここまで昇りつめたのは認めてやろう。しかし、狭い世界で今まで負けたことが無い故に、いささか慢心していたようだな」

だが、お前はまだ若い。まだ充分に伸びしろはある。そう男は言う。実際、楊燕は少しずつではあるものの、実力が増していた。

楊燕がまず行ったのは、武術の基本となる型を身につける事であった。今まで我流で戦闘術を磨いていただけに、楊燕の動きには癖が強く、アク抜きをする所から始まった。

それが済めば、いよいよ奥義の伝授である。孤剣無敗が教える奥義は、破剣、破槍、破鞭、破掌、破箭の五つ。しかし、ここで問題なのは、楊燕にも不得手な分野があるという事だった。

まず、楊燕は鞭など使った事が無い。だから、鞭の特徴も当然頭に入っておらず、防ぐ手立てがなかなか掴めないでいた。

そして一番の難関は箭、つまり弓術だった。何せ、楊燕には弓は扱えなかったのだから。

「飛んできた矢を、剣に吸い付かせるようにいなして飛ばし返す？　そんな事出来るのか？」

「じかに見た方が納得するだろう。私に向かって矢を射てみろ」

楊燕と男の間でそのような会話がされたのだが、肝心の楊燕の腕前がヘボ過ぎた。何度やってもまともに矢が飛んでいかず、全然届かないわ、見当違いの方向に飛んでいくわで、まともな訓練にならなかったのだ。

「お前……」

せめて、真っ直ぐ前に飛ばしてくれ、と呆れたように楊燕を見る男。これでは、技を

実演する事すら出来ない。
しかし、楊燕にとっては、どうしても弓は不得手だった。紫苑と桔梗という神弓二人を妻にしていながら、いくら二人に習ってもどうしても上手く扱えないのだ。元々、弓の素質が無いのだろう。
とはいえ、このままでは技の伝授が出来ない。少し乱暴だが、男は別の方法をとることにした。

※※※※※

「ガハハ、今日の獲物は大量だな！」
益州・辺境の廃村にて。賊どもが輪になって酒盛りを行っていた。少し離れた所では、若い女たちが一ヶ所に集められ、ガダガダ震えていた。
各地での討伐によって数を減らしているものの、黄巾賊の残党はいまだに多く残っている。彼らも、その内の一つであった。
本日も、彼らは近くの村を襲い、食料と女を略奪してきたばかりなのだ。当然、殺しも多く行っている。
まるで、わが世の春と言わんばかりの所業。しかし、そんな彼らの命脈が、今日で絶

たれるのであった。
「ギャッ！」
突然、頭から血を流して倒れる賊の一人。どうやら、拳大の石をぶつけられ、打ち倒された様子である。
一瞬静まり返る賊ども。しかし、さすがに修羅場を潜り抜けているからか、すぐに臨戦態勢に入る。
そんな彼らの前に現れたのは、外套で姿を覆った男と、若い男の二人。
「楊燕、ここで習った事を出してみろ」
二人の内の若い方……楊燕が前に進み出て、剣を構える。
「舐めやがって、一人で勝てると思うなよ」
激高した賊どもが、剣をかざして楊燕に殺到する。そんな彼らを、楊燕は一瞬で斬り伏せた。
元々、こんな奴らに不覚をとる楊燕ではないものの、その剣の冴えは以前とは比べ物にならないほど、キレが増していた。
「弓だ！　弓を持ってこい！」
囲んでも囲んでも、全く倒せる気配が無い。賊どもは、接近戦を諦めて、離れた所から弓で仕留める事にした。

「楊燕、私の動きをよく見てろ」
　楊燕に代わって、今度は外套の男が前に進み出て、剣を構えた。そして、飛んできた矢を剣の腹で受け、そのまま矢の勢いを殺すようにしながら体を回転させ、そして回転した勢いを利用して賊の方に矢を飛ばし返した。それを何度も何度も繰り返し、次々に返される矢に賊どもはどんどん数を減らしていく。
「ぎゃあぁぁぁーーーっ！」
　放った矢を返され、賊どもは断末魔の悲鳴をあげる。気が付けば、戦える者は残り三名。
　どう考えても格が違う。そう思わされた賊の残りは、ついに暴挙に出る。
「い、今すぐ剣を捨てろ。さもないと女を斬る！」
　拐った女たちを人質にする賊ども。しかし、男はそんな賊たちに平気で近づく。
「それ以上寄るな。本当に斬るぞ！」
「……人質は、生きていてこその人質だ。女を殺したら、私がお前を惨たらしく殺す」
　一歩も引かない男に、タジタジとなる賊ども。その一瞬の隙を突き、男は一気に距離を詰めて賊どもを早業で斬り捨てた。

第二十話

「何、蓮夜の様子がおかしいやて？」

紫苑と桔梗から楊燕に関する相談を受けた張遼は、視線を楊燕の方へと向ける。その視線の先では、楊燕は木陰で昼寝の真っ最中だった。

張遼は今、同僚の呂布とともに董卓の使いとして益州へと赴いていた。そして、楊燕が離れている間に、紫苑と桔梗から悩みを打ち明けられていたところだった。ちなみに、呂布は璃々と一緒に愛犬のセキトと戯れていた。

「うーん、いつもと変わらんように見えるけどなあ」

確かに、楊燕の体の動きにキレが出てきているようで、先ほども張遼は完膚無きまでに打ち倒されたばかりであった。しかし、雰囲気は前より柔らかくなったようで、以前に比べて刺々した部分は感じられなくなっていた。つまり、張遼には特に問題あるようには見えなかった。

「でも、最近は昼間も寝てることが多くて、政務の方が少し心配なのよ」

「それに、どうやら夜中に出歩いているようじゃしのぉ。ただ、何も言ってくれぬがの」

だが、紫苑も桔梗も納得していない様子である。いつも一緒にいる二人にしてみれ

ば、楊燕の行動パターンが変わったのだから当然である。
「あれやな、他所に良い女でも出来たんちゃう……ひっ！」
「あらあら、私に黙って浮気なんて、お仕置きしなければいけませんわ」
張遼がそう言った瞬間、紫苑の表情が険しくなる。それを目の当たりにした張遼は、思わず悲鳴を漏らした。
「ちょ、待ちぃや！　まだホンマか分からへんやん」
「さすがに、ちと早計ではないか？　まだ浮気と決まった訳では無かろう」
今にも寝ている楊燕に襲いかかりそうになる紫苑。さすがに放置できず、張遼と桔梗が止めにかかる。
「この間だって、あんなに愛し合ったのに……私というものがありながら……」
しかし、紫苑の機嫌は治まりそうにない。どうやら、この世界の紫苑はかなり嫉妬深いらしい。桔梗一人ならともかく、他の女に手を出そうものなら、一体どうなることやら。
とんでもない事を言ってしまった、と張遼は後悔するのであった。

※※※※※

現在の楊燕の状態が心配ではあるものの、夜な夜な抜け出して何をしているのかは、当然教えてもらえる気配も無い。楊燕からすれば、師の存在を固く口止めされているのだから当然なのだが、それが紫苑にはもどかしかった。紫苑からすれば、お互いに身体の隅々まで知った仲なのだから、秘密なんて作ってほしくなかった。そして、それは桔梗も似たような気持ちである。

となれば、彼女らの取る行動はただ一つ。それは、深夜に抜け出していく楊燕の後をつける事であった。

「一体、どこに向かうのかしら」

いつものように、深夜に抜け出した楊燕の後をこっそりと追うのは、紫苑と桔梗の愛妻二人と、後をつける事を提案した張遼。そして、もう一人……。

「なんや、恋も来たんか?」

「……何となく、面白そうだから」

意外なことに、呂布までついて来ていた。動物的な呂布らしい理由であり、面白そうという感覚で首を突っ込まれても困るのだが、それで言い争っていると、楊燕を見失いそうであった。なので、呂布の同行を認めざるを得ない。

「それより桔梗、貴方こそ大丈夫なの? お腹の子に何かあったら……」

「大丈夫だ。もう安定期に入ってるし、軽く運動もせねばならんからの」

少し目立ってきたお腹を愛おしそうにさすりながら答える桔梗。その間も、どんどん進んでいく楊燕。彼は後をつけられている事に気付かないまま、暗い森の中へと入っていく。

森の中だから、追跡は困難だった。近すぎたら気付かれる。しかし、離れすぎたら見失う。そんな時に役立ったのが、呂布である。正確にいえば、呂布の愛犬セキトであった。

「……セキトが、こっちって言ってる」

どうやら、楊燕の匂いを辿っているらしい。最初は犬を連れているのに難色を示していた一行だが、これなら見失う心配はなさそうである。

しばらくして、開けた場所に出た一行。視線の先には、すでに誰かと会っている楊燕の姿があった。

「どうやら、逢い引きではなさそうじゃの」

少しほっとした様子で、桔梗が呟く。しかし、こんなところまで来て、楊燕は何をしているのか。その疑問は、すぐに解消された。

彼女らの目の前で披露されていく、楊燕の剣技。恒例の、鍛練が始まったのだ。紫苑たちの気付かぬ内に、増していた楊燕の剣の冴えの秘密は、ここにあったのだ。

その卓越した剣捌きに、思わず見とれる紫苑たち。しかし、そんな楊燕ですら寄せつ

けず、圧倒していく外套の人物。その存在に、彼女らは戦慄する。

その時、鍛練の様子を見ていた呂布が、核心に迫る一言を呟いた。

「……師匠」

第二十一話

「師匠？　それがあの男の正体か？」
　呂布の思わぬ言葉に、紫苑と桔梗は驚いて再度聞き直す。外套で覆われていて姿が見えない以上、正体が分からないのではないか。そう思う二人だが、呂布は確信している様子であった。
「……あの身のこなし、どう見ても師匠」
「そうやなぁ。外套で顔は見えへんけど、言われて見れば師匠に見えてきたわ」
　そして呂布に続き、自信無さそうであるものの、張遼までがそう言う。張遼の方は半信半疑であるものの、二人がそう言うのだから、あの外套の男は呂布たちの師匠なのだろう。それよりも、張遼が呂布と同門なのが驚きであるが、よく考えれば当然である。二人は古くから同じ陣営に属しているのだから。
　その時、呂布のそばからセキトが物凄い勢いで男に向かって駆けていく。
「……あ、セキト」
「ちょっ、待ちいや呂布ちん！」
　セキトが飛び出した為、呂布が後を追う。として、それに続いて張遼も飛び出してい

く。その為、今まで隠れて様子を見ていたのだが、皆が男の前に姿を表す事となった。その為、楊燕も紫苑たちの存在に気付くのであった。

※※※※※

「紫苑、桔梗、来たのか！」

妻たちの顔を見て、楊燕は驚く。

「だって貴方、最近は毎晩居なくなるし、心配で……」

「ワシらに黙って他所で良い女子が出来たのではないかと、居てもたっても居られなかったのじゃよ」

そう口にする妻二人。正直に言えば、楊燕は驚いていた。まさか、自分が浮気を疑われる事になるとは思わなかったのだ。とはいえ、（この世界での）紫苑に対しては桔梗の件があるから何とも言えないが、楊燕自身は他所に女を作る気など無いと断言できた。

前世が前世だけに、心配してもらえるのは物凄く有難いと楊燕は実感していた。だから彼は妻たちが愛しくなり、思わず二人を抱き寄せた。

「そうか、心配してくれたのか」

「貴方……」

「んっ……」
　紫苑たちも、左右から楊燕にしがみつく。その様子、まさに両手に花。特に最近の桔梗は、お腹に赤ちゃんがいるせいなのか、女らしさがどんどん上がっているように感じている。今や、桔梗も楊燕にとって大事な女となっていた。
「あ、あの……目の前で堂々とイチャつかれても困んねんけど」
　気が付けば、すぐ近くで張遼が恥ずかしそうに見ていた。
「あ、張遼も居たんだ」
「居たんだ、やないねん！　あー、何でこっちが恥ずかしい思いせなあかんねん！」
　楊燕の言葉に、張遼がガクッと肩を落とす。
　しかし、張遼にとって本題はそれでは無い。その彼女の疑問をあっさり解消したのが、呂布の言葉であった。
「……師匠、久しぶり」
「し、師匠だと！」
　呂布の言葉に、楊燕は驚く。今まで孤剣無敗と名乗っていた男の正体が、思わぬ形で明かされようとしていたから。
「人違いであろう」
　それに対する男の答えは、否定だった。しかし、その言葉は説得力皆無である。

「……絶対に師匠。でなければ、セキトがこんなに懐かない」
呂布の言葉に、ふと男が足元を見下ろせば、セキトが今までにないくらい尻尾を振りまくり、過去最強の懐き方で男に飛び付いていた。
「……滅多に懐かないセキトがここまで懐くのは、元の飼い主である師匠以外にあり得ない」
そう断言する呂布。それに対し、男は言葉を返せない。決定的な証拠を突き付けられたのだから、もはや否定は無意味であった。
「やはり、これ以上は隠せないか」
そう言いつつ、男は外套を脱ぎ捨てた。現れたのは、顔に傷のある、壮年の男であった。
「……やっぱり、丁原師匠」
「丁原師匠、生きとったんや!」
そして同時に、明らかになる男の本名。やはり半信半疑だったのか、張遼は驚いた声をあげる。だが、驚いたのは彼女だけではない。その名前を聞き、楊燕たちも驚愕する。
北方の雄として名を馳せていた丁原の名は、楊燕たちも聞き知っていた。その丁原が益州に居ることも驚いたが、何より彼らを驚愕させたのが、目の前の丁原が、一般的には既に死者として世間に認識された存在だったのだから。

男の正体に、言葉も出ない楊燕たち。それに対して、丁原は苦笑いする。
「もう、表には出ないつもりだったんだがな」

第二十二話

丁原は元々、北方の并州を本拠地とする武将である。彼は学問が苦手で文官の仕事は全くできなかったものの、武に秀でており、文字通り剣一本で刺史にまで昇りつめた男であった。呂布も張遼もその時に取り立てられ、武術の基礎を叩き込まれたのである。

特に、丁原が存在感を示したのが、北方の異民族・烏桓や鮮卑との闘いであった。食料を求めてしばしば攻め入ってくる異民族の侵攻を万里の長城付近で撃退し続けた為に、当代一の武将とまで謳われるようになったのだ。

そんな丁原だからこそ黄巾の乱が勃発した際、大将軍の何進によって洛陽の都に招聘され、鎮圧軍の大将として討伐に乗り出すこととなったのだ。思い返せば、そこが丁原の絶頂期であったのだろう。

しかしその後、丁原は黄巾討伐の戦勝祝いの帰路で襲われ、非業の死を遂げたとされる。そのために彼の軍は瓦解する事になったのだ。彼を殺した下手人ははっきりと分かっておらず、謎に包まれている。一説には配下の呂布が手を下したのではないかと言われていたのだが……。

「……そんな事、する訳が無い」

憮然とした様子で言葉を発する呂布。彼女にしてみればとんだ濡れ衣である。しかし、そう思われても仕方ない部分はあった。何せ丁原が余りにも強過ぎる為、彼を倒せる人間は他に居ないのだから。

それに、丁原は戦いにおいて敵に敗れた訳ではなく、朝廷での戦勝祝いの帰りに襲われていたのだ。いくら油断していたとはいえ、顔見知りでなければ容易く彼に近づける者など居やしない。

だが、不意に襲われたとしてもあの丁原が敵に後れを取るとは思えないのだが……。

「おそらく、飲み食いした物に薬を盛られていたのだろう。意識が飛んで記憶が曖昧なのだ」

面目無い、とでも言うように丁原が声を搾り出す。これでは、まだまだ下手人の特定には至らない。だが状況から見て、黒幕は戦勝祝いに参加した誰かであろう。

（前世であれば、間違いなく董卓を疑うところだが……）

楊燕には、あの董卓が丁原を襲わせたとは到底思えなかった。前世ならいざ知らず、楊燕が知っている今世の董卓は虫も殺せないような可憐な少女なのだから。しかし、丁原から聞いた当時の状況を考えると、董卓は間違いなく容疑者の一人とも言えた。

「まさか、月がそんなことする訳ないやん！」

「……月、そんなこと、しない」

内心では疑いたくないのだろう、張遼も呂布も楊燕の考えを強く否定する。だが、前世を知っている楊燕からすれば何とも言えなかった。

こういう時は丁原が死ねば誰が得するのか、あるいは得をしたかを考えるべきなのだ。そうなると董卓は明らかに得をしている。実際、丁原の部下だった猛将達をごっそり抱える事になっているのだから。

他に得をした者といえば、張譲をはじめとする宮廷の宦官どもであろう。彼らは大将軍の何進と対立しており、何進派の最大勢力である丁原を始末すれば、政敵の勢力を弱める事に繋がるのだから。

その一方で、明らかに損をしているのが何進である。彼女だけは、そもそも丁原を殺す理由が無く、容疑者から除外しても差し支えないだろう。

となると、考えられるのは三つ。

一つ目は、宦官どもの犯行。理由はもちろん、何進派の勢力の弱体化。

二つ目は、やはり董卓の犯行。理由は、丁原旗下の猛将の取り込みと、何進に代わって朝廷での権限掌握。

そして三つ目は、何進が邪魔という両者の利害が一致した宦官と董卓の共犯。

「だから、月がそんなことする訳ないて言うてるやん！」

張遼が、声を荒げて楊燕に食ってかかる。張遼にしてみれば、丁原軍が瓦解して路頭

に迷いかけたところで、優しく手をさしのべてくれた董卓を疑いたくないのだろう。
「しかし、董卓自身は白でもその周りはどうだ？　一人、野心家が居るだろう？」
「まさか、詠の事か！」
詠とは、賈駆の事である。董卓の軍師を勤める彼女ならばやりかねない。まさかとは思うものの、賈駆の性格を考えれば張遼も呂布も否定する材料が無い。実際に、董卓を今の地位に引き上げる為に、裏で汚れ仕事を一手に引き受けているのが彼女だったから。
「まあ、これはあくまで推測だ。一旦様子見だな」
楊燕がそう言うも、張遼と呂布は言葉を失ったままであった。

第二十三話

さて、正体を現した丁原であるが、今さら北方の故郷には戻れない。死んだと思われていた人間が生きていたとなると、大騒ぎになるに決まっている。それに、丁原の死を望んでいた人間が居る以上、のこのこと中央に戻るのは危険過ぎた。

しかし、丁原には心残りが一つあった。それは、自分の武術を世に広め、後継者を育てる事である。実は、あの呂布でさえ、まだ丁原の持つ奥義を会得するには至っていない。自分の武術を伝えられないままでは、死んでも死に切れない。

そして、一方の楊燕も、丁原に師事するだけに留まらず、益州軍の戦力強化の一環として、丁原に軍の武術師範となってもらうという思惑があった。

そんな両者の思惑が合致した結果、丁原は楊燕の陣営にはせ参じる事となった。もちろん、本名のままではまずいので、名を変える事となった。以降、彼は丁原から名を廖化と改めて名乗り、楊燕の下で大陸を転戦する事となる。

「それにしても、やけに女の弓兵が多いんだが」

益州の楊燕陣営に来た廖化は不思議そうに呟く。もちろん、魏延のように近接武器を扱う女も居るが、その数は少ない。どう見ても不自然なくらい、弓兵に女が集まってい

たのだ。
「確かに、最近になって殆どの女が弓兵を希望するようになっているな」
　廖化の言葉を受けて、楊燕も不思議そうな表情を見せる。
　その廖化と楊燕の会話に入ってきたのは、紫苑と桔梗。彼女たちは左右からそれぞれ楊燕の腕に抱き着きながら、嬉しそうに言う。
「あら、貴方ったら知らないのかしら？」
「弓兵を希望する女が増えたのは、ある意味ワシらのせいじゃぞ♪」
「ん？　どういう事だ？」
　紫苑と桔梗の言葉に、楊燕は不思議そうに尋ねる。
「女が弓を上手く扱えるようになれば、良い男の心を射止められるっていう噂があるのよ」
「ワシらが蓮夜を射止めたから、それにあやかる女が増えているのじゃよ」
「射止めたって……」
　半ば強引に押しかけたのでは、と呟く楊燕。紫苑とは昔の主である劉焉によって強制的に結婚させられ、桔梗にいたっては寝込みを襲われ既成事実を作らされたのだ。これでよく射止めたと言えたものである。
「あら？　貴方は今、幸せじゃないのかしら？」

「……幸せです」

問い詰める紫苑の様子に、楊燕は思わずたじろぐ。紫苑の笑顔にどこか圧力を感じ、思わず屈してしまった形となったのだ。

「うむ、そうじゃろうな」

その楊燕の答えに、桔梗は満足そうに笑う。

しかし、そうは言うものの、実際に楊燕は幸せであった。結婚までの経緯はともかく、今や紫苑とも桔梗とも仲が良く、誰が見ても完全におしどり夫婦である。紫苑との間に璃々という可愛い娘が生まれ、また桔梗のお腹の中にも赤ちゃんがいる。楊燕は、前世では成し得なかった理想の家庭を築き上げていた。

「……オホンっ！」

廖化の咳ばらいで、自分たちの世界に浸っていた楊燕たちは、我に返る。

「……仲が良いのは構わんが、せめて人目のない所でやってくれ」

イチャイチャしまくる楊燕たちの様子に対し、呆れたように言う廖化であった。

※※※※※

さて、このように楊燕が妻たちとイチャラブしている間にも、大陸の状況は目まぐる

しく変化していくのであった。

まず、洛陽の状況であるが、宦官らの十常侍がついに決起し、対立していた何進を急襲。丁原を失っていた何進はなすすべもなく、暗殺されてしまう。

だが、何進派の一人であった袁紹だけは取り逃がしてしまい、その為に彼女の復讐を許すことになる。今度は袁紹が十常侍に逆襲、宦官どもを斬ってしまう。

しかし、ここで袁紹は十常侍筆頭の張讓を取り逃がしてしまう。張讓は幼帝の劉弁とその妹劉協を連れ出して西へと逃走し、再び朝廷に返り咲くべく再起を図るが、今度は洛陽の政変を嗅ぎ付け上洛途中であった董卓軍によって長安で討たれてしまう。

そして、幼帝らを手中に収めた董卓陣営が政権を掌握し、そのまま洛陽に進撃して天下に号令を発する事となる。

これで、朝廷のゴタゴタは一旦治まったかに見えたが、今度は袁紹が董卓に噛みつき始める。彼女は何進が暗殺された際、ここぞとばかりに宦官を排除して自分が天下第一の将として天下に号令を発するつもりでいたのだ。それを漁夫の利とばかりに董卓に幼帝をかっ拐われてしまったのだ。

怒りが収まらない袁紹は、自身の財力と名門の家柄から成る影響力を利用し、各地の諸将に檄文を飛ばす。かくして、ここに反董卓連合が結成され、ますます世の中は混沌へと向かうのである。

第二十四話

楊燕陣営は今、軍議を開いていた。議題は、反董卓連合に際して、董卓と袁紹のどちらに味方するかどうかであった。どうやら袁紹は反董卓連合の檄文を乱発しているらしく、楊燕の所にも檄文が届いたのだ。

それに関して、楊燕陣営内で様々な意見が出されたが、連合に参加すべきではないとの意見が多かった。その理由は明白で、涼州の韓遂問題が解決していないからである。益州では毎年のように異民族の侵入があり、現在は韓遂が虎視眈々と益州を狙っていた。

もちろん、楊燕も何もしなかった訳ではない。氐族との連携を強化すべく、呉懿に命じて氐族を率いる楊千万という女と結婚させたのだが、あまりにも韓遂軍の侵食が早すぎた。韓遂は西涼の馬一族を従えただけでなく、羌族の主な指導者を斬って羌族の戦士を吸収してしまい、楊燕にとって無視できない勢力となっていた。

その為、楊燕が取るべき行動として、案に上がったのは以下の四つ。

一、韓遂戦に全力を注ぐ

二、反董卓連合に参加

三、董卓側に加勢

四、軍を二つに分けて対韓遂と、董卓または反董卓に参加

前世を知っている楊燕としては、二の選択肢を選ぶべきだと知っている。前世では、反董卓連合に参加した諸将はそこで名を挙げており、参加しなかった連中は後に衰退しているのだから。また、この戦いに参加した将は、董卓側の有能な将を陣営に引き込み、それが後の勢力拡大の要因となっている。楊燕も密かに、後々呂布や張遼を引き込めたらという目論みがあった。

しかし、これまでの立ち位置を考えれば、むしろ董卓陣営に加勢してしかるべきである。今までよしみを通じておいて、いざという時に敵対するのは明らかに裏切り行為である。それに、この反董卓連合で劉備陣営の名声が上がって勢いが強くなれば、後に禍根を残すことになる。もちろん、楊燕自身が諸将を敵に回す危険性はあるが、呂布らを擁する董卓陣営と組めば、対等に戦えるはず。丁原の件での蟠りはあるものの、楊燕が視野に入れていたのは、董卓陣営に加勢するという選択肢であった。

しかし、先に述べたように、状況的に董卓陣営に参加するのは難しかった。もし洛陽方面に進軍すれば、韓遂が必ず益州へと攻めて来るのだから。それどころか、既に韓遂が涼州を進発したという情報さえ入っていた。その進路から考えれば、行き先は益州である事は間違いない。

その為、楊燕が出した結論は、まずは早急に韓遂問題へと対処する事だった。その後、状況を見て動きを決める。

このように、董卓と袁紹がぶつかる前に、楊燕は韓遂との一大決戦を迎えたのであった。

※※※※※

「あの男、救援要請に応じないなんて、一体どういうつもりよっ！」

洛陽の宮廷内で、賈駆が感情剥き出しで当たり散らしていた。その怒りの対象は、楊燕である。

「どうやら、楊燕の所にも袁紹の檄文が届いているらしい」

どこから得たのであろうか、そのような情報を持ってきたのは、董卓軍古参の将である華雄である。そして、その言葉を聞いた賈駆はますます不機嫌になる。

「ちょっと探ってみたんやけど、蓮夜は韓遂との戦いを控えてて、洛陽どころやないみたいやで」

楊燕をフォローするかのように、張遼が発言をする。実際、張遼が探ってみたところ、韓遂は隴西にまで進出しており、益州への攻撃準備を窺っているところであった。それ

に対して、楊燕も韓遂を迎え撃つべく進撃しており、とても洛陽に援軍を回せる状況ではない。

（私たちだけじゃ圧倒的に不利じゃない。でも、楊燕が敵に回っていない事を良しとすべきかしら）

董卓側には、呂布や張遼がいるので、簡単に諸将に負けるとは思わない。だが、数の暴力は結構脅威で、だからこそ賈駆は楊燕に救援要請をしたのだ。

思えば、十常侍が勝手に暴走したおかげで、呂布や張遼が手に入ったのだ。彼らがいなければ、袁紹に簡単に飲み込まれていただろう。実際、賈駆は呂布と張遼を自陣に引き込むことを計算して、十常侍の企みを察知しながらも丁原を見殺しにしたのだ。

しかし、十常侍が暴走しなければ一豪族のままであり、今もまだ洛陽を占拠できていないだろう。賈駆にはもはや、何が正しかったのか分からなくなっていた。

（いえ、あのままなら私たちも十常侍に利用されて、丁原や何進と同じ末路だったわ）

少なくとも、あの時は正しい選択だったのだ。誤算だったのは、袁紹が諸将を一声で動かせるほどの動員力を持っていた事である。敵は袁紹を始めとして、袁術、曹操、孫堅、そして御遣い擁する劉備の義勇軍。聞いてるだけで頭が痛くなるような戦力差である。

しかし、手を拱いているばかりではない。こちらには呂布がいる。不利だとしても、

簡単に負けるような戦力ではない。
「長期戦に持ち込むのよ。華雄将軍は汜水関に。恋と霞は虎牢関に向かってちょうだい」
長期戦に持ち込み、その間に楊燕に救援要請し続ける。楊燕が来たら形成逆転。楊燕が間に合わなければ、もしくは敵に回れば負け確定。文字通り、鍵は楊燕の動きである。
一度決断したら、あとは素早かった。賈駆はテキパキと配置を決め、具体的な指示を与えはじめ、華雄が槍を担いで部屋を出ていく。
しかし、そこで話を遮ったのは、呂布だった。
「……詠、聞きたいことがある」
「何よ」
「……詠、恋の師匠を殺した?」
単刀直入に聞く呂布。
「ちょっ、何いうてんの!」
呂布の言葉に慌てる張遼。いくらなんでも、直球すぎる。しかし、それは張遼自身も気になっていた事である。それに対する、賈駆の答えは。
「馬鹿ね。そんな事する訳ないじゃない」
間髪入れず、答える賈駆。確かに、丁原暗殺計画を知りながら見殺しにしたのは事実。

その意味では、賈駆にも後ろめたい事があった。
しかし、賈駆は手を下していない。その事は断言できたから、賈駆は呂布に見つめられても目をそらさない。
しばらくにらみ合う二人。呂布の内側までを探るような視線に、賈駆はだんだん居たたまれなくなる。だが、先に目をそらしたのは呂布であった。
「……分かった、信じる」
「ちょっ、待ちいや」
そういうと、呂布は戟を担いで部屋を出ていき、その後を張遼が慌てて追いかける。
二人が出ていき、一人部屋に残される賈駆。一人になった瞬間、彼女は崩れるようにその場に座り込んだ。

第二十五話

韓遂との決戦に向かう楊燕だが、主な将は以下の通りである。

本隊：楊燕、黄忠、廖化、楊懐（見習い）、高沛（見習い）

軍師：徐庶、楊戲（見習い）

分隊：黄権、呉懿、楊千万

ちなみに、桔梗は今回の遠征には参加せず、成都に残ってもらう事となっている。

「ワシ一人だけ留守番とは、つまらんのう」

桔梗はそうぼやくが、楊燕の判断は当然である。さすがに、身重の女性を戦場に連れていく訳にはいかないのだから。ただし、戦場に出ないといっても、桔梗の責任は重大である。なんせ、主が留守の成都を守ってもらうのだから。

それに、成都には璃々が残っているし、楊宗や楊洪などの楊燕の一族が固まっている。まだ幼い彼らは現在、修行中の身であり、彼らのお守りも桔梗の立派な役目である。

さて、韓遂が隴西に来た段階で、なぜ楊燕がその動きを察知できたかについてだが、彼は外敵の襲来に備えて常日頃から緊急用の連絡手段を整備していたからである。楊燕は元々韓遂を真っ先に倒すべき敵と定めており、益州の北端に間者を放っていた。

さらに、益州北側に広がる峻険な山々の至る所に砦を配置し、異変があれば狼煙を上げる仕組みを確立させていた。さらに、連絡内容によってのろしの色を分けており、例えば歩兵は青、騎兵は緑で、少数の敵なら白、一万以上の大軍なら黒といった具合に、細かい伝達も可能にしていた。

また、他の砦から狼煙が上がらない等、万一の為に他の砦に向かう為の早馬も準備してあり、その際には緊急手段として道を塞ぐ為の仕掛けも施してあった。

以上の事から、楊燕は早い段階で韓遂の進撃と、その具体的な兵の数まで察知していた。それによると、韓遂が率いる兵の数は五千。その内、騎馬兵が五百。結構な大軍である。狼煙という連絡手段の限界か、さすがに韓遂配下一人一人の将が誰かまでは分からないが、結構な数の騎馬兵が居る事から、馬一族も参戦している事は想像できた。

このような事態に備えて、楊燕も剣閣を守っていた呉蘭、雷銅に狼煙を上げ、山岳戦、つまりゲリラ戦で敵を翻弄して行軍速度を遅らせろという命令を既に伝えている。

「さて、俺らも行くぞ」

楊燕が檄を飛ばし、全軍に進発を命じた。

＊＊＊＊＊

「くそっ、何だこれは」

韓遂は現在、大変苛立っていた。不意を突いて攻め込んだつもりが、しっかりと楊燕側にバレて対策を立てられていたのだから。

大陸では現在、戦の際に宣戦布告を出すことが通例となっており、これが無ければ卑怯呼ばわりされる。だが、韓遂は奇襲作戦を成功させるべく、楊燕に対して宣戦布告を出すという過程をすっ飛ばして益州に進撃を開始したのだ。もちろん、今回の遠征には反対意見も多くあり、特に宣戦布告無しでの進撃に抵抗感を示すものが多かったが、韓遂は強引に進撃を決めてしまった。彼の理念はいわば『勝てば官軍』である。いくら綺麗事を並べたところで負ければそれまでである。

だが、韓遂にとって誤算だったのが、楊燕自身が、宣戦布告無しでの開戦は卑怯、という考えを一切持っていなかったことであった。韓遂は知らないが、楊燕は前世の記憶を持ったまま転生しており、奇襲夜襲はむしろ当たり前という感覚の持ち主だった。

その為、韓遂は今、大いに苦戦していた。峻険な渓谷の道は大軍を通すのに不適切な狭さであり、さらに楊燕配下の呉蘭と雷銅によって山岳戦を強いられ、少なくない被害を出していた。それでも、いかにも猪突猛進な彼らしく自身と配下の武力によって強引に道を切り開き、徐々に険しい間道を進んで剣閣付近までたどり着いていたものの、奇襲作戦はすでに失敗していた。

「韓遂様、大変です。補給部隊が後方から攻められています」
「何っ！」
部下の報告に、韓遂は苛立つ。網を広げるようにして進軍した筈が、いつの間にか敵に背後に回られていた。補給部隊がやられたら、遠征は不可能である。
「すぐに救援を差し向けよ」
韓遂の命で、部下はすぐさま飛び出していく。だが、今度は別の報告が舞い込んでくる。
「成都方面から、敵軍が現れました」
その報告に、韓遂は頭を抱える。予想していたよりも、楊燕の軍が早く現れたからである。だが、奇襲作戦がすでに破綻していた以上、もはやどのような事が起きてもおかしくはなかった。
「これ以上は無理だ。引くぞ。早く間道に逃げ込め」
決断したら、あとは早かった。韓遂は軍をまとめると素早く退却を開始した。剣閣で包囲される前に間道に飛び込みさえすれば、まだ逃げやすいと判断したのだ。追手が来たとしても、狭い間道では進撃は難しいはず。少々の山岳戦法など、無視して強引に押し進めばいい。
（この分だと、馬超の方も無事では済まねえだろうな）

韓遂はそう考えながらも、別動隊よりもまずは生き残るが第一とばかりに逃げ落ちていった。

第二十六話

韓遂は猪武者だが、正真正銘の引き際、つまり命の危機を悟ったら退却も早い男である。楊燕が剣閣に進出した頃には、すでに山間の間道に入ってしまっていた。狭い道に入られてしまっては、韓遂を追撃して包囲するのは難しい。

だが、楊燕は韓遂を逃がすつもりは全く無い。今ここで韓遂を見逃せば、瞬く間に息を吹き返してしまう。そうなれば、董卓の救援の間にまた攻められるのは確実である。

それに、韓遂は楊燕の両親を戦死させた仇敵である。二重の意味でも、韓遂を逃がすという選択肢はありえない。

「山中の撹乱部隊に命令を出す。黒の狼煙を上げろ」

楊燕が配下に命じて、山中の部隊に連絡させる。

「黒の狼煙。では楊燕様は……」

「ああ。ここで韓遂を討つ」

凛とした目で前を見据えたまま、楊燕は韓遂の追撃を命じた。

＊＊＊＊＊

一方、その頃の益州別動隊は、綿竹付近で馬超軍と対峙しようとしていた。

「その策は、ちょっと……」

別動隊を率いる黄権の策に、呉懿が苦言を呈す。その理由は明白で、黄権の策が当初の予定とあまりにも違っていたからである。

そもそも、綿竹付近まで敵をおびき寄せるなど、危険極まりない行為なのだ。綿竹は成都からほど近く、もし黄権隊が敵に敗れるようなことがあれば、一気に成都まで落とされる可能性があるし、または剣閣付近の楊燕軍本隊が韓遂と馬超の挟み撃ちに遭う事もありえるのだ。少なくとも、自分であれば山岳戦で確実に敵を消耗させて疲弊したところで叩く。なぜなら、馬超は猛将であり、まともに相手すれば無傷では済まないだろうから、と呉懿は考えていた。

ところが、黄権が選んだのは山岳戦による消耗作戦ではなく、綿竹まで敵をおびき寄せて包囲し、一気に雌雄を決するやり方であった。黄権がらしくない戦略をとったのも、馬超を確実に捕らえるためであった。山岳戦となれば、山道に丸太や大岩を落とす等、敵に打撃を与える事ができる。しかし、その戦闘でうっかり敵将を殺してしまう事もあり、また劣勢を悟られて早い段階で退却されたのでは、馬超を生きたまま捕らえられない。だから、黄権は上手い具合に馬超を綿竹まで誘い出したのだ。

確かに、綿竹の北側は山道になっており、大軍が即座に行き来するのは困難である。包囲戦となれば都合が良い場所でもあった。だが、敵に余力を残した状態で包囲すれば、手痛いしっぺ返しを喰らう恐れがある。それに、敵と兵力が似ている場合、普通は包囲戦を行わないものである。包囲戦を行う場合、相手の兵力の数倍は必要だとされているのだから。

しかし、黄権には別の考えがあるようで、次々に指示を出す。

「ありったけの旗を立てろ。敵に大軍で来ていると見せかけるのだ」

黄権の指示で、辺り一帯に黄の旗が立つ。何も知らない敵が見れば、さぞかし大軍で綿竹を取り囲んでいるように見えるだろう。さらに、黄権の指示が飛ぶ。

「本陣に、ひと際目立つ旗を立てろ」

その指示で、今度は本陣付近に金で縁取られた旗が立てられる。その指示に、呉懿は目を疑う。どう見ても、ここに本陣がありますと敵に知らせているようなものである。

「黄権殿、気でも狂ったのですか？　敵をかく乱するために大量の旗を用意したのでは」

驚く呉懿に、黄権が答える。

「何を言っている。敵に俺の位置を知らせる為に立てたのだ」

「なっ！　貴方は馬鹿ですかっ」

呉懿が信じられない、と言いたげな様子を見せる。黄権がことごとく通常ではありえ

ない策を取っているのだから当然である。なぜ、わざわざ楽に勝てる戦を難しくするのだと責め立てる。当たり前である。もし負ければ自分の命だけでなく、益州の命運まで左右するのだから。

　そして案の定、馬超が別動隊本陣に向かって突撃を仕掛けてくる。これだけ（見せかけた）大軍を相手にしているのだから、せめて大人しく兵を引いてくれと願っていた呉懿だが、その期待はあっけなく崩壊する。

「だから、言わんこっちゃない。馬超がこっちに真っすぐ突っ込んできますよ」

「だろうな。今から撤退するには時間がかかる。馬超の性格なら、味方を逃がすために自ら本陣に突っ込んでくると思ったよ」

「だから、呑気に構えている場合じゃないでしょうが！」

　ありえない采配を連発する黄権に、ついに呉懿がキレたのであった。

「どうりで、すんなり行くと思ったぜ」

　開けた場所で大軍に包囲され、馬超は嫌そうな顔をする。今までの戦闘では全て馬超軍が押しており、黄権軍はなすすべなく後退するのみであった。しかし、これは馬超を死地に引き込むための巧妙な罠だったらしい。現に、周囲一帯を黄の旗が立ち並んでおり、どう見ても包囲されていた。

「馬超様、こちらは地理的にも不利です。ここは撤退しましょう」
配下の副将がそう進言する。だが、このような事態になっては、おそらく相手がすんなりと逃がしてはくれないだろう。これまで通ってきた山道は細く、軍が行き来するには不便な場所である。退却を開始すれば追撃を受け、被害が甚大になるであろう。
「分かった。アタシが時間を稼ぐから、お前は軍をまとめて退却を開始しろ」
「ば、馬超様はどうするつもりで？」
「アタシは精鋭を率いて敵の本陣に突っ込む」
「そ、それは危険です！」
副将が驚いて止めようとするが、馬超はすでに馬に乗り、命令を発していた。
「ぐずぐずしてたら、全員がやられるだろ！　後で追いつくから、先に引け！」
馬超はそう言い捨てると、周囲の精鋭を率いて敵本陣に突っ込んでいった。

第二十七話

味方の退却を助けるべく、大将みずから敵陣に突撃していった馬超であるが、結論から言えば黄権に敗れ、捕縛されてしまった。彼女は自他共に認める武の持ち主であり、槍を持たせれば天下一品の腕前なのだが、最終的には黄権に敗れてしまった。

そもそも、最初から勝ち目の無い戦だったのである。精鋭の騎馬隊を率いて敵陣に突っ込んだまでは良かったが、それを黄権に読まれていた。本陣にたどり着く前に落とし穴や柵などで騎馬の動きを止め、その勢いを削いでしまったのだ。その用意周到に仕掛けられた罠に、馬超率いる精鋭部隊はなす術が無かった。

もちろん、馬超もやすやすと捕まった訳ではなく、彼女自身もかなり奮戦した。その為、黄権軍の兵たちは馬超を遠巻きに取り囲むのみであった。

そのまま馬超を捕まえられないのかと思われたとき、一人の男が進み出る。その男とはもちろん、楊燕軍別動隊の大将である、黄権であった。彼は奮戦する馬超に対し、一騎打ちを持ち掛けに来たのだ。

もちろん、馬超に異論は無く、そのまま一対一での戦いとなったものの、黄権は単純に強かった。さすがに、楊燕と共に益州統一戦を乗り越えてきた将であり、楊燕ほどで

はないにせよ、それに近い実力を彼もまた有していた。
戦に敗れ、一騎打ちでも勝てなかったからには、馬超には文句を言う資格は無い。彼女は潔く腹をくくり、黄権に捕縛されたのであった。

「ここまで完璧に負けたんじゃ、どうしようもねえ。好きにしろよ」
観念したかのように、馬超はうなだれる。だが、黄権には彼女を殺すつもりは全く無かった。ここで殺したのでは、独断で軍を動かして彼女を捕らえた意味が全くなくなるのだから。
黄権が馬超を生きたまま捕縛しようとした理由、それは彼女自身を黄権が欲したからである。要は、黄権自身が馬超を女として手に入れたかったのだ。だから彼は、馬超の縄を解くと、その場で彼女を口説き始めた。
「ば、馬鹿かお前っ！　こんな時に何言ってんだよっ！」
傍から見ても分かるくらい、馬超は顔を真っ赤にして声を荒げる。そして、周囲の兵も黄権の行動にギョッとする。まさか、一か八かの無茶な策を弄してまで馬超を捕らえたのは、自分の女にする為だったのか、と唖然とする。
しかし、黄権は本気も本気、大真面目である。彼にはもはや、馬超しか見えていない様子である。

「俺は本気だぞ。この一年、お前を想わなかった日は無い」
「こ、こんな時に何言ってんだよっ！　本気で頭がおかしくなったのかっ！」
黄権が本気だと知ると、馬超は慌て始める。無理もない。今まで男のようにふるまって戦場を駆け回ってきた彼女からすれば、男に恐れられこそすれ、このように口説かれた事など皆無なのだから。このような事態に慣れていない彼女は、思わぬ展開に理解が追い付かず混乱していた。
だが、黄権はなおも馬超を口説き続ける。彼にしてみれば、ずっと恋焦がれていた上に、この遠征中に時折、呉懿と楊千万の新婚夫婦ののろけを垣間見たせいで、余計に恋慕の焔を燃やされていたのだ。我慢ができる筈が無かった。
「さっき、好きにしろって言ったのは、嘘なのか？」
「だ、だって……アタシは男女って言われてるし、可愛くねえし……」
黄権の言葉に、馬超は急にしおらしくなる。そのモジモジとした様子は、黄権にはグッとくるものがあった。本人の自己評価はともかく、黄権から見れば、いや、誰が見ても馬超は文句なしに美女である。
「馬超、お前は可愛い。俺が保証する」
「な、なに言ってんだよっ、バカっ！」
本当に、自分でも何言ってるんだろうと黄権は思う。だが、一度燃え上がった恋の焔

は収まりそうになかった。彼は何度も何度も馬超を口説き、相手がうんと言うまで逃がさないとばかりに求愛し続ける。

「馬超、俺は本気でお前が好きだ。俺と正式に結婚してくれ」

何度断っても、食い下がる黄権。だが、馬超自身はここまで熱い告白を受けた事が無く、拒否の言葉がだんだん弱々しくなっていく。彼女自身、ここまで思われている事に悪い気がしなかったのだ。

よくよく考えれば、自分よりも強く、顔も良し。断る理由などあるのだろうか。そのような相手に本気で迫られ続け、だんだん馬超の心が軟化していくのであった。

そして、長い押し問答の末、ついに馬超は折れた。

第二十八話

その頃、楊燕軍の本隊は、かなりのところまで韓遂を追い詰めていた。

（よし、捉えた）

不利を悟って早い段階で退却を開始した韓遂軍は、山道を越えるのに苦戦している様子である。だが、それも当然である。合図の狼煙をあげて、あらかじめ山道に大岩を落として道を塞ぎ、渓谷の左右の高台に伏兵を配置して矢を雨のように降らせ、甚大な被害を与え続けていたのだから。

もちろん、楊燕は容赦するつもりはない。韓遂を生かしておけば、後にどのような災いが降りかかるか分からないのだ。だから、ここで討ち取るつもりで楊燕は軍を進め、馬を駆けさせていた。

「気をつけろ。韓遂は強いぞ」

師の廖化が楊燕に声を掛ける。もちろん、楊燕もそれは分かっている。瞬く間に涼州を制圧したその武力は侮れない。だからこそ、武都に逃げ込まれる前に決着をつける必要があった。彼方では、未だに苦戦しているのか、韓遂軍が右往左往している様子が映る。ようやく、敵を間近に捉えたのだ。

そのまま敵軍に突っ込み、蹂躙していく楊燕軍。韓遂軍は追撃を受け、数を減らしていく。そんな中、敗走し始める兵たちに逆走するかのように、一団を率いて向かってくる将がいた。韓遂である。彼もまた、到底逃げきれないと悟ったのだ。彼は少数の精鋭を率いて楊燕軍の追撃から支える。その間にも、韓遂軍の兵たちはどんどん戦場から離脱していく。

韓遂軍の精鋭と、真っ向からぶつかる楊燕の軍。狭い隘路での戦いという事もあり、大軍で取り囲む訳にもいかず、次々に倒れる楊燕の兵。それでも、彼らも奮戦し、韓遂の兵を討ち取っていく。

しかし、やはり韓遂は手ごわかった。次々に追ってきた楊燕の兵を討ち取っていく。当然、一般兵では誰も敵わない。

その韓遂の前に飛び出したのは、楊燕。放っておけば不必要な被害が拡大するし、何より自身の手で親の仇である韓遂を討ち取るつもりであった。

「韓遂、俺が相手だ」

渾身の一撃を見舞う楊燕。だが、韓遂はその一撃を難無く受け止める。

「若造が！　俺に勝てると思ったか！」

互いに剣を振り回し、丁々発止と撃ち合う。しかし、徐々に押されはじめたのは、楊燕だった。

「貴方っ！」
　楊燕の不利を見た紫苑は、夫の助太刀をしようと思わず弓を構えて韓遂を狙う。だが、それを止めたのは廖化であった。
「控えよ！　一騎打ちに手出しするのは、道理に反するであろう！」
「しかしお師匠様っ、このままではあの人が！」
「確かに韓遂は強い。だが、これで殺られるようなら、所詮それまでだと言う事よ」
「そんなっ！」
　廖化の言葉に、紫苑は言葉を失う。その間も、どんどん楊燕は押されていく。
　一見、冷たいように見える廖化の言動だが、彼とて内心では平静では無い。何といっても弟子なのだ。だから、楊燕がやられたら、次は自分が韓遂に挑み、討ち果たすつもりである。
　それにしても、ふがいない。廖化は顔に出さないが、内心では苛立っていた。楊燕がまだ本気を出していないからである。いや、本気で闘っているのだが、まだ全力を出せていないのだ。この闘いにおいて、楊燕の弱点というか、欠点がはっきりと表れていたのだ。
「死ね、おらっ！」
　韓遂の必殺の一撃を、すんでの所で避ける楊燕。だが、脇腹を斬られ、もんどり打っ

て倒れ込む。何とか致命傷は避けたものの、結構な傷である。
「貴方っ！」
紫苑の叫びが響く。一騎打ちを見守っていた楊燕の兵たちも、動揺してどよめきの声を発する。
（ダメだ、このままでは……）
地面を転がりながら、楊燕は一瞬死を覚悟する。そんな最中、ふと視界の隅に師の廖化の姿が入ってきて、ほんの一瞬であるものの、視線が合う。
（貴様、何をしている！）
そう言いたげな厳しい視線。その瞬間、楊燕の沸騰していた頭が一瞬で冷静になる。
（これか、俺の悪い癖は！）
今までの闘いぶりは一体何なのか。絶対に韓遂を倒す。親の仇を討つ。そんな考えに囚われ我を忘れかけていた。これでは、師の教えが全く活かされていないではないか。
「ここまでだ、死ねっ！」
追い撃ちをかけてくる韓遂の剣。だが、怪我人とは思えない速度で楊燕は跳ね起き、その剣を避ける。
「何、お前は……」

予測していなかった動きに、韓遂が驚く。そんな彼に、楊燕は再び剣を向けた。

（今、俺のやるべき事は……）

結果に囚われ過ぎて師の教えを全く実践できていなかった。だが冷静になれば、今まで見えていなかった周囲が見えるようになってきた。今やるべき事は、目の前の闘いに集中すること。敵討ちとか、今後の展開とか、余計な考えを思考の外に追いやり感覚を研ぎ澄ます。

突然人が変わったような楊燕の動きに韓遂は戸惑う。今度は、彼の剣が狂いはじめた。

「……ようやく殻を破りおったか、馬鹿弟子が」

楊燕の姿を見て、廖化は呟く。

「お師匠様、これは一体どうなってますの？」

楊燕の様子が変わったことに戸惑う紫苑。今まで不利だったはずの楊燕が、いきなり韓遂を圧倒し始めているのだから戸惑うのも当然である。

「あいつ自身、武が伸び悩んだのは鍛練の量とか技術の拙さだと思っていた。確かにそれもあるが、本当に鍛えるべきは心の在り方だった。今までのあいつは絶対に倒さねばならんとか、必要以上に雑念を闘いの中に持ち込んでいて、それが邪魔していたのだな」

「では、急に動きが良くなったのは……」

「あいつ自身の心の在り方が変わったのだろう。切っ掛けは分からんが、鍛練を思い出したようだな」

今や完全に、攻守が逆転していた。手負いとは思えない動きで、韓遂を追い詰めていく楊燕。

「くそっ、こんな所でっ！」

苦し紛れに放つ、韓遂の一撃。だが、焦りは手元を狂わせる。精彩を欠いた韓遂の剣は空を切り、決定的な隙を与えてしまう。

「ぐぁぁぁっっ!!」

ついに楊燕の剣が、韓遂を捉えた。何とか身をよじり、剣をかわすも避け切れず、韓遂の剣を握った右腕が断ち切られた。

「韓遂、覚悟っ！」

とどめを刺そうと、楊燕が剣を振りかざす。その瞬間、轟音とともに紫苑の叫びが辺りに響く。

「貴方っ、逃げてっ！」

その時には、楊燕も異変に気付いていた。彼は身を翻し、一騎打ちから離脱した。

一体、何が起こったのか。それは、土砂崩れであった。韓遂軍を撹乱するために、険しい山の木を切って丸太を落としたり、大岩を転がしたりした影響であろうか。若干地

形が変わったことで、土砂崩れが起きたようだ。しかし、まさかこのような時に起きるとは、誰が予測できようか。

韓遂を討ち取れるところだったのだが、楊燕は素早く離脱し、危うい所で土砂崩れを何とか避ける。

「貴方、ご無事でっ！」

危うく難を逃れた楊燕に、紫苑が駆け寄る。

「ふっ、もう少しで韓遂をこの手で討ち取れたのだが……」

こんな時に土砂崩れなど起きなければ。運が無さすぎるとばかりに、楊燕は苦い顔をした。

第二十九話

土砂崩れによって間道が塞がれてしまい、このままでは洛陽への行き来が困難になるため、その撤去作業が必要になった楊燕の軍。その作業の最中、韓遂の生死を確認すべく、周囲に兵を探らせる。

だが、土砂崩れに巻き込まれたかに見えた韓遂であるが、いくら探しても遺体は発見できなかった。あの状況で難を逃れたとは考えにくいが、実際に遺体が見つからない以上、生き延びたと考えるのが自然である。

これ以上は、韓遂の捜索に時間をかけていられない。こうしている間にも、反董卓連合が洛陽に迫っているのだ。あらかじめ洛陽方面に間者を放ち、異変があればすぐに知らせるよう伝えている。今のところ知らせは来ていないが、ぐずぐずしていたら洛陽が落ちて何もかも終わってしまう。

韓遂の首を取れなかったのは残念だが、軍には大打撃を与え、韓遂自身にも深手を追わせた。右腕を失ったのでは、もう武器を振るうこともできず、益州に攻めて来る事も無いであろう。今は素早く軍を編成し、道を開いてすぐに洛陽に向かうべきである。

しかし、先に片付けなければならない問題が、一つ出てきた。黄権の事である。

事前の打ち合わせでは別働隊として互いに連携を取り、山中で敵を討ち果たすという手筈だったのだが、どういう訳か軍を後退させて綿竹まで敵を引き込み、策を労して敵将との一騎打ちに持ち込み、敵将を捕えたとのこと。しかも、黄権はその敵将である馬超という女を犯して我が物とした、と呉懿からの伝令が舞い込んできたのだ。

結果的に勝ったから良かったものの、もし馬超に負けてたら成都が脅かされるし、楊燕軍本隊が挟撃を受ける事だってありえた。そもそも、事前の取り決めを蔑ろにして勝手に動いた事や、勝手な判断で敵将の処遇を決めるのはいかがなものか、という内容から、呉懿の怒りがありありと分かる内容であった。

（何て事を、あのバカ……）

呉懿はどちらかといえば文官寄りの将であり、黄権は典型的な武官である。立場的に両者は反目しがちな所があるのだが、文面だけ見ればどう見ても黄権が悪いようにしか思えない。

黄権のことだから、勝算があっての事だろう。だが、放っておけば他の将への示しがつかない。敵将を捕えたのは良いが、手放しで喜ぶ訳にはいかない。

（……面倒だが、俺が出るか）

心底面倒そうな表情で、楊燕は一旦別働隊と合流する事を決めた。

※※※※※

「呉懿の言った事は一部を除いて事実だ。見苦しい言い訳はしない」
　楊燕の目の前に引き据えられて跪きながらも、黄権は昂然と顔を上げている。その近くでは呉懿が明らかに（俺キレてるぜ）といった表情で黄権を睨んでいるし、楊千万はそんな夫を宥めていて、徐庶などのチビっ娘軍師たちは（私たちどないしたらええん？）みたいな表情でオロオロしている。楊燕が思ってた以上に呉懿は怒髪天で、思ってた以上にカオスな雰囲気だった。
「勝手な行動など、お前らしくない。何故だ？」
「洛陽の情勢を考えて、早く決着をつける方法を選んだ」
「もし負けてたらどうする？」
「敵将の性格を考えれば、確実に勝てると思った」
「俺が指示していたのは、二度と攻める気を起こさぬよう徹底的に叩くことだ。危険を冒して敵将を捕らえろと指示した覚えは無いが」
「馬超を殺すより生かした方が、後で涼州の調略がしやすいと判断した」
「その馬超を犯したのは何故だ。俺がそういうのは嫌いだと知っているだろう」
「犯したのではなく合意だ。きちんと手順を踏んで求婚した」

以上、楊燕と黄権の問答である。

「求婚したといっても、囚われの身であれば断りにくいでしょうな」

黄権の言葉に、呉懿がそう返す。

「ややこしくなるから、お前は黙ってろ」

呉懿の言葉に、楊燕は頭が痛くなってくるのを感じた。

「馬超をここに連れて来てくれ」

配下の兵に命じて、楊燕は馬超を連れて来させる。

「黄権がお前に求婚したと聞いたが、本当か？」

連れて来られた馬超に、楊燕は問う。すると、馬超は顔を真っ赤にしてしまう。その反応を見て、楊燕は黄権の言葉が本当だと確信する。

（……この女、分かりやすいな）

場の異様な雰囲気に緊張しながらも、馬超は黄権の方を見ると、真っ赤な顔で俯いてしまう。しかし、恥ずかしそうにモジモジしながらもチラチラと黄権の方を伺う様子を見ると、決して心から嫌がっている様子も無い。その馬超のウブな反応に、楊燕は確信する。

（人の道を外れた訳ではなさそうだな）

もし黄権が無理やり馬超を犯したのなら、斬らねばならぬところだったから。だが、

何もお咎め無しでは、諸将への示しがつかない。だから、楊燕は黄権を副将の座から外す事にした。

「黄権の功は大きいが、問題行動も多くお咎め無しという訳にはいかない。よって副将は今後、廖化が勤めることとする。黄権は即刻武装を解き、廖化に引き継げ」

そして、さらに楊燕は命令を発する。

「今回捕えた馬超は、涼洲に送り返す。そのついでに、黄権も涼洲に送り届けてやれ」

「なっ！　それはさすがに厳しすぎでは……」

まさか、追放までするとは。諸将は楊燕の発言に驚く。だが、軍令違反は本来なら処刑ものである。追放で済んだのはむしろ幸いだというべきか。

しかし、楊燕は意思を曲げるつもりは無い。彼は驚き固まる諸将に命じる。

「何を固まっている？　早く軍の再編成を行うぞ」

楊燕はそう言いながら黄権に近づき、彼を縛っていた縄を自らの手で切る。そして黄権を立たせると彼に囁いた。

「……涼洲で、盛大に式を挙げて来い。涼洲の調略が成功したら、元の位置に戻してやる」

楊燕の言葉に、黄権は微かに頷く。さすがに彼もまた、楊燕の真の意図を察したのだ。

第三十話

軍を再編成した日の夜、楊燕は山中の砦で夜を過ごす事を決めた。洛陽の情勢は気になるのだが、韓遂との決戦を終えたばかりであり、また夜通しで険しい山越えは危険なので、一旦軍を休める事にしたのだ。

そして、その日の夜、楊燕は部屋に入るなり紫苑にすがりつかれる。

「貴方……」

「紫苑、言いたい事は分かってる」

黄権の事だろう、と楊燕が聞くと、紫苑はコクりと頷く。

「身勝手なお願いだけど、追放を取り消しは出来ないかしら……」

「紫苑、悪い。それは出来ない」

紫苑の言葉を、楊燕はきっぱりと拒否する。

「黄権のは明らかな軍令違反だ。それを許したら、諸将に示しがつかない」

「でも、これでは死ねと言ってるのと同じ……」

なおも言い募ろうとする紫苑だが、途中で楊燕に遮られる。

「……気持ちは分かる。紫苑にとって、かけがえのない弟だもんな」

楊燕は紫苑の言葉を塞ぐように、強く抱き締め、そして彼女の頭を優しく撫でる。もともと情が深い性格の紫苑であり、ましてや今回は弟に関する事である。冷静でいられないのも仕方無い。

だが、黄権は楊燕にとっても一番の友人であり、また最も信頼していた将でもある。辛いのは紫苑だけではないということを、彼女は楊燕に抱き締められた時に悟った。彼女を抱き締め、撫でる楊燕の手が少し震えていたのだから。

今回の黄権への処置は、実は死刑宣告にも等しいものである。斬首ではなく追放程度で済んだので、一見は軽い罪に見えるが、その帰参条件は涼州の調略である。現在の涼州は異民族が跋扈する土地であり、そこへ単身で乗り込むのだ。調略が失敗すれば、もちろん命は無い。

だが、黄権は追放が決まっても、見苦しく言い訳も何もしなかった。おそらく、命懸けで馬超を愛しているのだろう。命懸けだからこそ、罰則を承知で軍令違反を犯したのだ。それくらい、黄権は本気だったのだ。

もし、楊燕が今回の黄権と同じ立場で、馬超が紫苑だったなら、間違いなく迷いなく黄権と同じ事をしていたであろう。楊燕にとって、今や紫苑は命を懸けるに値する存在なのだから。だからこそ、楊燕は黄権の気持ちが痛いほど伝わった。

しかし、その一方で楊燕は益州の覇者であり、全ての民や兵の命を預かる存在なのだ。

だから、黄権の気持ちを知りながらも、それを罰しない訳にはいかなかった。その楊燕の気持ちを悟ったからこそ、黄権もあの時大人しく罰を受け入れたのだ。

そして紫苑にも、楊燕の気持ちが痛いほど伝わった。ずっと夫婦をやっているのだ。楊燕のその様子から精神状態を悟れないほど、紫苑も馬鹿ではない。

「……貴方、無茶苦茶言ってごめんなさい」

そう言って、紫苑も楊燕の背に腕を回し、強く抱き締め返す。

「構わん。唯一の弟だから、取り乱して当然だ。だが……」

楊燕は紫苑と抱き合いながら、なおも言葉を続ける。

「……だが、俺は黄権を信じている。あいつは必ず戻ってくる」

「貴方……」

楊燕の言葉に、紫苑は涙ぐむ。

戦場で戦っている姿、普段から努力している姿に惹かれたものの、結婚当初は、なんて冷たい人なのだろうと紫苑は思っていた。しかし、時を重ねるにつれ、紫苑は楊燕が誰よりも情に厚い人物だと言うことを知った。

残酷に見えるが、こうやって機会を完全に奪わず、黄権がまた這い上がる道を作ってくれた。紫苑には、楊燕の心遣いが嬉しかった。

初めて紫苑の前で見せた弱み。同時に、前を向き続ける強さ。夫のその全てが、紫苑

には愛しかった。

（私、何があっても一生この人に付いていくわ）

楊燕と抱き合いながら、紫苑は改めて決意を固めた。

そして、紫苑と同じく黄権の恩赦を嘆願に来て、夫婦の会話を部屋の外で聞いていた諸将も、同じように楊燕に付いていこうと結束を固め、少し離れた所では、呉懿がバツが悪そうに佇んでいた。

第三十一話

韓遂の侵攻を打ち破った楊燕は、急いで軍を再編成し、洛陽に向かっていた。どうやら、韓遂との決戦に時間を割きすぎたらしい。楊燕が長安に向けて出発し始めた頃には、汜水関と虎牢関は既に陥落し、洛陽も落ちる寸前という連絡を受けていたのだ。

対韓遂戦は手を抜ける相手ではなく、片手間で対処しようとすれば、こちらがやられていた。時間がかかるのは仕方ない。だが、後の展開が前世の通りなら、董卓軍の主な将は他陣営に取り込まれてしまう。特に、呂布を劉備に取られるのは一番まずい。そうなれば劉備陣営が強化され、取り返しがつかなくなる可能性があった。

しかし、虎牢関までもが落ちてしまった以上、戦の大勢はほぼ決したと言っていいだろう。あの呂布がいてもなお、虎牢関を守りきれなかったのだ。今から楊燕が駆けつけたところで、もはや逆転は不可能である。それに、今楊燕がいる場所から洛陽に駆けつけるより早く、洛陽が陥落する方が確実に早い。軍を率いて急いで駆けつけても、位置的に間に合わない。

それでも、楊燕は洛陽方面へと進出する事を決めた。もともと董卓軍は涼洲を根拠地とした勢力であり、もしかしたら落ち延びて来る将がいるかもしれない。特に呂布など

は、簡単に捕まるとも思えない。もし董卓軍が逃げて来るなら、保護して自陣に取り込むつもりでいた。

だが、楊燕が長安まで軍を進めた時、間者から報告を受けた。

※※※※※

「やはり、間に合わなかったか……」

思わず天を仰ぐ楊燕。彼はついに、洛陽が陥落した事を知ったのだ。

洛陽が陥落し、董卓軍はどうなったのか。呂布を始めとする諸将は無事に逃れたのか。その辺りの細かい部分まで、その間者は分からなかった。もし諸将が逃げて来るなら、敵の追撃を受け止めて退路を確保すべく、潼関に進出しようと楊燕は考えた。

だが、その思惑も全て無駄に終わることとなる。

『董卓、賈駆は火を放って自害。呂布および張遼は捕縛』

楊燕が上記の事情を知ったのは、潼関に進出してすぐの事であった。これで、楊燕が危惧していた最悪の事態が、現実になってしまった。前世の通りなら、張遼は曹操陣営に、そして呂布は劉備陣営に取り込まれる筈である。

それにしても、なぜ董卓軍は洛陽を捨てて逃げなかったのか。長安に退却したなら、

まだ再起の可能性はあったはず。そう疑問に思う楊燕だったが、間者に細かく状況を聞いた時に、それは解消された。

（諸葛亮のやつ、やってくれたな……）

洛陽包囲に当たって、退路を絶つために連合軍の別働隊が洛陽を迂回して函谷関を占拠したらしく、それによって董卓は逃げられない事を悟ったらしかった。そして、その策を進言したのが諸葛亮だという事も聞き出していた。

どうやら、考える事は同じだったようである。楊燕が洛陽から董卓軍が逃げて来たら取り込もうと考えたように、諸葛亮もまた董卓が逃げて楊燕と合流するのを警戒したらしい。

（韓遂の件さえ無ければ……）

そう思うのは仕方ないが、過去をいつまでも悔やんでいても仕方が無い。先手を打たれた形になった楊燕は、すぐに決断する。

「ここに居ては危険だ。漢中に戻るぞ」

こうなってしまった以上、すぐに対策を考え、急いで体勢を立て直す必要があった。彼は急いで軍をまとめると、速やかに退却していく。

だが、この時の楊燕は気付いていなかった。董卓軍の中で一人だけ、連合軍から難を逃れるため、益州に落ち延びて来る将が居た事に。

また、この反董卓連合での出来事をきっかけに、後に劉備陣営を出奔して楊燕の居る益州に転がり込む将が居たのであった。

第三章　集う諸将

第三十二話

彼は、目の前で起こっている出来事に、呆然としていた。

（嘘だ……嘘だろ……）

信じられない、いや、信じたくない光景に、彼は混乱してしまい、体が動かなくなる。戦が終わったとはいえ、まさか陣営内でこんな光景を見てしまうとは。

（くっ……）

ズキリと、腹が痛くなる。いや、精神的にもそうなのだが、物理的に脇腹が痛かった。彼は戦で負傷してしまい、本来なら安静にしなければならないのだから。

劉備の義勇軍の一人として転戦していた彼は、元は荊州長沙の出身であった。その土地でそのまま暮らしていたら、本来ならば中原での戦に巻き込まれる事は無かったであろう。それがなぜ、中原に居るのかといえば、彼は早くから都に出て盧植の私塾で学んでいた為である。

上記の事情から、彼は劉備と姉弟弟子であった。その為、彼女が御使いの下で義勇軍

を立ち上げた際、彼は私塾時代の幼なじみと共に劉備の傘下に加わったのだ。
義勇軍に加わってからは、楽しかった。全体的に見れば辛いことの方が多かったのだが、幼なじみの彼女と共に居れば疲れも吹き飛び、姉弟子の劉備に声を慰労されれば、心が高ぶるのを感じていた。
そんな時期に、かねてから想っていた幼なじみと心が通じ合い、幸せを感じていた。劉備も祝福してくれた。思えば、あの時が彼にとって最も幸せの絶頂であっただろう。
だから、洛陽での戦いで、幼なじみを庇って敵に斬られた際も、後悔は無かった。死を覚悟した瞬間は、幼なじみと共に居られなくなる悲しさも感じたが、それよりも好きな女を救えて良かったと思っていた。思っていたのだが……。

（何故だ……何故、あいつが御使いと……）
目の前で起こっている光景が、彼には信じられなかった。相思相愛だと思っていた幼なじみと、御使いが……。見たくなかった。これだけは、見たくなかった。
いつからであろうか。彼が御使いの存在に不安を感じるようになったのは。彼は姉弟子だけではなく、その義姉妹たちも侍らせ、さらにはチビっ娘軍師二人にも手を付けていた。姉弟子が幸せそうだから何も言えなかったが、彼は複雑な思いを抱いていた。
そして発覚した、今回の事。彼は知ってしまった事を後悔した。なぜ、この天幕に来

てしまったのだろうか、と。

戦による負傷で昏睡していた彼が目覚めたのは、つい先ほどの事であった。周囲は怪我人で一杯な所を見ると、どうやら負傷者用の天幕らしかった。

負傷した脇腹が、ひどく痛む。どうやら、まだ生きているらしかった。彼は、まだ命が尽きていない事を喜んだ。

もう夜遅いらしく、当たりは暗く、負傷者に寄り添うようにして寝ている者が何人か居た。それを見ると、彼は幼なじみがどうしているかと気になった。彼女は、看病してくれなかったのか。いや、それより彼女もどこか負傷して、それどころでは無いのでは。一旦気になると、もう眠れなかった。彼は天幕の中を見回す。どうやら彼女は居ないようだ。彼は少しホッとする。いや、取り返しのつかない事になってるのでは。

天幕を出て、彼女を探す。歩くたびに、脇腹の傷が痛む。それも、生きている証拠である。また、彼女に会える。その希望を持って陣営内を探し続ける。そして、とある天幕から、彼女の声が聞こえた気がした。良かった、生きてた。彼は幼なじみを呼びつつ、天幕に入りかけた。そして、見てはいけないものを見てしまう。

いよいよ大詰めといったところであろうか。二人は彼の存在にも気付かずに夢中に

なっている。

悔しさなのか、情けなさなのか、怒りなのか。訳が分からない感情が渦巻き、彼は剣の柄を握りしめた。許さない。俺がお前を想って負傷し、寝込んでいた間にも、おまえはこうして御使いと。御使いも御使いである。人の彼女を取りやがって……。

彼は剣を構えて天幕に踏み込もうとする。その瞬間、彼女の叫びにも似た声がはっきりと聞こえてきた。それは、完全に御使いを心から受け入れ、心からの愛情を示したものであった。もはや、幼なじみの意識からは、彼は完全に消えていたのだ。

そのことを悟った瞬間、彼は剣を握る腕が萎えたのを感じた。もう、御使いを斬ってもどうにもならないのだ。彼女はもう、自分の所には帰って来ないのだ。そのことを思い知らされ、彼は泣いた。

（……もう、ここに俺の居場所は無い。消えよう）

※※※※※

「大変です！　寇封どのが居なくなりました！」

怪我で寝ていたはずの者が居なくなり、劉備陣営でちょっとした騒ぎが起こる。寇封は一般兵ではなく、小なりといえども一応は指揮官の一人である。その彼が居なくなったのだから、騒ぎが起こるのは仕方がなかった。

しかし、あの怪我の状態から、一体どこに行ったというのか。そもそも、結構な重症で動けないはず。

「あの怪我で遠くに行くとは思えない。まだ近くに居るはずだ」

そう言って、部下の兵たちは寇封を探す。だが、いくら兵たちが探そうとも、寇封の姿はどこにも無かった。

第三十三話

フラフラとゆっくりとした足取りで、寇封は歩き続けていた。周囲を見渡せば、山、山、そして山。どうやら、洛陽からはずいぶんと遠く離れたようである。

一体どれほど進んだであろうか。丸一日ずっと歩き続け、その間は飲まず食わず。よく、ここまで長時間動けたものである。しかし、空腹感は無かった。もはや、心が死んだかのように、欲求自体は無かった。

いや、欲求は一つだけあった。彼は当初、自らの命を絶つつもりで、死に場所を求めて彷徨っていたのだ。だが、時間が絶つほどに、その考えは徐々に変わっていく。このまま、御使いに女を寝取られたままで、負け犬として死んでいいのか。このままで終わらせてたまるか、と。

もはや、あの陣営に居つづける気は無い。彼はもはや、劉備陣営で御使いの下で戦う気は全く無かった。今はまだ無力だが、敵対勢力としてのし上がって、必ず潰す。彼の足は自然と西へと向かって歩き続けていた。

劉備陣営の兵たちが、どれだけ探しても見つからないのは当然である。彼らは反董卓連合の領地である東側か、寇封の出身地である長沙がある南方を探していたのだから。

まさか、たった一人で、それも負傷した状態で敵領の西に向かうなど、想像していなかったのだから。

洛陽の西側は現在、董卓軍が瓦解した事で領主不在の空白地帯となっている。空白地帯となった土地は、新たな支配者が出ない限り、賊が跋扈する土地となってしまう。

当然、一人でフラフラ歩いている寇封を見逃す訳がなく、残党狩りをしていた賊どもが、彼の前に立ち塞がった。

「おい、身ぐるみ全部置いていけ」

董卓軍が瓦解した事で空白地帯となった司隷の地。そこに跋扈し始めた賊が、脇道から出てきて寇封を囲む。その数、十人ほど。だが、寇封はこれらの賊を歯牙にもかけず、無反応でそのまま歩を進める。

「おいっ！　聞いてるのか貴様……ギャァァァーーーッ！」

賊の一人が、無視された事に腹を立てて寇封に詰め寄るも、いきなり腕を斬られて悲鳴を上げ、のたうち回る。利き腕を切り落とされ、もはや戦闘では使い物にならないだろう。

「アァァーーーッ！　腕が……腕がぁぁ……」

「テメエ、いきなり何をする！」

何をするも何も、複数で囲んで身ぐるみ剥がそうとしたのは賊どもの方なのだが、彼らは寇封を取り囲む。だが、寇封の方は無言のまま、包囲が完成する前に走りだし、近くにいた賊を斬る。その動き、安静が必要な怪我人とは思えないほどである。

もはや、包囲も何もあったものではない。寇封の思わぬ反撃に賊どもは怯み、じりじり押されていく。速攻戦術で機先を制され、身ぐるみ剥ぐどころではなくなっている。それでも、寇封は顔色一つ変えず、無言でどんどん賊を斬って回る。それがまた、賊どもの恐怖をかき立てる。

ついに、賊どもは敵わぬと悟って逃げ出す。逃げ出せたのは、ほんの二人だった。

「……お前らにくれてやるほど、安い命ではない」

あれほどの戦闘があったにも関わらず、寇封は息一つ乱していない。彼は倒れている賊の服を裂いて剣の血糊を拭うと、表情も変えずに何事も無かったかのように再び歩き出す。

寇封が目指すのは、楊燕が支配する益州。人づてに聞いただけだが、楊燕は二人の妻を娶っているものの、どちらも押しかけ女房であり、自らは他人の女に手を出すような輩ではない、と。また何故か御使いを目の敵にしているという噂も聞いている。そして、楊燕旗下の軍は強く、現時点でおそらく大陸最強であるという事も。

仕えるなら、ここしか無い。益州で腕を磨いて仇敵を打ち破り、必ず復讐を遂げる。

その一心で、寇封は益州目指して歩き続けた。

一ヶ月の後、寇封は益州の成都にたどり着き、そのまま楊燕の陣営に加わった。そして、過去を捨てて新たに生まれ変わるという意味を込めて、彼は名を劉封と改め、各地を転戦する事となる。

第三十四話

「……つまらないわね」

楊儀は一人でぼやく。彼女は今、閑職に就かされ、張り合いの無い毎日を送っていたのだから。彼女は元々、荊州刺史の主簿として政務を担っていたのだから、閑職に就かされてつまらないと思うのは当然である。

それにしても、どえらい転落ぶりである。何故、このような事になったのか、と楊儀は考えていた。

原因はただ一つ、あの男の讒言である。

先に書いたように、楊儀は元々、荊州刺史の主簿を務めていた。その時期は、公的な文書作成や帳簿管理など、重要な役割を担っていたのだ。思えば、その頃が最も充実した生活を送っていた時期であろう。

だが、それが一人の人間によって変わってしまった。その男は刺史の縁戚であり、元々は他地方で役職についていたが、そこで何らかの失策があったらしく、役を解かれて荊州に移って来たらしい。そこでどのような話があったのかは分からないが、主簿の補佐として政務に携わる事となったのだ。

しかし、その男が邪魔をすること邪魔をすること。刺史の縁戚というのをかさに着て、楊儀の仕事に口出すようになったのだ。

部下の教育の最中に口出しし、挙句の果て楊儀の仕事ぶりのダメ出しをする。楊儀が重要な文書作成を行っている途中で、自分の役割もそこそこに「手伝わせろ」と割り込み、それをさも自分がやったように提出する。例を挙げればキリがないが、このように邪魔ばかり入るので、楊儀の心労は半端なかった。

楊儀もそのような行為に我慢できず、何度も「手出しするな、口出しするな、自分の仕事をやれ」と強く言う。もちろん、それで収まる訳も無く、喧嘩になる事もしばしばであった。

それでも、仕事そのものに遣り甲斐を感じていたので、いざこざがありながらも楊儀は精力的に働いた。業務の効率化を進めたり帳簿から無駄を省いたり、行政の献策を行ってそれが採用されるなど、楊儀の功績だと言えるものも多いという自負があった。そんな状態だから、刺史に呼び出された時も、何かお褒めの言葉を貰えるのだと思い、意気揚々と向かったものである。

だが、実際にはお褒めの言葉どころか、楊儀こそが政務の場を乱している原因だと叱責を浴びてしまう始末である。補佐のあの男が色々と刺史に吹き込んだのはすぐに想像がついた。その後、楊儀は主簿の筆頭から外され、あの男と入れ替わる形で、いや、入

れ替わりどころか左遷同然に閑職に就かされたのだ。

思い返せば、楊儀自身も落ち度はあった。それは楊儀も自覚している。彼女は、あまりにも苛烈すぎたのだ。政務において楊儀は妥協という言葉を知らず、小さなことでも部下に何か失策があればすぐに口出しして正すようにし、少しでも気になる事があれば言いたいことをはっきりと言ってきた。もちろん、罵倒したりなどはしなかったが、指導の際も淡々とした口調で一方的に述べ、部下の心情のフォローも無いものだから、周囲からは冷たいという認識を持たれていた。

それに比べて、あの男は外面だけは良く、どんどん周囲の人間を取り込んでいった。そのような事があり、楊儀はだんだん孤立していったのだ。

自分の欠点を、楊儀とて自覚していない訳では無かった。だが、政務は遊びではない。自分の行いの何が悪いのだ、と楊儀は反省する事なく、部下の心情にも無頓着だった。

実際に、楊儀の言葉が結果的に正しかった事も多く、その為に余計に自分が正しいのだと楊儀は意地になる。それで周囲が付いて来ない事に腹を立て、ますます孤立するという悪循環だった。

上記のような事から、楊儀は主簿から外され、閑職に就かされた。閑職に就かされて重要な事は何も任せてもらえない。それでいて、代わりに主簿になったあの男の失策があった際だけ、その尻ぬぐいばかりさせられる日々だった。見ていると、効率が悪すぎ

て腹立たしかった。もっと、こうすればいいのに。このような方法なら簡単に済むのに。思っていても、もう楊儀には口出しすら許されなかった。そんな張り合いの無い生活に、楊儀は疲れてしまった。

そんな折だった。隣の益州で、広く人材を募集しているという話を聞いたのは。

＊＊＊＊＊

益州の覇者・楊燕の事は、前から知っていた。楊燕が益州で名乗りを上げたころ、楊一族に召集がかけられた事があった。しかし、その時は楊儀の家は荊州に移り住んでおり、楊儀自身も生まれ育った荊州の為に力を尽くしたいという思いがあったから、召集には応じなかった。

だが、今回このような事態になり、あの時召集に応じていれば、と楊儀は後悔していた。もちろん、自分にも非があった事は自覚している。だが、自分は荊州の為に力を使い、もっと良くしたいと思っていただけである。もちろん賄賂なんかも取っていないし、私的な時間も政務に捧げてきたのだ。だが、このような事態になってしまった以上、もう自分には荊州で出来る事は何も無くなっていた。

それに、益州の楊燕と荊州の劉表では、どちらが優秀かは明らかである。さすがに、自

分に天下に名乗りを上げる力が無い事は、楊儀も自覚している。だが、どうせならもっと自分を評価してくれる所で力を捧げたい。もっと、働き甲斐のある主君の下で力を使いたい。そのような思いが楊儀の中で強くなっていた。

そしてある日、楊儀は役目を返上して益州へと出奔した。

第三十五話

さて、人材が続々と集まりつつある楊燕陣営だが、勢力が強化されたのは楊燕陣営だけでは無かった。

まず、曹操であるが、彼女の元にも荀彧や郭嘉、程昱や司馬懿などの軍師達や、張遼だけでなく典韋や許チョ、楽進、于禁、李典などの武官が集まり、楊燕陣営にもひけをとらない大勢力となっていた。

そして孫家でも、周瑜を筆頭に甘寧や陸遜、呂蒙などの将が台頭し、主家筋にあたる袁術の陣営を脅かしていた。

そんな中で、真っ先に動いたのは河北の袁紹である。彼女は宣戦布告も無しに公孫瓚を攻め、幽州を支配下に置いてしまう。これに対抗するかのように、曹操も北に手を広げ、匈奴を討って傘下に収めて勢力を拡大していく。今や華北は曹操と袁紹の二大勢力がしのぎを削る事態となり、どちらが華北の覇権を握るのかというところまで来ていた。

そのような情勢の中、劉備陣営が何とか豫州を支配し続けられたのは、将に恵まれていたからである。関羽や張飛などの武官や諸葛亮、龐統の軍師二人に加え、趙雲や公孫

瓚も加わり、他勢力に見劣りしない人材が流れ込んできたのだ。
中でも、劉備陣営にとって一番大きかったのは、呂布の存在である。中原随一ともされる彼女の武力は、他勢力をけん制するのに充分であり、さすがの曹操らも迂闊に攻撃できなかったのである。

＊＊＊＊＊

さて、その呂布であるが、現在とある悩みを抱えていた。それは、元の主である董卓の事であった。
洛陽で自ら火を放って自害したとされる董卓であるが、実は彼女は死んでいなかった。彼女は軍師の賈駆ともども、劉備陣営に保護されていたのだ。もちろん、表立って董卓を保護したとなれば拙いことになるので、あくまで身分を隠した上での事だったが。
その董卓は現在、賈駆とともに女給仕として御使いに仕えているものの、その董卓が御使いに好意を持ってしまったのだ。
呂布から見て、御使いほど軽率な男は見たことが無かった。劉備やその義妹だけにあきたらず、諸葛亮や龐統、果ては趙雲や公孫瓚までをも毒牙にかけているのだ。そして、

それ以外に女性の一般兵も。

そのあまりの奔放ぶりに、呂布は劉備陣営に董卓の助命を嘆願したことを後悔していた。

董卓が命を救われ劉備陣営に入ったのも、呂布が主を救うために交渉したからである。その代価は、呂布が劉備陣営に下る事。呂布の嘆願は、戦力強化を図っていた劉備陣営にとって、願ってもない事だったのである。

こんな事なら、潔く討ち死にするべきだったか。董卓の助命を嘆願したのも、御使いの都合の良い娼婦にする為などではない。

だが、肝心の董卓は聞く耳を持ってくれない。あんな女にだらしない男に付いていっても、幸せになれるとは思えない。何度そう訴えても、逆に諭される始末である。

「恋どの～、ダメだったのでしょうか……」

部屋を出るなり愛犬セキトとともに駆け寄ってきたチビっ娘は、陳宮。少し前に呂布が拾った、呂布の軍師を自称する孤児の女の子である。

「……やっぱり、聞いてくれなかった」

ぼそりと呟く呂布。その無表情からは分かりづらいが、彼女の落胆している様子は、陳宮にも伝わった。

「恋どのの見る目は確かなのです。ねねもあの男は嫌いなのです」

呂布を慰めようと、陳宮はそう口にする。もっとも、陳宮の場合は呂布命の傾向があり、それ以外の者を評価しない癖があるので、彼女の洞察力はあまりアテにならないのだが。

丁原が殺された（実は生きていたが……）時、路頭に迷った呂布を拾ってくれたのは、董卓である。その為、呂布は董卓に仕え、彼女の目標の実現の為に精一杯戦った。だが、あの時呂布が敬愛した董卓の姿は、影を潜めてしまった。御使いの都合の良い女（呂布にはそう見えた）に甘んじて、彼女は変わってしまった。もう、呂布が敬愛した董卓は居ないのだ。

呂布は、前々から悩んでいた事を陳宮に打ち明ける。すなわち、劉備陣営を出奔して他勢力に走る事を。

ちなみに、呂布が行こうとしている勢力は、益州である。御使いなどより楊燕の方がはるかに誠実で仕え甲斐があるし、何より益州には丁原師匠がいる。その事を陳宮に話すと、彼女は即座に賛成した。

「……また長い旅になるけど、来る？」

「もちろんですぞ。ねねはどこまでも恋どのに付いていくだけです」

「……ありがとう」

陳宮の言葉を聞いて、呂布は彼女を抱き締めて頭を撫でる。

「恋どの～、苦しいのです～」

そう言いつつも、屈託なく笑う陳宮。そんな彼女につられるかのように、呂布も微かに笑みをもらした。そして、呂布は愛犬のセキトにも話しかける。

「……セキトも、来る？」

「ワンッ!!」

呂布の問いに、セキトは元気良く鳴いた。

そして、その翌日。呂布は陳宮とともに愛犬セキトを連れて密かに劉備陣営を出奔し、益州に向かって旅立った。前世と同じく、董卓から他勢力に鞍替えしたのである。

これにより、劉備陣営に動揺が走る事となる。呂布という最大の切り札を失う事、それは曹操などの強大な勢力の猛攻に晒される事を意味していたから。

第三十六話

寇封に続き、呂布まで出奔してしまった劉備陣営。方々に人を遣って探らせたところ、どうやら二人とも益州の楊燕陣営に身を寄せたらしい事が分かった。

「また、楊燕か……」

ここ最近、頻繁に聞く名前を、御使い・北郷は呟く。今や、楊燕陣営は遠く離れた豫州に位置する北郷にとっても、無視できない名前となっていた。

この世界に来て以降、彼は現代知識を歴史の記憶を武器に立ち回ってきた。ある程度予測された展開を元にして劉備を支えつつ、漢王室が崩壊して群雄割拠となった乱世において、何とか一定の勢力を保っていた。

この後の展開が北郷の予想通りなら、豫州は曹操に盗られるだろう。だが、お隣の荊州や益州は凡庸な主が居るだけの混沌であり、付け入る隙がある。本来なら、後に西の蜀地方を抑えて曹操に対抗し、天下三分の計を実行するつもりでいた。そんな彼にとって、突如台頭してきた楊燕は明らかなイレギュラーだった。

「反董卓連合の時も袁紹や曹操が口にしてたけど、楊燕って一体何者？」

それが北郷の素直な感想だった。本来なら、益州は劉璋が治めているはず。治世者が

劉璋のままであれば、思惑通りに益州を乗っ取って蜀を建国するのだが……。
しかし、北郷には楊燕という名前に心当たりが全く無い。
「天の国では、楊燕という者は居ないのですか？」
愛紗が北郷に尋ねる。
「ああ。聞いた事も無い。本来なら益州は劉璋が治めているはず」
「劉璋は楊燕に敗れて、土地を乗っ取られたと聞いております」
北郷の疑問に、愛紗が答える。その言葉に、北郷は考え込む。このままでは、自分が知っている展開とは大きく違ったものになってくる。
「楊燕という人について、詳しく教えてくれない？」
今後の為にも、楊燕という人物を知っておく必要があった。彼は愛紗に頼んで、楊燕なる人物について調べてもらう事にした。
そして、楊燕に関する情報を得るも、北郷にはやはり思い当たる人物は浮かばない。
「そこまで優れた将なら、歴史に名前が残ってそうなんだけどな……」
劉璋から益州を奪って乗っ取ったとか、呂布を打ち負かすほどの武とか、聞けば聞くほど化け物じみている。まさか、大陸最強だと思っていた呂布でさえ勝てない将がいるなど、予想もしていなかった。
（このままでは、不味い）

　そのような将の下に呂布などの人材が集っているとなると、蜀建国はほぼ不可能である。このままでは戦乱の波に飲み込まれて、路頭に迷うことになる。自分の知っている知識と違い、豫州は失う訳にはいかなかった。早急に豫州を安定させて、そこを足掛かりに荊州を取る。

「朱里、ちょっと話があるんだけど……」

　ようやく危機感を持ち始めた北郷は、朱里を呼んで今後の展開について相談することを決めた。

＊＊＊＊＊

「……荊州を取る」

　楊燕がそう決めたのは、何も急に思い立っての事ではない。彼は以前から、荊州にまで手を伸ばす事を考えていた。

「え、荊州を？　ようやく益州が安定してきたばかりですのに……」

　楊燕の言葉に、紫苑が驚いた表情を見せる。だが、益州内の豪族たちを従え、南方の南蛮も抑えた。異民族の侵攻も無くなってきている。動くなら今だった。

「荊州では家督争いが発生していて、曹操がそこに付け込もうとしています。荊州を抑

えるのは有効かと」

楊燕の意見に賛同したのは、軍師である徐庶。彼女は独自に仕入れた大陸の情報を元に、荊州を抑える必要性を皆に説く。

大陸の情勢は、漢王朝が瓦解し、群雄割拠の状態となったものの、今や特定の勢力に収まりつつあった。まず、華北で二大勢力となっていた曹操と袁紹が、ついに激突。結果は曹操が勝利し、華北の雄となった。曹操の勢力は増大するばかりで、劉備が居座る豫州にも手を伸ばし始めていた。そして華南ではついに孫家が主家の袁術を打ち破り、新たな支配者に成り代わった。今や大陸は華北の曹操、華南の孫策、そして益州の楊燕の三つの勢力が割拠する状態となっていた。そして、残るは荊州である。ここをどの勢力が取るかで、今後の情勢が決まってくると言えた。

もちろん曹操も脅威だが、いや、むしろ曹操が一番の脅威だが、楊燕は別の事を考えていた。それは、劉備陣営の事であった。

楊燕は前世の記憶から、劉備が荊州に手を伸ばし、益州にまで進出してくることを知っている。これを放置していたら、むざむざと荊州を取られて敵に安息の地を与えてしまう。それに、荊州は人材の宝庫であり、最近加入した劉封や楊儀も荊州の出身である。さらに言うなら、今楊燕陣営で軍師をしている徐庶も、荊州の水鏡塾出身である。二重の意味で、ここを敵に取られる訳にはいかなかった。

「だが、荊州に攻め入るとなったら、大義名分が必要では？」
心配する将がいるのも当然である。だが、楊燕はこの意見を一蹴する。
「荊州は今、跡目争いの余波と飢饉で民が苦しんでいる。俺らが荊州を安定させて豊かにすれば、大義名分などいくらでも成り立つだろう」
結構乱暴な考えだが、諸将は楊燕のその言葉で納得する。益州は今や楊燕を中心に一枚岩となっている上に、徐庶が楊燕の考えに賛成なのだ。これ以上、皆が反対する理由は無かった。

「また、ワシは留守番かのぉ……」
寝床に横たわりながら、桔梗が残念そうに言う。とはいえ、彼女はつい数日前に出産を終えたばかりである。今は安静にしていなければならず、戦場へと出す訳にはいかない。
「長くは待たせない」
そう言って、楊燕は桔梗の手を握る。そして、すぐ傍らで眠る自分の赤子に目を向ける。
「牡丹も待っていろ。すぐ戻るからな」
楊燕は幼い我が子に声をかけ、そっと頭を撫でる。だが、新たに誕生したその小さな

子は、誰に似たのであろうか、ふてぶてしく大の字になって眠りこけていた。

第三十七話

それは、楊燕が荊州攻略の命を下す少し前の事。

「父さまの膝は美以のものにゃぁぁっ！」
「だめぇぇっ、お父さんは璃々のものなのぉっ！」
楊燕を取り合って争う子ども二人。
「あーこらこら、二人とも落ち着け」
楊燕はそう窘めるも、それでケンカが収まる訳もなく、それどころかさらにケンカの種が増える一方である。
「だいおーさまばっかりズルいにゃ」
「あっしらもととさまの膝で寝るのにゃ」
「ととしゃまのひざ～、シャムのもの～」
さらに集まってくる娘たち。ミケ、トラ、シャムまで加わったことで、収集がつかなくなる。それに対し、楊燕は……。
「あー平和だなー」

戦乱の合間のつかの間の平穏を感じ取りつつ、現実逃避をし始めた。

?????

最初に書いておくと、このニャン娘たちは楊燕の実の娘ではない。彼女らは異民族出身で、楊燕が引き取った戦争孤児である。

益州南部、雲南の地から美以たちが亡命して来たのは、反董卓連合が終わってからしばらくの事だった。

「雲南の方は今、南蛮の部族間の争いで難民が増えているようですな」

「全く、ややこしい時に……」

雲南が、なにやらきな臭くなってきていたのは、楊燕も前から察していた。だが、その時は韓遂との決戦を控えており、対処する余裕が無かった。だが、こうして難民が流れ込んでくる事態にまで発展したなら、これ以上は見過ごせない。

「よし、劉封を呼べ」

この雲南問題に関して、楊燕は新しく陣営に加わったばかりの劉封を派遣する事にした。

「あの、いきなり新人に任せて大丈夫なのですか？」

能力が未知数な者をいきなり派遣して大丈夫なのか。部下が楊燕の決定に心配するのも無理はない。だが、楊燕にとって、それは計算済みである。

「それを確かめる為に劉封を派遣するのだ」

劉備陣営でも兵を率いていたみたいだし、多分大丈夫だろう。もしダメなら、別の者にやらせるまで。楊燕は劉封を呼びだし、雲南の平定を命じた。

結論から言うと、劉封は予想以上の戦果をあげた。彼は兵を率いて雲南に進出すると、僅か三ヶ月で雲南を平定してしまった。彼は楊燕陣営に友好的な部族を取り込むと、反抗的な部族を打ち破った。

その内容も凄まじく、劉封は敵の大将を計略を用いて七度捕らえ、七度逃がした。そして八度目に捕らえた際、あまりの力量の違いに敵将は平伏し、臣従を誓ったという。

「ほう、やるなアイツ」

劉封に関しては、調練では表情も変えずに相手を容赦なく押し込んでいく様子から、もっと力押しで強引に攻めるのだと思っていた。敵の方が数が多い事から、犠牲を少なくするやり方を取ったのであろうが、なかなか味な事をする将である。もちろん、楊燕にとって満足のいく結果である。

だが、雲南が片付いても、難民の問題が残っている。特に、孤児をどうするかが問題であった。紛争によって土地が荒れてしまい、雲南に戻ったところで再出発は困難であ

る。これが大人であれば、まだ自身の力でやり直す事も可能だろう。だが、幼い子どもだけでは無理だ。誰かが補佐してやらないと、野垂れ死にをするのは目に見えていた。

だから、楊燕は徐庶や楊儀と話し合い、成都に孤児院を作って雲南孤児たちを保護する事にした。そこで学問などしかるべく教育を施した上で、社会に出す仕組みを作ろうとしたのだ。

そして、その孤児院の経営は呂布と陳宮に任せる事にした。呂布は孤児に慈悲深い性格であるし、陳宮は元々孤児であり、歳も近いので子どもたちの立場が分かるはず。それに、武の指導は呂布、学問の指導は陳宮と役割分担も出来、まさに適材適所である。

さて、その孤児たちであるが、楊燕が何度か孤児院に足を運ぶうちに、一部の子らに懐かれてしまった。それが、美以たちニャン娘である。

「蓮夜は何だか父さまみたいだにゃぁ」

そう言って屈託無く笑う彼女ら。しかし、心に傷を負っていないかというと決してそうではない。外に遊びに出て木陰で昼寝してる時などは、ニャン娘たちは夢うつつに泣いている事が多かった。

「うう……父さま、父さま……」

親を亡くしたのだから当然である。楊燕と接する事で幼い頃の記憶が蘇るのだろう。

まだ幼いのだから、親を求めるのは仕方が無い。
　親を求めて泣く子たち。何度か彼女らと過ごすうち、楊燕にも情が湧いていた。彼は美以たちを養子にする事を決める。
「お前ら、俺の子になるか？」
　楊燕の言葉に、美以たちは飛びつく。
「なるにゃ！　美以は蓮夜の子になるにゃ！」
　こうして、美以たちニャン娘は楊燕の子になった。

?????

　そして、話は冒頭へ。
「父さまは美以のものにゃ！」
「だから、お父さんは璃々のお父さんなのっ！」
　傍らで楊燕を巡って取り合いをする子どもたち。
「あらあら、貴方ったら大人気ね」
　騒がしい場にやって来たのは、紫苑である。
「紫苑、この状況どうにかならないか？」

このままでは、ケンカが大きくなりそうで、でも収まる気配も無く、楊燕は紫苑になきつく。

「あらあら、賑やかで楽しそうで良いじゃない」

紫苑はそう言うと、向かい合うようにして楊燕の膝に座り、そのまま甘えるように抱き着いた。

「て、おい紫苑っ……」

「あーっ、お母さんがお父さんとったー！」

紫苑の様子に気づいたのか、子どもたちがいっそう騒ぎはじめる。これでは、火に油である。だが、そんな状況でも、紫苑は笑みを浮かべて子どもたちに言い放つ。

「うふふ、お父さんは五年も前からお母さんのものなのよ」

（……もういいや）

紫苑に抱き着かれ、子どもたちに揉みくちゃにされつつ、楊燕は（平和だなー）と現実逃避を続けていた。

第三十八話

その日、周倉は拠点内を駆け回っていた。いくら探しても御使い・北郷がなかなか見つからないからである。

（……どうせ、どっかでまた女の子を食ってるんだろうな）

そう思いながらも、周倉はすれ違う文官たちに聞いて回り、ようやく居場所を探し当てる。そこは、書物などが保管されている倉庫であった。

「北郷どの、居ますか」

周倉は御使いの事を、お館とか主とは決して呼ばない。なぜなら内心では認めていないから。だが、立場的には北郷の方が上なので、必要最低限の敬称だけをつけて呼びかける。

肝心の北郷はといえば、周倉の予想通り、やはり女の子と行為の真っ最中だった。娘の方はあまり見かけない顔だが、乱れた服装から察するに、おそらく文官であろう。倉庫の中は薄暗いが全く明かりが入ってこない訳でもなく、周倉には北郷に抱かれているその娘の表情がはっきりと見えた。

おそらく二人で示し合わせてここに来たのだろう。つかの間の逢瀬に夢中になって

いて周倉に気付いてない様子である。政務もとい性務に勤しむなんて、洒落にもならない。まだ夜にもなってないのにお盛んな事で、と周倉は呆れる思いだった。

だが、北郷がどこの誰と真っ最中であるかはどうでもよかった。愛紗から北郷を探せと言われた以上、周倉は声を掛けない訳にはいかなかった。

「北郷どの、関羽様が呼んでいます。すぐ戻ってください」

「……今日やるべき事は終わったんだけど」

きわめて事務的に周倉は声を掛ける。すると、二人は急に動きを止め、驚いたように入り口を振り返った。北郷の方は（今良い所なのに……）という若干恨めしげな表情で。娘の方は申し訳なさそうな、あるいは秘密を見られたという羞恥の為か、顔を真っ赤にして俯いている。

「分かった。すぐ行くって、先に行って愛紗に伝えてくれない？」

俺を追い出して、中途半端になった続きを再開するつもりだろう。だが、そうはいかない。今見逃しても、どうせ連れて来いと言われるのは分かっている。こちらも二度手間は避けたいし、暇ではない。こんなくだらない用事をさっさと終わらせたいのだ。

「さっさと行かないなら、この件は関羽様と賈駆様に報告するので、お好きにどうぞ」

そこまで言うと、さすがに北郷も行為を中断せざるを得ず、ため息をつきながら身支度をして、倉庫を出て行った。

続いて、娘の方も手早く身支度をし、顔を隠すようにして俯きながら、そそくさと倉庫を出て行こうとする。そんな娘に、周倉は声を掛けて呼び止める。

「おい」

声を掛けられた瞬間、その娘はビクッと身体を震わせて立ち止まる。一体何を言われるのだろうか、とビクビクしていた。

「……どこの文官かは知らんが、真っ昼間からこういうのは止めておけ。あと、付き合う相手をもっとよく考えろ」

様子から見て合意の上なのだろうが、目の前の娘は確実に北郷にとって都合の良い女でしかない。絶対に北郷の一番にはなれないのだから、このまま幸せになれるとも思えない。

その娘は、周倉の言葉に微かに会釈をすると、足早に倉庫を出る。

（……ま、言ってもダメだろうな）

自分の価値を下げるようなことはして欲しくなくて、周倉はあのように言ったのだが、あの様子から見ても忠告の効果はあまりなさそうである。周倉は腰に手を当て、ため息をつく。

「……そろそろ潮時かな」

そう呟くと、周倉は政務室に向かって歩き始めた。

＊＊＊＊＊

「……なあ詠。やっぱ俺抜けるわ」

「はぁ？　あんた唐突に何言ってんの？」

周倉の言葉に、賈駆はいきなり何言ってんだコイツというような表情を見せる。だが、周倉が本気だと知ると、慌て始めた。

「ちょっと待ちなさいよ！　あんたが抜けたら、ますます立ちいかなくなるじゃない！　ただでさえ人手が足りなくなって来てるのよ！」

賈駆の動揺は、当然である。賈駆から見て、裏で軍をしっかりとまとめ上げていたのは、この周倉である。張飛しかり、趙雲しかり、劉備陣営の主将の大半が猪突猛進タイプの将なのだ。関羽も頭に血が上ると周囲が見えなくなる傾向があり、そんな時も副官として的確な采配を振るっていたのが、この周倉だった。その為、劉備軍主力の関羽隊が軍師の指示を的確に実行していたのは、周倉によるところが大きかった。それだけに、この周倉が抜けるのはかなりの痛手であった。

それに、劉封が抜け、呂布（と、ついでに陳宮）が抜け、劉備陣営からどんどん人が減ってきているのだ。その為、本来なら北郷付きの女給仕であった賈駆までが、政務に

携わる事となっている。いや、携わるどころか、賈駆の負担が大きくなる一方だった。

だが、周倉の気持ちも分からなくもない。だからこそ、賈駆は焦っていたのである。

北郷は見ての通り、かなり女好きであり、ところ構わず種をまき散らしているような男である。天から舞い降りた御使いが乱世を制する。そのような予言から北郷をあがめ、御使いの種を宿そうと、玉の輿狙いの女が寄ってくる。それを食う。食われた女の恋人が失望して陣営を去る。あるいは士気が落ちる。そのような流れで、劉備陣営は危機的状況に陥っていた。

賈駆から見ても、劉備陣営はもうダメだと思った。北郷が御使いという立場にあぐらをかいて好き勝手したのだから当然である。

周倉に関しては、寝とられた云々ではなく、陣営そのものを見限ったという様子である。乱世に一石を投じたいという思いで動いていた彼にとって、もはや劉備陣営に居る意味が見いだせないのだろう。皆が笑って暮らせる世の中を、と言いながら、実際は女関係で不幸を見る者が増えているのだから。

「でも、あんたが陣営を抜けたとして、どこに行く気よ」

賈駆の記憶によれば、周倉は元は黄巾賊の一人だったはず。劉備陣営だからこそ能力を買われて取り立てられたのであり、他の陣営ならば即死刑になってもおかしくない。そんな彼が寄るべき場所があるのだろうか。

「俺は、益州に行く」
「……やっぱり、あんたも楊燕に鞍替えなのね」
「あそこには、元賊の廖化も居るらしい。仕えるなら、あそこしかないと思う」
この時点で、周倉は一つだけ間違っていた。廖化に関しては、丁原が世を忍ぶ為に使っている偽名であり、元賊という肩書は経歴不明のつじつまを合わせる為に作られたものであるのだが、周倉はそれを知らない。だが、元賊といわれる者でも、きっちりと人物を見て登用するという部分に、周倉は魅力を感じていた。
「なあ、詠も来ないか?」
引き留める筈が、逆に周倉からの誘い。周倉から見て、賈駆は北郷の毒牙にかかっていない数少ない女である。政務に関しても、人当たりはキツいが的確で、こんなところで燻ぶっていい女ではない。
だが、賈駆は周倉の言葉に少し迷うも、きっぱりとそれを断った。
「私は残るわ。今の月から離れる訳にはいかないから」
本音を言えば、自分も出て行きたい。だが、何があっても月に仕えると決めた以上、ここを離れる訳にはいかない。それを伝えると、周倉は肩をすくめ、ため息をついた。
「そうか、残念。じゃあお別れだな」
「……今のこの会話、明日までは忘れてあげるわ。さっさと行きなさい」

「感謝する。じゃあな」

そう言い残し、周倉は政務室を出て行った。あとには、賈駆一人が残される。

「……はあ、一体どうすればいいのよ」

周倉が抜けた後の軍の再編をどうするか。北郷の毒牙にかかった月を、どうやって目を覚まさせるか。増えていく一方の政務と尽きぬ悩みに、賈駆は頭を抱えるのであった。

第三十九話

「……はぁ」

ため息をつく盧植。元は漢王朝で将軍職に就いており、皇甫嵩や朱儁、丁原と並んで四将の一角と言われた女性である。ついでに言うと、劉備と公孫瓚、あと寇封改め劉封の師でもある。そんな彼女が何の因果か、色々あって今は劉備陣営に居る。

「……やってしまった」

彼女がため息をついていた理由。それは、御使い・北郷に関する事であった。もっと正確に言うと、北郷を思いっきりひっぱたいてしまったのだ。それは、御使いの火遊びがあまりにも酷いから。

かつて、盧植は都で将軍として帝に仕えていたが、駄目と知りつつも諌める事をしなかった。それが、十常侍の専横を招いてしまい、都を追われる事となった。その時の反省があるから、彼女はあまりにも性務に励みすぎる北郷を諌めに行ったのだ。

その時は北郷も素直に聞いたものの、それから幾ばくもしない内に盧植を色目で見てくる始末。そのだらしなさに普段は温厚そのものな盧植もさすがに怒り、思わず北郷をひっぱたいたのだ。

北郷が色んな女に手を出すものだから、陣営内の雰囲気が悪化しているというのに。そのせいで、弟子の一人である寇封も陣営を出て行ってしまった。ただ、気がかりなのは、劉備も公孫瓚もすっかり北郷にハマってしまっている事。この様子では、バカ弟子二人の目を覚まさせるのは困難だろう。

それでも、目を覚まさせなければいけない。盧植にとって、弟子はいわば我が子みたいなもの。間違った道に進んだ我が子たちを正しい道に導くのも、親の役目なのだから。でも……。

「……はあ、思うようにいかないわね」

暗雲垂れこめる状況に、盧植は三たび溜息をつく。

（武と文という方向性は違えど、アナタの弟子は皆、立派に育っているのに……。私はダメね。指導者に向いていないのかしら……）

盧植は元同僚の内、真っ先に逝った丁原に心の中で語りかけた。この時の盧植は、実は丁原が名を変えて生きていたことを、まだ知らない。

同じ時刻、遠く離れた成都では……。

「ぶえぇっっくしょいいっっ！」

「うぎゃぁぁっ！」

成都城内の鍛錬場にて。弟子を相手に模擬戦の最中であった廖化は、盛大にくしゃみをしてしまう。そのせいで、剣を握る手元が狂い、思わず弟子の剣を根元からへし折ってしまった。

「り、廖化様っ！　危ないですって！」

「すまん、手元が狂った」

「手元が狂った、じゃないですよ！　もう少しで死ぬとこだったんですから！」

一歩間違えてたら、首が飛んでいたかもしれない事態に、弟子は身震いする。

「だが、相手の失策をとっさに利用できないようでは、まだまだ修行が足りんな。いっそう厳しくしてやるから、覚悟しておけ」

「え、ちょっ……うぎゃぁぁ！」

……成都は、今日も平和である。

＊＊＊＊＊

「やっと、益州に入れるな」

険しい山道を歩く、女二人。

「ここまで長かったですね。途中もうダメかと思ったくらいですわ」

「私と一緒に居れば大丈夫だって。なんてったって、長生きするタチだからな」
若干疲れたような表情を見せているのは、皇甫嵩。それに対し、楽観的なのは華雄。二人とも、洛陽が陥落したのち、董卓軍と仲が良かった楊燕を頼って落ち延びてきたのだ。
それにしても、洛陽から落ちてきたにしては、期間が空きすぎていないか。そのような疑問があるが、実は二人は、追手をくらますために一旦北の匈奴領に逃げ込み、大きく迂回して益州に来たのだ。その為、益州到着が大幅に遅れる形となった。
途中、匈奴の者に見つかって追われたり、山中で虎と出くわしたりで、散々な目に遭いながらようやく辿り着いたのだ。よく今まで命があったものである。
そこまでの苦労を重ねながら益州に来たのも、反董卓に加わらず、なおかつ曹操に対抗しうる唯一の勢力が楊燕だったから。董卓亡き今、寄るべき勢力は楊燕でしか考えられなかった。ちなみに、華雄も皇甫嵩も、董卓が劉備の保護の下で生きているとは夢にも思っていない。
「でも、楊燕さんは私たちを受け入れてくださるかしら」
「大丈夫だろう。なんてったって、私は長生きするタチだからな」
「もう、華雄さんったら、そればっかり」
長生きするから、ここで運命が尽きる筈がない。華雄はそう言いたいのだろう。あま

りに楽観的な発言に、皇甫嵩は少し呆れる。だが、華雄のその前向きな発言に元気をもらっているのも、また事実であった。

真っ先に丁原が暗殺され、朱儁も戦死、盧植は身分を剥奪されて追放。漢の四将の内、残ったのは自分だけ。幼帝も曹操の手に落ち帝位を簒奪され、漢はすでに形を成していない。それでも、四将の最後の一人として最後まであがき続ける。そう決意して、皇甫嵩は益州へと足を進めていた。

第四十話

「……これは、大失敗だったわね」

水晶越しに見る景色に、その者はため息をつく。

その者、外史の管理者。大きくズレはじめた外史を修正する為、北郷を天から遣わした者である。

とある者の願望により、発生した外史の世界。だが、この世界には大きな問題があった。それは、あまりにいびつな女尊男卑の世界だった事である。それをこのまま放っておけば、曹操が天下を取る事でさらに女尊男卑が進み、いずれ世界が破綻する恐れがあった。

管理者が御使いを遣わしたのは、女尊男卑が急加速で進むいびつな世界に一石を投じる為。そして、その彼に、女性を魅了する力を与えたのは、女尊男卑に歯止めをかける為と、何のバックボーンも持たない彼が台頭しやすいと判断した為。

本来なら、御使いを中心に諸将が纏まる予定だった。だが、管理者も想像していなかった誤算が二つあった。

一つは、肝心の御使いが思ったよりクズだった事である。諸将だけにあきたらず、ま

さか一般兵や恋人ある女にまで手を出してしまうとは。そもそも、コロッと簡単に相手を堕とす力を与えてしまった管理者の責任なのだが、そのせいで彼はイージーモードな状況に増長し、事態は縺れに縺れてしまった。

そして、もう一つ。それは楊燕の台頭であった。これは完全に管理者の計算外で、そもそも当初の計画では、楊燕自体が存在する予定では無かった。それが外史に登場してしまったのは、外史に現れた介入者が居たからである。

その介入者は、管理者と違って外史を強引に修正すべきではないという信条を持つ者だった。世界は自然に任せるべきであり、滅びるなら滅びるで良し。だが、生物はそう簡単に滅びず、世界が修正を必要とした時は、しかるべき者が自然と現れるという考えだった。だからその介入者は、全く別の世界から御使いの派遣を強引に進めた事に反対であった。

介入者が楊燕を転生させたのも、御使いに対抗させるため。そのため、この外史では、裏では管理者対介入者という代理戦争の面も孕んでいた。もちろん、外史に生きる者たちはそれを知らないが……。

だが、この代理戦争は、試合前から管理者のコールド負けという結果に終わりそうだった。他の外史ならいざ知らず、この外史においては介入者が正しかったと言わざるをえない。

それに、思わぬ形で事態は管理者の望む展開になりつつあった。一時は御使いにさらなる力を与えて楊燕を消す事も考えたが、もはや逆効果だろう。今となっては、楊燕の存在が管理者の失策を帳消しにする存在となっていたのだから。

第四十一話

「雪蓮様、例の件どうします？」
「例の件？　ああ～、劉備陣営との同盟の事ね」
部下に尋ねられ、孫策は応える。
「確かに、私たちに利が無い訳ではないのよね。でも……」
止めといた方がいいわね、と孫策は結論を出す。
劉備陣営から同盟の話が来たのは、少し前の事であった。曹操の圧力に耐えきれなくなったのだろう、劉備陣営の方からそのような話が舞い込んできたのだ。
状況的に見れば、劉備陣営にとって打てる手はそれしか無かったであろう。離反者が相次いだ今、曹操の南下を止める事は不可能であり、また荊州も楊燕陣営が迫っており、もはや劉備の逃げる場所は失われていた。
孫策にとって、劉備との同盟は利が無い訳でもなかった。幼帝を手中に収めた曹操や、漢王室に連なる者が居る楊燕陣営と違い、孫策陣営には擁するものが全くないのだから。劉備から御使いを取り上げ、その血を孫家に入れてしまえば、無理矢理ではあるが一応は天下を手中に収める理由にもなる。しかし……。

「……御使いを取り込んだら、取り返しのつかない事になる気がするの。ただの勘だけどね」
「雪蓮さまの勘は、よく当たりますからな」

＊＊＊＊＊

ついに始まった、楊燕の荊州攻略戦。予想以上の速さで迫る楊燕軍に対し、管理者にも見放された劉備陣営には、もはや打てる手は残されていなかった。
保有していた豫州を曹操に攻められ荊州に逃げたところで楊燕の進撃を受け、完全に追い詰められていた。朱里や雛里が何とか策を弄すも、そもそも兵の士気が極端に低く、反対に極端に士気が高い楊燕軍が相手では、勝負にすらならなかった。
そんな中、劉備軍の中でも一つだけ、統制された部隊が存在した。
「いよいよ、最後の戦いになりそうね」
迫る敵軍を目の前に、盧植は呟く。彼女は何とか弟子たちを正しい道に戻そうと、最後の最後まで奮闘したが、状況を改善するには至らなかったのだ。
前方では劉の旗が並ぶ。劉備の旗印ではない。敵軍の劉封の旗だった。楊燕軍の中で最も士気が高く、味方をも置いてきぼりにする勢いで怒涛の攻めを見せてきた軍だっ

た。盧植にとって、最後の戦いで対峙する軍が、まさか最後の弟子である劉封とは、これも運命の皮肉か。そして、その隣には廖の旗もあり、どう考えても形成逆転は不可能な布陣である。

漢を立て直す事もが出来ず、その過程で想い人に先立たれた。弟子たちを導く事も出来ず、今まさに滅びに向かっている。こんな愚かな師だが、もう一人の愛弟子が引導を渡してくれるなら、それもまた悪くない。そのような思いを胸に、盧植は前線へと向かっていった。

盧植の軍は、統制が取れていた。主の指示を理解し、よく動き、よく戦った。どれだけ劣勢に立たされても、決して乱れず、味方が斃れれば隣の兵が、その兵が斃れればさらにその隣の兵が、穴埋めをするように奮戦した。

しかし、それ以上に劉封の部隊は強かった。状況に合わせて陣を組み替え、しかも乱れを見せない。単純な兵力勝負になってくると、圧倒的に不利なのは盧植である。彼女の軍は見る見るうちに数を減らし、残るは盧植を含む数十人のみ。

（よく、ここまで立派に育ったものだわ）

最後の弟子の采配を目の当たりにして、盧植は目尻に涙を見せる。姉弟子二人がまるで駄目だっただけに、余計に劉封の活躍ぶりが際立っていた。戦ううちに、むしろ彼の手で引導を渡して欲しいとさえ、盧植は思っていた。

（師匠失格だけど、最期にあの子の成長が見られて、思い残す事は無いわね）
　ついに囲まれる、盧植の本隊。彼女は死を覚悟する。そんな彼女の前に、進み出て来たのは、劉封本人だった。
「風鈴先生っ！」
　盧植に、劉封が呼びかける。
「あなたの采配、見事だった。立派になって先生嬉しいわ」
　さあ斬りなさい、と剣を構える盧植。だが、劉封には盧植を斬る事はどうしても出来ない。
「風鈴先生、投降して下さい」
「それは出来ないわ。責任の一端は、御使いを諌められなかった私にもあるもの。それでも戦ってくれた兵たちを差し置いて、私だけが生きながらえるなんて出来ないわ」
　そう言うと、剣を振りかざして劉封に襲いかかる盧植。だが、そもそもの腕前が違いすぎる。そもそも、盧植は軍師タイプの人間であり、武の方はからっきし駄目だったのだ。
　劉封の一撃を受け、崩れ落ちる盧植。だが、血は流れていない。劉封が峰打ちで仕留めた為だ。
「……風鈴先生、申し訳ありません。俺にはどうしても斬れない」

以前、先生は仰った。先生にとって、弟子は子どものような存在だと。劉封にとっても、盧植は母親と同義だった。だから、子どもが親を斬れる筈が無い。それに、劉封が斬りたいのは御使いであって、盧植ではない。

峰打ちで意識を失って崩れ落ちる盧植の体を、劉封は強く抱き留めて支え続けた。

「どうやら、ボクたちもここまでみたいね」

盧植の遊軍として戦っていた賈駆であったが、ついに盧植が捕縛されたのを知ると、武装解除して投降を決意する。

「もう、詠ちゃんだけに苦労はさせない」

そして、その側には董卓。様々な紆余曲折があったが、賈駆が苦労してようやく連れ出したのだ。

御使いの本性を知ったとき、董卓は酷くショックを受けて寝込んでしまった。だが、賈駆だけに責任を背負わせられない、と出てきたのだ。ここまで馬鹿だったのだから、呂布の言葉を聞かずに見放されたのは当然である。だが、いつまでも目を背けてはいけない。自分でしたことの償いは、きちんとするつもりだった。たとえ、捕まった先で死を言い渡されようとも。

第四十二話

盧植らが捕縛され、愛紗ら劉備軍の主力が楊燕に蹴散らされ、勝敗は完全に決してしまった。劉備、御使いは江夏に立てこもって最後まで抵抗したものの、陥落。御使いは最後まで付き従った彼女らと運命を共にし、燃え盛る城内の中で、焔に飲まれて消えていった。

こうして、御使いとの戦争はあっけなく終わりを告げた、それは同時に、楊燕の前世から続く宿縁に終止符を打った瞬間でもあった。

楊燕の元々の行動原理は、いかに御使いに対抗して自身の平穏を得るかという事であった。まだまだ戦乱は続くものの、ひとまずは家族との平穏を得られそうで、ホッと一息ついたことだろう。御使いの存在が消えたことにより、楊燕の戦いは一旦終わりを迎えるのであった。

＊＊＊＊＊

盧植は今までを悔やんでいた。

この乱世であるから、弟子たちが争う事になるのは仕方が無い。だが、その弟子たちが揃いも揃って間違いを犯し、しかもそれを正すことが出来なかったのだ。劉備たちが立てこもった城内で焔の中に飲まれたと聞いた時、彼女は自分の役目が終わったと感じていた。

乱を鎮圧し、平穏な世が戻れば、漢王朝での役目を辞し、故郷でまた私塾を再開しようと思っていた。だが、弟子たちの末路を目の当たりにすると、自分の指導が正しかったのかどうかが分からなくなっていた。結局、残った主な弟子は劉封のみ。一体、自分は何を残せたのだろうか、と。

そんな調子だから、荊州での戦が終わってしばらく経っても、盧植は塞ぎ込んだままでいた。もはや、日々の生活に張り合いすらない。そんな様子の彼女に、一人の人間が訪れる。

「……アナタ、生きてたのですか！」

訪れてきた廖化を目の当たりにした盧植は、ひどく驚く。当たり前である。とうの昔に暗殺された筈の丁原が、目の前でピンピンしているのだから。

夢ではないか、と盧植は我が目を疑った。だが、何度見直しても廖化は、いや、丁原は目の前にいた。彼の姿をはっきりと認識した瞬間、盧植の目には、見る見るうちに涙があふれてくる。

「アナタっ！　生きてたのなら、生きてたで……」
あとは、言葉にならなかった。彼女は廖化の胸に飛び込むと、言葉にならない声で、想いの丈をぶちまけた。その勢いは、武で鍛えた筈の廖化が、思わず一歩下がってしまうほどだった。
「お！　おおっ……」
盧植の剣幕にびっくりしていた廖化だが、やがて彼はそっと盧植を抱きしめる。
分野は違えど同じ弟子を持つ立場として語らい、同じ四将として共に戦い、そして深く愛し合った。そんな二人が、再会を果たした瞬間だった。特に盧植の方は廖化に対して、戦乱さえ無ければずっと二人で生きていくのだ、とまで思い定めた相手である。感情を抑えろという方が無理な話であった。
「んっ……アナタ……アナタっ」
想い人を失った寂しさ、ずっと顔を見せなかった怒り。一度として彼を想わない日は無く、辛い時には必ず心の中で語りかけていた。だが、その時は応えてくれなかったのに、今になって現れて……。感情剥き出しにして全てぶちまける。だが、ごちゃごちゃになった感情が過ぎ去れば、後に残ったのは強い恋慕の情。盧植は普段の彼女からは考えられない様子で、廖化の胸に顔を埋め、泣き笑いの表情で甘え始める。
「アナタぁ……寂しかったのぉ、逢いたかったのぉ……」

（……風鈴って、見た目は確かに童顔だが、言動もこんなに幼かったっけ？）

そう思いながらも、久々に逢う恋人との再会に、廖化もまた感動していた。

「……風鈴、ただいま」

「……そうか、辛かったな」

盧植の話を聞いた廖化は、彼女の頭を優しく撫でる。ちなみに、二人もと抱き合ったままである。

「だが、よく頑張った。弟子を最後まで見捨てなかった。俺ならば、そこまで出来ない」

「でも、私は間違いを正せなかった……」

「風鈴がこれ以上気に病む事ではない。劉備たちも立派な大人だ。あとは当人たちの問題だろうよ。それに……」

それに、と廖化は言葉を続ける。

「……風鈴は自分の事を師匠失格と言うが、俺は充分師匠やってると思うぞ。風鈴ほど弟子思いの奴は、なかなか居ない」

「……ふぇぇ」

廖化の言葉に、盧植は泣き出してしまう。ずっと悩んでいた事だけに、廖化の言葉で感極まってしまったのだ。

「だがまあ、そんなに気に病むのなら……劉封だっけ？　残った奴の面倒は見てやれ」

「うん、そうする」
「風鈴も辛かったろうが、今一番辛いのは、あいつだろう。何せ、あいつにとっての姉弟子も、かつての恋人も、自らの手で死に追いやったのだ。何も思わぬ筈が無い」

?????

今回の荊州攻めで一番功があったのは、間違いなく劉封である。彼は先陣として怒涛の勢いで御使いを追い詰めたのだから。彼は復讐という目的を果たしたのだ。
だが、劉封の心はちっとも晴れなかった。御使いを葬ったとはいえ、直接斬った訳ではない。御使いが燃え盛る焔の中に身を投じるという結果に終わり、逃げられたような感覚だった。
それとは対照に、かつての恋人を劉封は斬った。御使いを追い詰めた時、劉封の前に立ちはだかり、抵抗したのだ。
斬らなければ、こちらが斬られていた。御使いを守ろうと必死な剣に対し、手加減など出来なかった。だが、かつての恋人を斬った時、劉封は自分の中で何かが失われたのを感じていた。とにかく、御使いは葬った。だが、かつての恋人はもう二度と現れず、そして姉弟子たちも御使いの後を追って焔の中に飛び込んだ。手を下したのは全て自分。

最悪の形で全て終わったのだ。

復讐を糧に生きてきた劉封。しかし、それを果たした今、残ったのは何とも言えない後味の悪さだけ。

今にして思えば、俺はあの時に死ぬべきだったかも知れない。一体この後どうすればいいのだろうか。劉封は一人、曇った空を見上げる。

「……俺は、どうやって生きればいい？」

劉封のその呟きに、答える者は無かった。